

# エデン条約短編祭

キノッピ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

ブルーアーカイブ作家陣によるエデン条約編に関する短編集となります。

3月1日（火）から3月10日（木）までの10日間にわたり、毎日20時に一話ずつ更新予定です。

総勢10名の作家による夢のようなお祭り。最後までお楽しみください！

※一部の作品はpixivにも掲載しています。

以下作品一覧と投稿順。（敬称略）

1. Wherever you are. (作・7MB)
2. 銃創と看護 (作・シユナ)
3. 秘密の勉強会 (作・スズノネ)
4. ヒナ☆ひなパニック! (作・マイケル)
5. もうひとつ未来 ↗ケツに痛みがあるなら ↗ (作・あおきみどり)
6. 盤上にて盤外、ただ観測するのみ (作・ブルアカ怪文書)
7. ホシノに背中を押してもらう話 (作・のりし炉)
8. 聖園ミカは仲良くなりたい (作・キノッピ)
9. おくりもの (作・莉結)
10. 誰かの夢のようなお話 (作・へきさ)

また素敵なイメージイラストをCrown先生よりいただきました。  
表紙として利用させていただいています！

目次

Whoever you are. (作・7MGB)	30
銃創と看護 (作・シユナ)	42
秘密の勉強会 (作・スズノネ)	53
ヒナ☆ひなパニック! (作・マイケル)	73
もうひとつ未来 → ケツに痛みがあるなら (作・あおきみどり)	82
盤上にて盤外、ただ観測するのみ (作・ブルアカ怪文書)	104
ホシノに背中を押してもらう話 (作・のりし炉)	118
聖園ミカは仲良くなりたい (作・キノッピ)	140
おくりもの (作・莉結)	
誰かの夢のようなお話 (作・へきさ)	

# W h e r e v e r   y o u   a r e . (作・7 M G B)

ある晴れた秋の朝。

不快な湿度と暑さに満ちた夏のそれと違つて、秋の風は心地良い涼しさを運んでくる。

そんな風に、道路脇の工事現場のブルーシートの端がたなびいた。トリニティの街並みにはやや似つかわしくない原色の青は、まるでそこだけ風景のテクスチヤが剥がれてしまつてゐるような、酷く浮いた印象を見る者に与える。

先日のエデン条約事件の残した傷跡が、確かにそこにあつた。

しかし、人の心とは案外丈夫というか、そんなことには無頓着なもので、先日の大事件にも関わらず、今朝もトリニティへの通学路は元気な生徒達で賑わつてゐる。

ともすれば、修繕が必要な建物や道路よりも、少女たちのメンタルはよっぽど頑丈なのかもしれない。

下江コハルは寝ぼけ眼を擦りながら、そんな通学路を歩いていた。

事件の記憶もまだ新しい中、それでも授業はある。トリニティ本校舎が比較的被害を受けなかつたのは、この場合幸か不幸か——少なくとも、事件のせいで休校になつた為に詰まつたカリキュラムを消化しなければならない彼女にとつては、不幸と呼べるのだろう。

「少し、ほんのすこーしくらい派手に壊してくれたら良かつたのに……」

その場合、休校期間が長くなつてより苦しくなるのだが、今の彼女にはそこまで考えが及ばないようだ。

連日の復旧作業の手伝い、そして遅れたカリキュラムの消化、更是授業毎の小テスト。知力、体力、なんなら小テストで転がす鉛筆によつて、時の運までも日々すり減らしてゐる彼女がそうやってボヤくのも、仕方のないことなのかもしれない。

「あら。コハルちゃん、おはようございます♡」

そんな中、コハルの後ろからおつとりした、それでいてどこか艶っぽい挨拶が飛んできた。

「……おはよ」

「今日もコハルちゃんは良い匂いですね。体の芯から火照っちゃいます」

「人を怪しい薬みたいに言わないでよ！」

「そんな怪しい薬だなんて……。私はコハルちゃんのありのままの匂いが、何だか媚薬みたいだと思つただけで……」

「私がオブラーートに包んだ意味！」

いつもの調子のハナコに、コハルも釣られてしまう。先程までの眠たそうな顔はどこへ行つたのか、目を白黒させながらも的確にツッコミをする。

「それにしても、ここで会うのって珍しいわね。普段は会わないのに」「たまに通学路を変えると、何だか新鮮な気分になれるんですよ。登校が憂鬱になるのも予防できたりします」

「へえ。私も今度やつてみようかな」

「是非試してみてください。小さな変化でも、日々のスペースになりますから。例えば今日の私は、服を着て登校していますし……」

「普段全裸の前提で話進めないで！」

そんな風にいつも通りのやり取りをしながら歩く二人だったが、やがて何かに気付き歩みを止めた。

通学路の先、トリニティ正門前ににちよつとした人集りが出来ていたのだ。生徒が集まって、どうやら誰かを取り囲んでいるようだ。

……とは言つても、ここはトリニティ。字面ほど物騒な雰囲気はまるで無く、どちらかと言えば街中で有名人を見つけた時のように、各々目を輝かせながら輪の中心の人物に話しかけていた。

「何だろ、あれ？」

「うーん……。芸能人の方……、は朝から学校に来たりしませんし

……」

気になつた二人は、人集りの方へ近づいていった。先程の距離では取り巻きの生徒達が何を言つているかまでは聞こえなかつたが、近づくにつれ徐々に内容も聞き取れるようになり、二人は耳を傾けた。

「すごい！本物だ！」「握手してもらつていですか？」「あ、ズルい

「私も！」「あ、あの、良かつたら今日お昼でも……」「抜け駆けは駄目だよー！」

「ですよね！ヒフミ様!!」

「……今、何か聞き覚えのある名前が」

「私も聞こえた気がしますね」

コハルとハナコがお互いに顔を見合わせると、人集りの中心から聞き慣れた声がした。

「コハルちゃんにハナコちゃん！私ここです～！」

——やや小柄な彼女は、すっかり人集りに埋もれてしまい、普通に立つてているだけでは頭のてっぺんしか見えなくなってしまっていた。そんな人集りからぴょんぴょんとジャンプをして二人に手を振つていたのは、果たして彼女達が予想した人物。

すなわち補習授業部部長、阿慈谷ヒフミその人だった。

「で、今朝のあれは何だつたのよ」

昼休み、いつものようにトリニティスクエアのベンチで集まつたヒフミ、コハル、ハナコ。

コハルは手に持つた紙パックのジュースを飲みながら、今朝の奇妙な光景についてヒフミに尋ねる。

「実は……。先日アリウスの生徒さん達の前で色々と言つてしまつた時の動画がSNSで流れてしまつたらしく……」

「動画？」

「はい。これを……」

ヒフミがスマートフォンを見せると、端末からは彼女自身の声が聞こえてくる。

『私達の、青春の物語を！』

「あ～……、これね……」

「こ、こうやつて改めて見ると恥ずかしいです……」

コハルが画面をスワイプすると、動画のコメント欄が現れる。コメントはどれも『カッコいい！』『感動した』等、好意的なものばかりであつたが、何しろその量がおびただしい。

誹謗中傷のようなコメントが無いのは幸いだが、この人気っぷりでは今朝のように人が集まるのも頷ける。

「なるほど、ヒフミちゃんの勇姿を見てファンの娘が沢山出来てしまつた……ということですね」

「まつ、良いんじやない？別に嫌がらせとか受けてるわけじやないんでしょ？」

「ま、まあそなんですが……。あの時は本当に皆さん頑張っていたのに、何故か私だけがこうやつて持て囃されるのは……」

「それは違う、ヒフミ。それだけ多くの人がヒフミに勇気をもらつたということだ」

その声が聞こえるが早いか、3人の頭上にある木の枝から、逆さまにぶら下がつたアズサが突如として姿を現した。

「キヤアアアアアアアアッ?!?どどどど、どつから出てきたのよ!!」

「？見ての通り木の上からだが……」

「そういう事じやない！」

驚きのあまり持つていたジュースを握りつぶしてしまったコハルとは対照的に、アズサは平然とそのままの姿勢で木から飛び降りる。空中で器用に一回転し、キレイに両足で着地。猫を思わせるような軽やかさは、体操ならば10点満点の嵐だろう。

「もしかしたらヒフミのファンの振りをして敵が現れるかもしれないからな。周囲を警戒していた。今の所は問題なかつたが」

「あはは……。ありがとうございます、アズサちゃん……」

ゲリラ戦の達人、白洲アズサ。いついかなる時も警戒し、チャットですらもコードネームを使う彼女にとつては、最近になつて急に増えたヒフミのファンが怪しく見えるのも当然と言えば当然なのだろう。どうやら木々の間や茂みを移動していたようで、纖細に輝く銀髪に

は木の葉が数枚引つかかっていた。

「アズサちゃんは相変わらずですね。……あら？」

ハナコの視線が、少し遠巻きからこちらを見ている生徒の姿を捉える。

3人組で、どうやらこちらに話しかける機会を伺つており、誰が最初に行くか相談しているようだ。

「噂をすれば早速、ヒフミちゃんファンの皆さんですね♡」

「ホントだ。しかも今朝の娘たちとはまた別だわ。すつごい人気ね」

「どうやら敵意は無いようだが……」

向こうの生徒も、補習授業部の面々が見ていることに気付いたのだろう。

少しだして、3人で一緒にヒフミ達の前に歩み寄つて来た。

「あの、阿慈谷先輩ですよね……？」

「は、はい！」

後輩に話しかけられているのに、何故か緊張しているヒフミ。先輩が背筋を伸ばしながら答える姿に、話しかけた彼女たちも釣られて姿勢を正し、気をつけの姿勢で横一列に並んだ。

「じ、実は私達、あの動画を見まして！」

「それで、先輩にお近づきになりたいなと思つたんですね！」

「び、迷惑でなければ、お昼ごはんでも一緒にいかがですか！」

まるで訓練中の軍隊のように声を張り上げる3人組。憧れの先輩をお昼にお誘いするとなれば、それぐらいの気概は必要だということなのだろうか。

「えっと、お誘いは嬉しいのですが、今日はですね……」

ヒフミがチラリと後ろを見る。既に補習授業部が集まっているので、今日のところは断ろうとしているようだがハナコはそんな彼女の視線を察して、どうぞとジェスチャーをする。

「良いんじゃない？せっかく来てくれたんだから、一緒に行つてあげなさいよ」

「うん。私もヒフミがそうしたいなら良いと思う」

「み、皆さん……。じゃあ、こんな私で良かつたら、一緒させて頂きま

す！」

ヒフミはそう言つて3人組の方に向き直る。「では、こちらに！」と嬉しそうに案内する後輩に付いて行くヒフミ。その姿を三人はしみじみと、感慨深そうに見つめていた。

「凄い慕われてるわね……」

「まあ、ヒフミちゃんは唯でさえ一緒にいると安心しますからね。そこにあんなにカッコいい動画が広まれば、それは人気も出るでしょう」

「でも、アンタは良かつたの？ いつも一緒にいたじゃない」

「私は、ヒフミに沢山のことを教えてもらつた。そんなヒフミの良さを他の皆さんにも知つてもらえるのは、素敵なことだと思うから……。だから大丈夫だ」

「アズサちゃんは大人ですね。じゃあ私達は3人で大人なランチでも……♡」

「へ、変な言い方しないの！」

この時、3人は知る由もなかつた。悪事千里を走る、好事門を出でず——しかし、全ての物事がそうなる訳ではないということを。

悪事が千里を走るのであれば、偶然門の外に出た好事は、それこそ万里すらりとも容易く駆けるということを。

一週間後、とある朝。  
下江コハルはその日も、寝ぼけ眼を擦りながら通学路を歩いていた。

そんな彼女を咎めるように、被せられっぱなしの工事現場のブルーシートが、パタパタと風に揺られて音を立てる。

しかし、先日と違う点が一つ。隣を歩いているのは浦和ハナコではなかつた。

「コ、コハルちゃん。私、バレてませんかね……」

そこにいたのはサングラスにマスク、ニット帽という絵に描いたような、ぶつちぎりの不審者だつた。

勿論、天下のお嬢様学校であるトリニティ総合学園の通学路に、不審者などそう簡単に出来るはずもない。

よく見ると、ニット帽からは亞麻色の髪が出ており、そもそも背負っているバッグはモモフレンズの有名キャラクター、ペロ口様のグッズだつた。

つまり分かりやすく言えば、コハルと一緒に登校していたのは変装したヒフミだつた。

「……今の所はね。時間の問題だとは思うけど」

特徴的過ぎるバッグをやや鋭い視線で見ながら、コハルが返事をした。

いくら変装をしてもペロ口様だけは捨てられないという彼女の信念なのか、それとも単に忘れているだけなのか。

どちらにせよ、あまり巧妙とは言えない変装がバレるのは、彼女の言う通り時間の問題のように思われた。

「うう、まさかこんな事になるなんて……」

「ホントね。今朝、その姿で急に話しかけられた時は思わず撃ちそうになつたけど」

コハルの言う通り、かなり怪しい格好ではあるものの、しかし周りを歩く生徒はそんな彼女には目もくれず、一心不乱にSNSの情報をチェックしている。

「ねえ。今日はヒフミ様の目撃情報あつた？」

「いつもならこの時間、ここ辺りを通るつて聞いてるけど」

「そーいえば最近、通学路変えたつて聞いたよ！」

「それ実はデマなんだつて。こうやつて情報を錯綜させて、ヒフミ様を独り占めするつもりよ！」

「……あれ。意外にバレないのかも」

「良かつた……。このまま学校まで行ければいいんですけど」

この一週間で、ヒフミを取り巻く環境は一変した。

生来の頼み事を断れない性格故に、色々な生徒とランチを一緒にし

たり、放課後に出かけたり、お悩み相談を受けたりするうちに、ヒフミの人気は際限無く上がつていったのだつた。

動画の活躍に加え、優しくて人当たりの良い性格。まさに物語の主人公のようなヒフミに、トリニティの生徒達は次々と虜になつた。今ではヒフミファンクラブ、阿慈谷ヒフミ親衛隊、阿慈谷先輩を愛する会など、トリニティ名物の派閥争いもかくやと言わんばかりに、ヒフミファンの集いが数多く結成されている。

「幸い、学校では皆さんあまり集まつてこないのですが……」

「一回ファンクラブ同士の抗争で正義実現委員会が出動しちやつたからね。それ以来校内ではあんまり騒がないようにしてゐたい」

「あはは……。そ、そんなことに……」

自分の預かり知らない所で、まさか不戦条約まで結ばれているとは思ひもしなかつたのだろう。

マスクとサングラスの上からでも分かるくらい、普段彼女が困つたときの数倍、とびつきりに引きつた笑顔を浮かべた。

——その瞬間だつた。周囲の生徒が一斉にヒフミの方を見る。

「今のお可愛らしい笑い方……」「清らかな鈴の音のようなお声……」「帽子からはみ出ている纖細な御髪……」「間違いない……」

「ヒフミ様くっつ！」

「バ、バレちゃいました！ 急いで学校まで行きましょうコハルちゃん！」

(ていうか、そんな些細なことで見つけられるのに、あの変装は見抜かれなかつたんだ……)

目をハートにして追いかけてくる少女達を振り切るように、全力でトリニティの正門まで駆ける。

そんなヒフミの姿を一目見ようと、登校中の他の生徒達はまるでマラソン大会のように道路の脇に立ち止まり、彼女が駆け抜けれる花道を作り出す。

駆ける二人、追うは無数のトリニティ女子。

「……ヒフミ」

しかし、そんな光景を遠巻きから、少し寂しそうに見つめる生徒がいたことに、ヒフミもコハルも気付くことはなかつた。

「酷い目にあつたわ……」

その日の昼休み、いつも補習授業部で集まつてゐるスクエアのベンチにはコハル、アズサ、ハナコの三人が來ていた。

今朝の出来事を思ひ出しながらやや不機嫌そうにストローを噛むコハルを、ハナコがその頭をよしよしと撫でて窘める。

「でも確かに、ここ何週間かでヒフミちゃんの人気は更に高まりましたね……。正直ここまでになるとは思いませんでした」

ハナコがそう言つて視線を向けた先では、何人もの生徒がスマホの画面を見ながらヒフミの良さについて語り合つてゐるところだつた。他にも、広場にいる生徒同士の会話に耳を傾ければその殆どがヒフミに関する話題であると分かる。

「ファンクラブならトリニティでも偶にあります、まさか通学路で追いかけられる程とは……」

「私は今朝だけだつたけど、この分じゃ大変ねあいつも。それに、こつちはこつちで何か拗ねちゃつてるし」

コハルが傍らをチラリと見る。そこには見事に口を『への字』に曲げたアズサが、ベンチの隅に体育座りですっかり収まつていた。

「いや。拗ねてない。ヒフミが色々な人から人気があるのは良いことだ」

「そんなこと言つて。つていうか、護衛には付いてないのね。意外

「前にヒフミから大丈夫と言われたからな。だから最近は行つていな

い」

「なるほど。それで会える時間が減っちゃつて寂しいんですね♡」

「いや、寂しくない」

「そう言つてつん、とそっぽを向いた。普段のさっぱりした性格のアズサから考えると、珍しい態度だつた。

「今日は来ると言っていたのですが、また誰かに捕まっているのでしょうか」

「かもね。頼まれたら何だかんだ断れない性格してるし」

「人がそんな風に話していると、広場の向こうから見覚えのあるシリエットが走ってやって来る。」

「みなさーん！遅れてすみません～！」

「ヒフミ！」

いち早く気付いたアズサは、一瞬でベンチから立ち上がりるとパタパタと嬉しそうに駆けよつていく。

「ヒフミ、大丈夫だつたか」

「そんな大げさな……。でも、遅れちゃつてごめんなさい。アズサちゃん」

「問題ない。さあ、早くみんなでお昼を食べよう」

アズサがヒフミの手を引いてベンチへとやつて来る。その表情はさつきとは打つて変わつて随分と満足そうだ。

「遅かつたじやない。また他の生徒に捕まつてたの？」

「いえ、最近はむしろ校内では皆さん道を空けてくれるくらいで。……まあ、それも逆に歩きにくいといえば歩きにくいんですけど」

「じゃあ、何があつたのよ」

「実は、こんなお話を頂きまして……」

そう言つてヒフミはリュックから一枚のプリントを取り出して三人に見せる。

そこには「放送部企画 特別インタビューについて」という題字が書かれていた。

「放送部の企画？」

「はい。今回は学校内の有名人にインタビューをするとかで、私に出てほしいと……」

「企画書によると、いつものお昼の放送とは違つて、トリニティスクエアにステージを作つてそこで行うみたいですね。衆人環視の中、ヒフミちゃんのあんな事やこんな秘密がつまびらかに……♡」

「ちょ、ちょっと！ エッチな企画じゃないでしようね！」

「いやいや違いますよ!?」

「ところでつまびらかって言葉、ちょっとエッチな響きだと思いません?」

「ハナコちゃんもちよつとストップです!」

「それで、ヒフミはその。これには出るのか?」

アズサの問いかけに、ヒフミは少し困ったように笑いながら「それが……」と返す。

「こんな私がここまで大きいイベントに出るなんて、なんだか想像したこともなくって……。最初は断つたんですけど、もう少しだけ考えてほしいってお願ひされちゃって」

「確かに、ステージをわざわざ作るなんて規模が凄いですからね」「もういつそ断つちゃえば?」こういうのは早めに返事した方が向こうも助かるだろうし」

「うーん……。良いんでしようか……」

そう言つて腕を組んで悩むヒフミに、アズサは一瞬だけ悩む素振りを見せて、それからにわかに口を開いた。

「……私は、ヒフミが出ても良いんじゃないかと思う」

「ア、アズサちゃん?」

アズサの意外な発言に、ヒフミが驚いたように聞き返す。

「もちろん、一番大事なのはヒフミの気持ちだけど……。でも、沢山の人がきっとヒフミのことをもつと知りたがっているはず。もしヒフミも、出ても良いと思っているなら私は応援したい」

「確かに、私も絶対に嫌という訳じやないんですけど……」

そんなアズサの言葉に、ヒフミは更に目をつぶり、うーんと唸つて考え始める。

コハルはアズサの脇腹を肘で突き、ヒフミに聞こえないように少し声を抑えて話しかける。

「ちよ、ちよつと良いの?この話を請けちゃつたら今よりもっと会える時間減っちゃうわよ?」

「別に、ずっと会えないって訳でもないから。それに……」

アズサは少しだけ迷うように視線を落とし、それからコハルに向き

直った。

「私は、ヒフミの友達だから。友達の成長や旅立ちは応援するものだつて聞いたことがある。だから私は応援してあげたい」

「でも……」

「……。それで、ヒフミさんはどうしますか？」

「そ、そう言つてくれるなら私、頑張つてみようかなと思います！」

「そうか。応援しているぞ、ヒフミ」

アズサの言葉を聞いて決断したヒフミ。そんな彼女を見て、アズサは笑顔で応援する。

だが、ハナコとコハルは彼女のそんな笑顔を、どこか心配そうな表情で見つめるのだった。

その日のうちにヒフミが放送部に出演OKの返答をすると、翌日からは本番に向けて準備の毎日が始まった。

今回のイベントの主役ということもあり、ステージの構成や当日の段取り、質問内容の事前取り決め等、単なるインタビューの回答者には留まらない仕事量だった。

ヒフミ自身、こういったイベントに開催側として参加するのは初めてだつたため、慣れない仕事に苦戦していたが、幸いにも放送部の生徒たちは今までにも何度かこのような企画を開催したことがあったようで、そんな彼女を上手くサポートしていた。

しかし、当然ながら忙しい。それはもう目が回るほどに忙しく、授業以外の時間は殆ど打合せのために放送部の部室にこもりつきりになってしまった。

「……」

その日も、昼休みのベンチにヒフミは来ていなかつた。

昼のチャイムが鳴る少し前からそこに座っていたアズサは、何をするでもなく少し寂しそうな顔で頬杖をついて佇んでいた。

「アズサちゃん、横座りますね」

「もう来てたのね」

「あ、一人とも……」

後からやつてきたハナコとコハルが、軽く挨拶を交わし並んで座つていく。

アズサは先ほどよりも元気そうな顔にはなったが、やはり普段の彼女と比べてやや声のトーンが低く感じられた。

「相変わらず元気ないわね。別に普通に会いに行つてもいいんじやない？」

「そうですよ。ヒフミちゃんも迷惑には思つたりしないでしようし」「いや……。今はイベントの方に集中してほしいんだ。ヒフミはきっと私が行けば一緒にいてくれるだろうけど、それだと準備の時間を減らしてしまいかもしれない」

「うーん。まああいつ、そういう所律儀だから確かにそんな感じにもなっちゃうかもしねりないけど……」

「だから私はその、大丈夫だ。私はヒフミの友達だからな」

伏し目がちにそう言つたアズサに、コハルは何も言うことが出来なかつた。

確かに、ヒフミの性格を考えれば会いに行つたアズサを放つておくことはしないだろう。

しかし、それはこの忙しい時期に時間を割かせてしまうことに他ならないというアズサの意見は一理ある。それならばいっそ、イベントがひと段落するまではそつとしておくのが良いのだろうというのも、正しいように思える。

しかしそうやつて考へている一方で、コハルには尚その選択が正解とは思えなかつた。

同じ部活の仲間が、目の前でこんなに寂しそうな顔を見せるような、そんな選択肢が果たしてベストなのだろうか。

コハルは、そんな矛盾した思いに頭を悩ませる。

「……アズサちゃん、コハルちゃん。私、こう思うんですけど」

そんな二人を見かねて、ハナコが口を開いた。普段は過激な発言でコハル達を困惑させる彼女だが、しかしその洞察力は補習授業部どころかトリニティでもトップクラスに鋭い。

二人の中にある如何ともしがたい気持ちを察したハナコが、助け舟を出そうとしたその時、どこかで聞き覚えのある音楽が流れ始めた。

「あれ、すまない。着信が……」

アズサのポケットから聞こえてくるそれは、モモフレンズのテーマソングだつた。以前ヒフミと一緒に買い物に出かけたときに設定したな、とアズサは思い出す。

「ヒフミからだ！」

ディスプレイに表示された名前を見て、アズサの表情が一気に明るくなつた。急いで画面をスワイプし、通話に出る。

「もしもしヒフミ？」

『あ、アズサちゃん！今大丈夫ですか？』

「ああ、勿論問題ない。何かあつたのか？」

『実は今日、放課後時間が空きそうなので、久しぶりに一緒におでかけ出来ないかなと思いまして……。先週から始まつたモモフレンズの映画にみんなで行きませんか？』

『本当に？……うん、絶対行く！今、二人にも聞いてみる！』

アズサがスマートフォンから耳を話すと、コハルとハナコにも話の内容は聞こえていたのだろう、二人とも質問されるよりも前にふるふると首を横に振つた。

「二人は行かないみたいだ……。でも私は大丈夫。絶対に行く

『ありがとうございます！じゃあ、放課後に会いましょう！』

そう言つてヒフミは通話を終えた。スマートフォンをポケットにしまつたアズサの顔は、今までの憂鬱な表情が嘘のように輝いていた。

「二人とも本当に良いの？私に遠慮なんかしなくても……」

「いや、まあ遠慮つて訳じやないけど……」

「こ、今回は一人つきりで楽しんできてください」

相変わらずモモフレンズが若干苦手な二人は、少し顔をひきつらせながら、それをアズサに悟らせないように笑顔で返す。

アズサはそんな様子に気付くことなく、『ヒフミと映画、ヒフミと映

「映画！」と楽しそうに口ずさみ、その場でくるくると回る。

「こうしてはいられない。早速今日の準備をしなくちゃ！」

そう言つたが早いか、アズサはその自慢の身体能力から来る健脚で、あつという間に自分の部屋へ去っていく。

残されたコハルとハナコは、その後ろ姿が小さくなるのをしばらく眺めていた。

「……ま、良かつたんじやない？あんなに楽しそうにしてるの、久しぶりに見たし」

アズサの姿が見えなくなつたあたりで、コハルはやれやれといった感じでそう言つた。

しかし、ハナコはまだ氣になるところがあるようで、目を閉じながら何やら考え方をしていた。

「どうしたのよ、そんな風に考えこんじやつて」

「そうですね、色々と思うところがありまして……」

怪訝そうに尋ねるコハルに、ハナコは少しだけ、いつもよりほんの少しだけ眞面目な微笑みを向ける。

「コハルちゃん、今日の放課後空けといてくれませんか？」

「映画、映画……！」

自室に戻ったアズサは、早速準備に取り掛かつた。

着ていく服は何にしようか迷つたが、散々悩んだ末にいつも通りの制服に決めた。

せつかくモモフレンズの映画に行くのだからと、何かぬいぐるみを持つていこうと思い、時間をたっぷりかけて考え、最終的にはお気に入りのスカルマンをカバンに入れだ。

そうこうしているうちに時間は過ぎ、待ちに待つた放課後を告げるチャイムが近づいてきた。

もう完全に午後の授業をすっぽかした形にはなるのだが、アズサの頭からはそんなことはすっかり抜け落ちている。

「そうだ、そろそろヒフミに連絡しよう……」

そう思つた直後、アズサのスマートフォンから先ほどと同じメロディーが流れる。ヒフミからの着信だつた。

「こちらアズサ。ヒフミ、どうかしたのか？」

『「ごめんなさいアズサちゃん。今日の予定なんですけど……』

先ほどのウキウキした声のトーンとは違い、今度は申し訳なさそうなヒフミの声がスマートフォンから聞こえてくる。

『実は打合せが長引きそうで……。絶対に行きますから、一本後の上映に変えられますか……？』

「……えつと」

突然の話に、アズサは一瞬戸惑いを見せる。電話口からはヒフミの謝る声が聞こえてくる。

『時間はえつと、今送信した写真の回なら行けると思いますから……』

「い、いや、その……」

アズサはそんなヒフミの声を聞きながら、少し目を伏せ、そして一瞬迷つてから――。

「いや、そういうことならまた今度にしよう」

『え、えつとアズサちゃん……？』

「あまり遅い時間に行つても明日に響くだろうし……、わ、私も、ゆっくり時間が取れる時で大丈夫だから。だから、その、今日は大丈夫だ。……そ、それじゃあ！」

アズサはそう言つて通話を切つた。最後にヒフミの声が聞こえたのが、なぜだか分からぬが彼女の胸を少し締め付けた。

スマートフォンを机に置いて、ベッドに倒れこむ。カバンの中のスカルマンをぐいと引き寄せ、強く抱きしめ顔をうずめた。

ヒフミ、と彼女の名前を呼びたくなつたが、なんだかいつもより情けない声が出そつたので、どうにかしてしてそれを胸の奥に押し込めた。

秋の日は、思つて いるよりも短い。

時計は五時を回つたくらいでも、すつかり太陽は低くなつて、赤い

夕焼けが薄雲を照らす。

白洲アズサは夕焼けが差し込む体育館で、一人何をするでもなく佇んでいた。

ここはトリニティの合宿所。以前、補習授業部が使った施設である。

来た意味は特になかった。強いて言うならば、昔みんなで——補習授業部で過ごした場所にいたかったのだ。

みんなで退学の危機を乗り越えるため、そして学園の危機を打ち破るために戦ったこの場所は、いつしかアズサにとつて何よりも特別な場所の一つになっていた。

「……」

これで良かつたのだ、とアズサは頭の中で繰り返す。

そうだ、わざわざ忙しい時期に無理をしなくとも、また時間を探せばいいのだから。

そうやつて納得しようとしていたが、彼女の中に引つかかる『とある気持ち』は、指先に木の棘が刺さつた時のような不快感をずっと残していた。

「……はあ」

やがて立ちっぱなしが面倒になり、その場で座り膝を抱え込む。そいえば少し前に、どこかの路地裏で同じように座っていたなどアズサはぼんやり思つた。

そうして、暫く時間が経つた頃——。

「あら」

体育館の扉が開かれ、一人の人物が入ってきた。

スラリとした手足、腰まで伸びた長髪、純白の翼。

——トリニティ総合学園ティーパーティー所属、桐藤ナギサの姿がそこにあつた。

「珍しい人がいますわね。お久しぶりです、白洲アズサさん」

「……桐藤、ナギサ」

「横、座りますね」

「どうしてここに?」

「あら、学園の施設を使ってはいけませんか？……なんて、冗談です。実はここ、結構お気に入りなんです。普段誰も使う人がいないので、休憩にぴったりで」

「セーフハウス、あれだけあるんだから使えばいいのに」

「あそこは何かあつたときに使うので、少し気が張り詰めてしまうんです。今日みたいに何となくうろつく日には、ここが一番なんですよ」

「……そつか」

疑っていた者と、疑っていた者。

元々は酷く剣呑な関係にあつた両者だが、今では同じ場所に同じ座り方でそこにいた。

それはなんだか奇妙で、それでいてどことなく落ち着いた状況だった。

アズサは先ほどよりも、少しだけ気が楽になるのを感じた。

「何があつたか、聞いても大丈夫ですか？」

「……別に。ヒフミがイベントの準備で今日予定が合わなくなつて、それで暇になつて、やることが無いから来ただけ」

「なるほど。それで寂しくなつたけど、どうすれば良いか分からなかつたと」

「別に寂しくなんか……」

寂しくない。

アズサはそう言い返そうとして、言葉を止めた。

何秒かして、もう一度口を開く。

「寂しい」

小さな声だつた。そこにいたのは、ゲリラ戦の達人、戦闘のエキスパートのどちらでもなかつた。ただの一人の、小さな女の子だつた。「ヒフミと会えなくて、おしゃべり出来なくて、寂しい」

「それでここに？」

ナギサの問いかけに、アズサは首を横に振つた。

そして、暫く黙つていたがやがてぽつぽつと話し始めた。

「ヒフミと会えないのは寂しいけど、でもそれだけじやないんだ。

……私は、ヒフミがどこかへ行つてしまいそうで、怖かつたんだと思う

「……怖かつた、ですか」

「私は今まで、友達がいなかつた。アリウスにいた時は友達とか考へる事もなかつたから。だからヒフミや補習授業部のみんなは、そんな私に出来た初めての友達だつたんだ」

「……」

「友達の成功や挑戦は応援してあげるものだつて、聞いたことがある。だから私は、友達のヒフミを……、初めて出来た友達のヒフミを応援してあげたかつた。でも、なんだかいつの間にかヒフミが遠くに行つてしまいそうで……。でもそんな風に考える私なんかが、ヒフミの友達でいられるのかなつて。そう思えてしまつたんだ」

いつの間にか、アズサの声は涙混じりのものになつっていた。それでも涙を流していないのは、彼女の強さ故なのだろう。それは考え方によつては、悲しい強さだつた。

「いつか私は、本当に大切な時にヒフミのことを考えてあげられるんだろうか」

やがてアズサは話し終えると、自分の両膝を抱え直した。それはもしかすると、彼女の中の不安の表れなのかもしれない、ナギサは思つた。

「……そうでしたか」

ナギサはアズサの話を聞き終えると、瞳を閉じて少し考える。やがて、彼女に向き直り微笑んだ。

「ではここは私が、お礼に教えて差し上げます」

「……お礼？」

「はい。先日頂いた、弾倉一つ分。その弾丸のお礼です」

ナギサはそう言つて、悪戯っぽく笑つた。

それは以前の厳肅な彼女からは考えられない、それでいて年相応の可愛らしい仕草だつた。

「まず一つ。友人のあり方に決まりなどありません。初めての友人を大切にしたいのは分かりますが、一般論なんてあまり真に受けてはい

けませんよ」

「……」

「二つ目。友人関係というものはそう簡単に無くなったりしません。一時期騙し合っていた私達ティーパーティーを見てください。今では仲良くお茶会をしていますよ」

まあセイアさんとミカさんは相変わらずですが、とナギサは付け足した。

アズサは不思議と、そんなナギサの言葉を自然に受け入れることが出来た。

それは偏に、ナギサの言葉の端々からにじみ出る、包容力とも呼べる不思議な余裕によるものだつた。

以前にアズサが会つたナギサは、猜疑心に囚われた余裕のない少女だつた。他人を疑い、自分の身を守ることに必死になつていた。

しかし、エデン条約事件を超えて、友との危機を乗り越えた彼女の言葉には、確かな慈愛と包容力があつた。アズサはそれを無意識のうちに感じていたのだった。

「三つ目。きちんとヒフミさんと話しましたか？勝手に一人で抱え込んでないですか？」

「で、でも……。それでもしケンカになつたりしたら……」

「その時はまあ……、お互い心行くまでケンカするのも良いかもしませんね。ヒフミさんはあれで結構お強いらしいので、もしかしたら苦戦するかもですが」

「そ、そんなこと……」

「良いんですよ。もちろん仲直りが出来る程度に、ですけど」

「……」

「友人関係は、阿つてはいけませんが慈しむだけでもダメです。疑うことは褒められませんが、盲信は意味がありません。私は先日の一件で、それを学びました」

そう言つてナギサは、アズサの目をじつと見つめた。そこには以前のような疑いや敵意は無かつた。ただ真つすぐで、真摯なその視線は『貴女ならきっと分かります』とアズサに伝えているようだつた。

「それに、ヒフミさんは友人が応援してくれないからと言つて、それでその人を置いてけぼりにするような人ではないでしよう。それは、貴女も知っていますよね？」

その瞬間、アズサの脳裏にはある光景が広がった。

エデン条約事件、その渦中。戦場にいる自分のもとに、ヘンテコな仮面を被つて駆け付けた彼女の心からの言葉、その時の光景が――。  
「……そうだった」

『私たちは、違う世界にいるなんてことはありません！』

『同じです！隣にだつていられます！』

『一緒にいられないだなんて……そんなことを言わないでください！』

そうだ。彼女は命懸けで自分に伝えてくれたのだ。

私たちはどんな時も、隣にいられると。

（それなのに、私は勝手に塞ぎ込んで……）

アズサはナギサを見つめ返した。その視線は、先ほどまでの弱々しいものではなく、しかし無暗に強がつているものでもない。

ただ、いつもの白洲アズサがそこにいた。

「ふふ。では私はこれで……」

ナギサはそんなアズサを見て、満足したように立ち上がり出入口の方に歩いて行つた。

「え、もう行つてしまふのか？」

「はい。もつと貴女と話すべき人がいらつしやいましたから」「それつて誰が……」

「アズサちゃん！」

ナギサが立ち上がりると、体育館の扉が勢いよく開かれる。

恐らくここまで走つてきたのだろう。そこには息を切らしながらも、アズサの姿を見つけてホッとしたような表情のヒフミの姿があつ

た。

「つてナギサ様!? どうしてここに……」

「いえ、単なる偶然ですよ。では私はこれで……」

そう言つて驚くヒフミの横を、ナギサは軽く会釈をしながらすれ違  
い、体育館から出て行つた。思わぬ人物との遭遇に呆気にとられてい  
たヒフミだったが、本来の目的を思い出し、アズサのもとに駆け寄つ  
てくる。

「ヒフミ、どうしてここに……」

「さつきの電話で、アズサちゃんのことが心配になつちゃつて……。  
それで、学校の中でアズサちゃんがいそなうな場所を探してたんです  
【でも、イベントの準備は……】

「そんなの関係ありません!……まあ、勝手に出て來たので後でフオ  
ローしなくちゃですけど」

えへへ、と笑うヒフミだつたがよく見ると靴は泥まみれで髪は汗で  
へばりついている。ここにたどり着くまでに、相当走り回つたのだろう。

「アズサちゃん、少しお話しませんか?」

「うん……」

そう言つて、ヒフミはアズサの横に座る。先ほどの電話のことが気  
まずいのか、おずおずと視線を泳がせるアズサだつたが、穏やかに自  
分を見つめているヒフミの視線に気付くと、安心したように彼女の目  
を見つめた。

「……」

「……」

沈黙。ヒフミは必死になつてアズサを探すあまり、見つけた後のこ  
とを考えていなかつたし、アズサはそもそもヒフミがここに来るな  
んてことは思つていなかつたので、突然の遭遇に何を話せばよいか分  
からないままだつた。

しかし、二人の間に広がる沈黙は決して重苦しいものではなかつ  
た。むしろ、今まで二人でいるときに感じていたような、安心感すら  
あつた。

「……あはは

「……ふふつ」

出会つてからずつと一緒にいた二人が、今になつてこうして黙つて並んでいることが可笑しかつたのか、やがてヒフミもアズサも笑みをこぼす。

「ヒフミ。その……、今日はいきなりあんなこと言つて『ゴメン』

「そんな、私の方こそ……！」

「私、本当は怖かつたんだと思う。もしかしたら、この先ヒフミが補習授業部から離れて行つてしまふんじやないかって」

「アズサちゃん……」

「でも、もう大丈夫だ。分かつたんだ」

そう言つてアズサは、ヒフミの目をまっすぐに見つめる。いつかヒフミが、自分にそうしてくれたように。

今の自分の言葉を、気持ちを、余さず彼女に伝えるために。  
「ヒフミがいつも隣にいなくたつて、友達だつてことは変わらない。どんな時でも、違う世界にいるなんてことはないつて。前にヒフミが言つてくれた通りだ。……今更こんな簡単なことに気付くなんて、ちよつと情けないけど」

「……そんなことありませんよ。実は私も同じこと考えてたんですね」

「ヒフミも？」

「はい。放送部さんからお話を頂いたとき、私でいいのかなつて思つたのと同じくらい、『このまま補習授業部の皆さんと一緒にいられる時間が減つたらどうしよう』つて心配になつたんです」

「そう、だつたのか……」

「でもアズサちゃんも同じことを考えていたと知つて、なんだか安心しました。……ねえ、アズサちゃん。一つだけお願ひしても良いですか？」

「お願ひ？」

「はい。もし私が、遠くに行つてしまいそうな時は……。その時は、きつと迎えに来てくれますか？」

「……うん、約束する。絶対に駆け付ける」

「えへへ。それなら安心です」

ヒフミはそう言つて、アズサの手を取つた。二人の視線は、お互<sup>い</sup>を捉えて離さない。

「私達、ずっと……ずっと友達ですよ！」

「…………そうだな。これからも、よろしく」

「…………なんか、良い感じにまとまつたみたいですね。最初にハナコさんから『アズサさんを探してほしい』と連絡をもらつた時は驚きましたが」

「まさかナギサさんが一番最初に見つけるとは。でもそのおかげで、アズサちゃんも元気が出たみたいです」

「…………なんか邪魔しちゃいけない雰囲気みたいね。今日のところは先に三人で帰らない？」

「良いですね、コハルちゃん。晩御飯も食べて帰りましょうか♡」

「ふふ。では私もお言葉に甘えて、ご一緒させて頂きますわ」

扉の陰から覗いていた三人が、バレンaiように静かに体育館を後にす。

見上げると日は先程よりも更に低くなつていた。遠く向こうの空は、赤々と残照に照らされている。

きつと明日は晴れるのだろうと、そこにいた誰もが思つた。

それからしばらくして、イベント当日。

トリニティスクエアには、多くの生徒が押しかけ今か今かと開始の時を待つてゐる。

「おーい。こつちこつち」

そんな中先に席を確保していたコハルが、遅れてやつて來たハナコとアズサに手を振つて場所を知らせる。

「コハル、遅れてすまない。周囲に不審な奴がいないか見回つていた」「アンタ、一周回つて相変わらずね……」

「私は何かあつた時のため、制服の下に水着を仕込んで……」

「今日は特にエッチなのは禁止！ていうか意味分かんないし！せつか  
くの晴れ舞台なんだから真面目に……、あつ。始まるみたいよ！」

ステージの上に放送部の部員が立ち、注意事項を読み上げ始める。  
開演が近いことを察したのか、観客の生徒達も徐々に静かになつて  
いく。

読み終える頃には、先ほどまでのざわめきが嘘のように、広場は静  
まり返った。

やがて、司会の部員と共にヒフミが舞台に登場した。拍手と歓声。  
自分に向けられたそれらにヒフミは、少し照れ臭そうに手を振つて返  
した。

ステージの中央まで来ると、席に置いてあつたマイクを手に取る。  
そして、観客席の端から端までを見渡してから、緊張をほぐすよう  
に一度深呼吸をして、ヒフミは話し始めた。

「えつと、皆さんこんにちは。二年の阿慈谷ヒフミです。今日はこん  
な素晴らしい場所に立たせてもらつて、本当にありがとうございます」

そうして、一度お辞儀をしてから「えつと……」と続ける。

「今日はインタビューの前に、皆さんにお伝えしたいことがあります。  
……」存じの方が多いでしょうが、私は先日の出来事の時に、少しだ  
けその、目立つてしまいまして……。それで、色々なご縁があつて、今  
日この場に呼んで頂けました」

「正直今でも、こんな私がこの場所に立つていいのかなと不安で  
はあります。……それに、なんだか環境の変化にも戸惑つてしまつ  
て。今までの人間関係とか、そういうのが変わってしまうんじやない  
かって」

「ヒフミ……」

アズサがヒフミをじつと見つめる。声は出せないが、ステージの上  
で必死に頑張る友人を応援するように。

「でも、私の大事な友達が言つてくれたんです。どこに行つても友達のままだと。……遠く離れてしまいそうになつたら、その時は駆け付けてくれると」

「私は自分に自信が持てないけど、そんな風に言つてくれた友達のためなら頑張れるんです。……勇気が湧いてくるんです！」

「だから今日は精一杯頑張りますので、どうかよろしくお願ひしますっ！」

そう言うと、ヒフミはもう一度深くお辞儀をする。

そんな彼女に観客席からは、最初はまばらに、しかし徐々に大きく、最後には広場全体に響き渡る程の拍手が贈られた。

「……なんか、あいつらしくて良いわね」

「はい。ヒフミちゃんの魅力がたっぷり詰まった挨拶でした」

「やはり、ヒフミは凄いな……。あんな大勢の前で……」

「では、さつそく始めましょう！『トリニティの『きげんよう 特別スペシャル』！」

司会のタイトルコールと共に、イベントは始まつた。

ヒフミは少し緊張している様子だつたが、司会はやはり場慣れしているようで、そんなヒフミを上手くフォローしながら、イベントは大きなアクシデントも無く進行していく。

ファンからの質問、お便り、レクリエーションなどのコーナーが終わり、いつの間にかイベントは最後の締めに入ろうとしていた。

「何とか最後までやりきったわね。実はこういうの得意なのかしら？」

「もしかしたら、意外にこういうステージが性に合つてたりするのかも知れませんね」

「何にせよ、特に事件が起こらなくて良かつ……」

「では名残惜しいですが、これが最後のコーナーです！なんでも、ヒフミさんには人生を変えた作品があるとか！」

「はい！本当に素晴らしい作品で、もつと沢山の人々に知つてもらいた

いと常々思っています!」

「……なんか、急に嫌な予感しない?」

「確かに、ヒフミさんの雰囲気が……」

「という訳で最後の企画は、そんなヒフミさん一推しの作品を上映したいと思います!いや、権利関係が色々ありましたが、何とか交渉の末OKが出ました!」

「わあ!本当にありがとうございます!放送部の皆さんと、何度も遅くまで会議をしてようやく実現できました!!」

「え、嘘?嘘よね?あれじゃないよね?ていうか忙しくしてたのって、これの為なの?」

「い、いやあ。どうでしようか。でもヒフミさんのあの据わった目は……」

「では上映開始です!『TVスペシャル版モモフレンズ』、ご覧ください!」

「ストップ!!今すぐ止めに行くわよ!」

「いや、まあここで止めるとイベントの進行が……」

「言つてる場合じゃない!あんなカルト映像流したら、トリニティの歴史に残るわよ!」

「でもほら、もう始まっちゃったみたいですから」

「誰か!誰か止めてええええ……」

そんなコハルの叫びは、スクリーンから流れるテーマソングにかかり消され、誰の耳にも届かなかつたのだった。

その日もまた、コハルは寝ぼけ眼を擦りながら通学路を歩いていた。

傍らのハナコは、そんな姿を見てあらあらと微笑んでいる。

いつしか工事は終わっていたようで、通学路はすっかり事件の前の

姿を取り戻していた。

「おはようございます！コハルちゃん、ハナコちゃん！」

「おはよう、一人とも」

そんな二人の後ろから、ヒフミとアズサがやつて來た。

コハル達を見つけて走ってきたのだろうか、ヒフミの息は少しだけ荒れていた。

「あら。二人ともおはようございます」

「おはよ。……なんかこういうの、懐かしいわね」

「そうですね。でもイベントが終わつたので、これからは前みたいに遊べますよ」

「終わつたっていうか、まあ……。あなたのファン、減つたわよね」

ほんの数週間前とは打つて変わつて、今ではヒフミを追いかける生徒は一人もいなかつた。

すれ違ひざまに会釈や短い挨拶をしてくる生徒はいるが、その数も以前の追つかけ生徒の人数からすれば、本当にごく僅かだつた。

「あはは……。まあ、人のウワサもなんとやらと言いますから」

「あんなに素晴らしいイベントだつたのに……。でも心配しなくていい。またみんなヒフミの良さに気付いてくれる」

イベント終了後、トリニティスクエアが何とも言えない沈黙に包まれたのは言うまでもない。

ステージ上で感想を言い合うヒフミと司会を、何とか舞台袖に引っ張つていつた放送部員が解散を宣言すると、生徒たちはみな沈痛な面持ちでその場を後にして行つた。

しかし、ヒフミとアズサはまさかモモフレンズ上映会がここまで凄まじい破壊力を持つているとは夢にも思つていない。

まあそれは、あるいは幸せなことなのかもしれないが。

「とにかく、今日からはまたみんなでお昼食べましょうね！」

「ああ。放課後はショッピングにも行きたいな」

そんな風に、以前と変わらない様子で歩く二人を見て、コハルはため息をつき、ハナコは微笑んだ。

そして、いつの間にか前を歩いていた二人に追いつくように、少し

だけ歩みを早める。

人の心は案外丈夫というか、どんな事件やアクシデントも大抵は乗り越えるようで――。

つまり。この四人が並んで歩く光景は、暫く変わる予定は無いようだ。

## 銃創と看護（作・シユナ）

激動の抗争から数日。

アリウス、そして聖徒会との戦火と混乱による被害者が各地に残るもの、キヴオトスは大凡の平和を取り戻していた。

そうともあれば、いつもの通り仕事が増えていくばかりなのが、シャーレである。

シャーレもほぼいつもの姿を取り戻していたが、一つだけ、なかなか戻らない物があった。

「いっつ！つ…なかなか治らないなあ…」

混乱の最中に負った銃撃による傷は、そう簡単に癒えるものでは無かつた。

「鎮痛剤鎮痛剤…最近効き目も薄れてきたかなあ…」

「でしたら、神経ブロック注射はいかがですか？」

「……うん。 そうだね…」

どこからともなく現れるセリナ。

あれから出現…もとい、心配して来てくれる回数が増えたような気がする。

「はは…目の前に仕事があるとつい、ね…」

「はは…目の前に仕事があるとつい、ね…」

銃撃を受けた傷跡のある腹部を、擦りながら立ち上がる。

「はい、こちらをどうぞ。今服用しているものよりも少し強めです」「助かるよ。ありがとう」

水と錠剤を渡される。錠剤を口に含んで、水を…あれ?

コップが落ちる。割れる。激痛で視界が揺れる。

体が崩れ落ちる。声が出ない。

痛みだけが体を支配していく。

「先生っ！」

これ、これダメなやつだ。ああ、でも…セリナが居るから、大丈夫か。

激痛にも関わらず現れた謎の安心感によつて、意識は簡単に飛んで  
いつてしまつた。

「…ですから、これは私の責任です。チナツ、手術をしたのはこの私で  
あり、全ては私の管轄なのです。よつて、私が面倒を看ます」

「いくら先輩といえども、ここを譲ることはできません。それに、一人  
の傷病者に、2人以上で当たつた方が効果的だと思います」

「それは否定しませんが、それとこれは別です」

「今から申請して救急医療部に戻りましょうか？」

「お二人共、落ち着いてください…！」

「こ、これは…？」

「あつ、先生！大丈夫ですか!?お体は痛みませんか?」

「ハ、ハナエ…？チナツとセナも…」

目が覚めると、何やら言い争つてゐる2人とそれに戸惑つてゐる1  
人の声が聞こえる。

ここは…シャーレの救急室…

「先生、ご無事で何よりです」

「ああ…ありがとうございます。どうしてみんなここに…？」

「先生が倒れたらセリナ先輩から連絡を受けました！お二人もそうみ  
たいです！」

「わざわざ…ありがとうございます。嬉しいよ」

「いえ！一大事ですから」

「…先生。大変申し訳ありません」

セナが急に向き直り、こちらに向かつて頭を下げる。

その面持ちは、とてつもなく神妙だった。

「セナ…？」

「今回の事態、先生の銃創からの病症なのは明らかです。責任は全て  
は私にあります」

「そんな！助けてもらつたのはこっちなのに」

「…だから先生の看病は全て私がやります…と？」

「そのつもりですが？」

チナツがメガネを外した時の顔をメガネを外していないのにしている。

「まあ、先輩が強情なのは昔から知っていますけど…」

「そういえば、セリナは？」

「はい。ここにいますよ」

「ひあつ!? い、いつの間に後ろに!?’

「今です。先生、お体は大丈夫ですか？ 痛みはかなり減ったかと思いますが…」

「あ…そういえば…」

言われてみれば、気絶するほどだつた激痛がかなり収まっている。「局部麻酔、鎮痛剤、座薬…可能な限りのものを使いました。これでまだ痛かつたら、また考えますが…」

「座薬つてあの座薬!?’

「はい。お尻から入れる薬の坐薬です。先生のお尻、可愛かつたですよ？」

「やめてください…」

「効き目があるのは確かなので、また痛みが出たら使いますよ」「自分でやるよ！」

それにもしても、薬の効果というものは強い。ここ数日悩まされていた痛みが綺麗に無くなっている。

「うーん…調子も良いし、仕事に戻ろうかな。皆ありが」

「いえ、ダメですよ先生。今回ばかりは休んでください」

「そ、そういう訳にも…」

「先生の体は今、非常に危ない状態にあります。命そのものに支障はありませんが、以前の重傷を負った直後に激しく活動したため免疫力等が著しく落ちています。最悪、感染症に障り、死体になります」

セナがかなり強く止めてくる。そこまで酷いのか…？」

「働かせてしまつた私たちが言うのもなんですが…無理をしそすぎです。私たちは、大人の方に対する医療経験に欠けます」

いつもよりも真剣な眼差しでチナツがこちらを見つめ、手を握つてくる。

「ですから、『万が一』があつてからでは遅いんです。先生、お願ひします」

「おつ、お願ひします！」

チナツに続いてハナエまで頭を下げる。

「うん、わかつたよ。じゃあ、お言葉に甘えてしつかり休ませて貰おうかな」

「そういうてすぐに抜け出したりしないでくださいね？」

「…はい」

それから、セナ以外は一度学校に戻つて行つた。どうやら諸々の器具を取りに行つたらしい。

「では先生、体を拭きましょう。かなり汗が出ています」

「ああ…ありがとうございます…ホントのこと言うと、すごい体が重くてね」

「…申しわけありません」

「まだ気に病んでるの？」

「術者の私が、先生の容態を最も把握していた、そのはずです。そして先生が勇ましく活躍しているその姿を見て、安心してしまいました。なんという精神力と、回復力か、と」

「セナが治療してくれたからだよ」

「…ですが、現にこのザマです。完治しきるまで、先生の傍を片時も離れるべきではありませんでした」

「それは、私が無理しちゃつたからさ。というか、普通の医者は撃たれた人がすぐ働くなんて想定しないよ」

「…そのような困った行動を度々しているのだと自覚して頂きたいものですが…少なくとも、私はそれを踏まえて、動くべきでした。まだまだ、未熟です」

話しながら、服を脱がされていく。

氣づいていなかつたが、痛みで気絶していた間、相当の汗が出てい

たようだ。

「冷たつ！…でも、あ、気持ちいい」

「濡らしただけのタオルですが…先生の体が発熱しているのでしよう」

首、腕、背中と順に拭かれていくと、前にまわったセナが撃たれた痕をじつと見つめていることに気づく。

「どうかした？」

「…いえ、少し、物珍しいなと思つたもので」

「そうなの？みんな銃で撃たれたりしてるけど…」

「確かにそうですが、基本的に銃弾は皮膚を貫通しません。多少裂かれて血が出るようなことはあっても、体内に侵入することはまずありません」

「そこまで頑丈なんだ。すごいね」

「…そして、痕も基本残りません。出来ても、すぐに消えてしまます。ですが…」

セナが痕の薄い部分を、その細い指でつらりとなぞる。

「先生はキヴオトスの人ではありません。これは、一生残ります。小さくすることは出来ても、消すことはできません」

「そんなの、ここに来た時から覚悟してるよ。いざとなれば、自分が生徒をかばって…なんて」

「冗談でもそのようなことは言わないでください」

いつもの表情だが、手から伝わってくる力みと、なによりものその目がセナの本気を伝えてくる。

ちょうど傷跡の所に手があつたのでめちゃくちゃ痛い。

「…つ、すみません。つい」

「いや、こつちこそごめん。実際は、ヒナにも、ツルギやハスミにも、もちろんセナにも、皆に守つてもらつてばかりなんだけね」

「これからはその傷を悪化させることも、新たな傷を増やすことも、絶対にありません。私が、守つてみせます」

「…ありがとう」

「当然のことですので」

「…随分と長い清拭ですね」

「チナツ、戻つていましたか」

「…先輩もそういう顔する時あるんですね。驚きです」

「え、セナ表情変わつてた?」

「はい。他の方からは分かりにくいかもしれませんが、私には分かります。喜んでいる時は口角と瞳孔がすこし…」

「チナツ」

「はい」

「私は先輩です」

「はい」

チナツはもともと救急医療部に所属していたという話だが、風紀委員のときとはまた違つた態度だ。

「はあ…先生、お着替えをお持ちしました。丁度いいので、こちらを着用下さい」

「ありがとうございます…ゲヘナの校章が刻まれてる」

「ゲヘナの入院服です。はい、腕を上げてくださいね」

「そ、そんな赤ちゃんみたいな…」

「今の先生は赤ちゃんより弱いんですから、言うことを聞いてくださいね?」

そのまませつせと着替えさせられて行く。下も着替えさせられたが、チナツは流石医療従事者というか、別にパンツを見ても何も動搖していなかつた。

「数日お休みを頂きました。」

「…という訳で、今日からしつかり看護させていただきます。監視という意味も含めて、ですが」

「働かないように、ということだろう。」

「大丈夫、さすがにこの状況と体調じや、すぐに倒れちゃいそうだから」

「チナツ、風紀委員会としての仕事は大丈夫ですか？エデン条約以後の処理がまだ終わつていないでしよう」

「万魔殿の方たちに全てお任せしましたので」

「なるほど、では問題ありませんね」

エデン条約の際に、マコトが色々やらかしたせいで万魔殿の立ち位置はかなり悪いらしい。といつても、今まで風紀委員がやつていた見るからな雑用をやらされているくらいだけだ。

「先生、せつかくですから、体の不調を全て取つてしまいましょう！色々持つてきたんですよ！」

チナツがいつも持つている特大のカバンから色々な道具が出てくる。医療器具というよりは…

「リラックス的な…」

「以前温泉に行つた時、このような健康器具にハマつてしまつて。お恥ずかしながら、色々集めるようになつてしましました…」

「かわいく飾り付けられてる物もありますね。このローラーなど特に」

「そつ、それは元々の趣味です！んんっ！さあ先生、まずはこちらをどうぞ。ホットアイマスクです」

「おお、これが…あつ、暖かい…」

「普段からデスクワークでお疲れでしようから、ご用意致しました。では、お体触りますね」

アイマスクで見えないが、足の辺りを触られているのがわかる。

「マッサージも最近は勉強しているんです。どうでしようか」

「うつ…あつ、いい…うつ」

「ふふ、お気に召していただいたようで、何よりです」

脚部の快楽に集中していると、ふと肩にも感触があるのに気づく。

「では上半身は私が。外科の人間ですが、ある程度の心得はあります」

先ほどまで濡れタオルを持っていたためか冷たいセナの手と、温かいチナツの手の温度差で、体の感覚がちぐはぐだ。

首をほぐされ、肩を揉まれ、足を揉まれ：

ああ、眠つてしまいそう。

「……先生、いつもありがとうございます」

「うえ？」

「私たちのために、いつもこんなにも働いて、体をボロボロにして……触つてるだけでも、先生の頑張りが伝わってきます。それに、こんな傷まで負つて……」

「いや、そんな……」

上手く声が出ない……

「ふふ……声が眠そうですよ？このままおねむにしましようか」

誰の手かわからぬが、頭をなでられている。

眠りたいという体と快楽を享受してみたい心が戦っているが……抵抗むなしく、眠りに落ちていく。

「ごめん……おや、すみ……」

「はい、おやすみなさい先生。いい夢見てくださいね」

「少し狙いすぎでは？」

「先輩がそれを言いますか？」

「はて、何のことでしょうか？」

セナは何処吹く風と言わんばかりの表情でマッサージを続ける。

チナツも溜息をつきつつ続いているが、右足のマッサージを終えるとそれを終え、机に置いてあつたさまざま健康用器具を取り出す。

「さて、全身りますか……」

「まさかそれ全部を？」

「痛い物もありますので、寝ていらっしゃる今のうちに……」

手に大量の器具を持つたチナツが先生に詰め寄る。そして……

「う、ん……あれ……今何時だ……」

起きた時には既に夕日が窓から差し込み、部屋は橙一色に染まつていた。

伸びをしようと、腕を上げて……

「うおっ、なんだこの痕……」

腕のみならず、よく見れば足や太ももにも謎の痕が付いている。

何かを押し付けた後のような…

体を見回していると、近くの机の上にメモらしき物があるのを見つける。

「取りたいけど…体が重い…」

マツサージを受けた後だからか、異様に重い体を引きずつてメモを取りる。

「なになに…『色々使ったので、痕が残っているかと思ひますが、気にはしないでください。水分補給を忘れずに』なるほど、チナツの…ついで…そう簡単には治らないか…」

「あっ、先生！おはようございます！あれ、こんばんはの方がいいかな…？」

「ああハナエ、おはよう…」

「ああっ！先生大丈夫ですか！ちょっと見せてください！」

ものすぐい形相でこちらに走りより、傷跡を見てくれるハナエ。

「うわあ！腫れちゃつてます！これは…切除しなければ！」

「待つて、待つて！ちょっと、その大きなメスみたいなのどつから持つてきたの！」

「ハナエちゃん、大丈夫ですから、それをしまいましょう」

「あっ、先輩！わかりました！」

た、助かった…：

「先生、また痛んできましたか？」

「うん。鎮痛剤が切れたのかな…」

「おそらくそうでしょう。腫れてきたのも、免疫が弱つて炎症を起こしたのかもしません。痒くなつても触つてはいけませんよ？」

「そつか…」

「抗生素を服用しておきましょう。鎮痛剤も少しだけ…」

そういうつて箱から薬を取り出すセリナ。

どう見ても普通の大きさの薬ではない。

「それはもしかして…？」

「座薬ですね」

「なにかこだわりもあるの??」

「これが1番効果が高いんですよ?はい、おしりを向けてくださいね。局部は見ないようにするので大丈夫です。見て欲しいと仰るならよろ…謹んで拝見いたしますが」

「見ない方向でお願いします」

「カツト」

「気絶してる間ならまだしも、起きてる間にされるのは…こう…羞恥がすごいね…」

「これくらいは看護師として普通の業務ですから」

「勉強になります!」

ハナエが真剣な表情で見学していたのがまたシユールな光景だった。また座薬を入れられないためにも、倒れないようにしよう…

「先生、お腹が空いてきてはいませんか?」

「ううん…どうだろう…なんか、あんまり空いていないような…」

「食欲はあまり無し…と。では簡単なものを作りましょか。買い出しあしてきましたので」

「はいはい!任せてください!食べやすいものですね!」

「ハナエ、料理作れるの?」

「ハナエちゃんの料理、病院食なのにおいしいと評判いいんですよ?」

「ちょっとイメージに無かつたな…意外だ。」

セリナと話している間にまた走つて厨房へと向かって行つた。

「元気だなあ。見てるだけでこつちも元気を貰えるよ」

「なんというか…わかります。わたしが疲れたときも、いつもハナエちゃんに元気を貰っていますから」

昼間にしてもらつた事をセリナに話し、それを聞いたハナエが何か真剣な表情で考えだしたのを眺めていると。扉の向こうから鼻歌が聞こえてくる。

「お待たせしました!先生、どうぞお召し上がりください!」

「これは…麻婆茄子…?」

「丼ですよ!味も濃くて、1品で全ての栄養素を完璧に取得できる!」

らしいです！出来たてホヤホヤで温かいですよ～！」

「ほほう…確かに病院食とは思えないいい匂い…」

「香辛料は抑え目に、お味噌と薬味で味付けしました！お腹にも優しいんです！ささ！」

「ありがとうございます」

「スプーンを…あれ、無い。セリナが持つている…？」

「では先生、お口を開けてください？あ～ん」

「え」

「先生、食べるのがつらいですか…!?ご安心ください！このハナエが応援しますよ！」

どこからともなくポンポンを取り出すハナエ。

「フレーフレー先生♪ガンバレガンバレ先生♪」

部屋の中なためか、大人しめながらもチアリーディングを披露してくれている。

「あ、あ～ん…むぐ…」

「はい、よく噛んで食べてくださいね」

今日だけで何度も赤ちゃんかのような扱い。少し慣れてきたかもしねれない。

「おいしい…濃いのに、優しい味だ…」

「ほんとうですか！やつたーっ！」

飛び跳ねて喜んでいるハナエ。揺れている。

「はい、あ～ん」

飲み込むと、すぐにセリナが次を差し出してくる。

「セ、セリ」

「先輩！私もやりたいです！」

「もしかして餌付けされてる？」

そんなこんなで数日。

だいぶ痛みも収まり回復してきたため、4人の了承を得て復帰することにした。

万が一のため、セナが付き添いになつてはいるが。

「うあ～っ…久しぶりのシャバの空氣だ…」

「…私達との生活ではご不満でしたか？」

「そんなことは無いよ！断言できる！セナに看病されて毎日楽しかったから」

「冗談です」

相変わらずの無表情だが、チナツの言つていることが何となく分かる気がする。

「先生、改めて快癒おめでとうございます。ですが、病み上がりの身であるという事をお忘れなきよう！」

「うん、ありがとうございます。気をつけるよ…ねえ、セナ？」

「はい」

「もしさまた倒れたりしたら、また看病してくれる？」

「…それは勿論ですが、そのようなことのないよう…」

「私が弱ってる姿を見せられるのは、セナ達しかいないからさ」

「…なるほど、わかりました」

セナが正面に立つてくる。

「先程も言つた通り、先生が倒れるようなことは二度とさせないつもりです。ですが…もしそうなつたとしても、ご心配なく。この私が、責任を持つて完璧に看病致しましょう」

セナのその笑みが、私の眼に焼き付いた。

## 秘密の勉強会（作・スズノネ）

エデン条約を発端とした大規模な騒動から数日が経ち、ゲヘナとトリニティにも日常が戻りつつあったある日のこと。時刻は午後10時を過ぎようとしていた時のことでした。

私は特にやることもなく、自分の部屋で何の気なしに本を読んでいると……

「…………あら？」

モモトーグの着信音。

本を読む手を止めて端末を確認すると、メッセージの送り主は私のかわいい後輩の一人、アズサちゃんからのものでした。

『ハナコ、いま時間は大丈夫?』

『どうかしましたか?』

こんな時間に、一体私に何の用事でしょうか?  
ちょっとだけ心配になっちゃいますね……

『次の試験に向けて勉強をしていたんだけど  
問題の中に分からぬるものがあつて……』  
『その……』

『ハナコの助けが必要で……』

『勿論、無理にとは言えないけど……』

ですが、そんな心配とは裏腹に、トークの内容はなんと”私に勉強を見てほしい”というお願ひの連絡でした。  
まさかアズサちゃんの方から、こんなことをお願いされるなんて

……

補習授業部のみんなが集まつたときに、勉強を教えたことは今まで

も多くありましたが、こうして連絡を貰うのは初めてです。ちょっと驚きました。

ですが、それだけ私のことを頼りにしている、ということなのでしょう。

そう考えると、とても嬉しくなりますね、うふふつ。答えはもちろん、OKですよ！

『いえいえ、大丈夫ですよ』

『わからない部分はどこですか？』

『ありがとうございます』

『今写真を撮るからちょっと待つてて』

『わかりました！』

次の試験の範囲は既に把握済みです。抜かりはありません。  
教科書も参考書も、私の部屋には一通り揃っていますから、資料に困ることもないでしょう。

アズサちゃんには申し訳ないですけれど、突然訪れた非日常に僅かばかり興奮しながら、必要な資料を準備します。

『写真の撮影が完了した』

『いま送るので確認してほしい』

送られてきた画像を確認……うん、これくらいなら私でも十分教えられそうですね。

まあ、私が教えられないような問題が出題されるなんて、”あの時” ですらなかつたんですけどね。……なんて、今はそんなことどうでもいいですね。

なにせ、可愛い可愛い後輩からの頼まれごとなんですから。

『確認できました』

『では、1枚目の写真の問題から始めましょうか』

『どうか、よろしく頼む』

それでは、ミッショントリニティ！今の私はやる気に満ち満ちていますよ！

浦和ハナコ、一肌でも何枚でも脱がしていただきましょう！」

シネマアズ

こうして私とアスサちゃん一人だけの特別授業が始まりました。  
あ、”二人だけ”的”特別授業”つて何だかイケない響きですね？  
うふふふ……

なんて、甘く考えていましたが……

”誰そ彼”と”彼は誰そ”

「この2つの言葉はどちらも人の顔が区別つきにくい時間という意味の言葉です」

1

夜遅くに通話、というのは周囲のことを考えて避けるべき、そう考  
えてモモトーグを使って勉強を教えることとなつたのですが……  
みんなで集まつて顔を合わせて教えていた時とは違い、モモトーグ  
で勉強を教える、というのは思つていたよりも大変なことでした。  
アズサちゃんが分からぬ問題は、写真を撮影して送つてもらつて  
それで済みましたが、問題の説明や解説となるとそれはいきません。  
私は言葉を全て端末に入力する必要があります。

結果として、一つの問題を解説するのに、普段よりも時間がかかるつ  
てしましました。

おまけに、液晶を見続けていたせいか、なんだか目が重く感じていたような……

「結構大変ですね、これ……」

せっかく私を頼ってくれたというのに、あまり力になれない気がします。何とも歯がゆいですね……

ですが、今は泣き言を言っている場合ではありません。他ならぬアズサちゃんからの頼まれごとなんです。

ええ、このミッショントンは最後までやり切つて見せましょうとも。

『——今では夕暮れを”黄昏時”、明け方を”彼は誰時”と表します。』

『つまり、今回の問題で使われているのは、”彼は誰時”だから』

『この場面は朝の出来事ということになるのか』

『その通りです！』

『なるほど、理解した』

それでも勉強を教えること自体は、決して苦ではないんです。なにせアズサちゃんはとても優秀な子ですから。

一度問題の解き方を教えれば、すぐに理解をしてくれますし、疑問に思ったことはきちんと質問をしてくれます。何とも教え甲斐があるというものです。

『ここまでで何かわからない点はありますか？』

『今のところ大丈夫』

『説明が分かりにくくはないですか？』

『いや、とてもわかりやすい』

『むしろ、ハナコの方は大丈夫？』

『無理はしていない？』

おまけにアズサちゃんは優しい子です。

優しくて強くて可愛いだなんて、隙が無さすぎではないでしょうか？

ちょっとくらいその可愛さを、私に分けてほしいくらいですね、うふふつ。

勿論、私の心配をしてくれるのはとても嬉しいんです。  
ですが、折角アズサちゃんがやる気なんですから。ここで水を差す  
わけにはいきませんね。

『いえいえ』

『何といつてもアズサちゃんからの頼まれごとですから』

『むしろ、もつと頼つてもらつても構いませんよ?』

という訳で、ここで頼れるお姉さんアピールを。

あ、この感じはなかなか良いですね。私、今カツコいい先輩……つ  
て感じではないでしょうか？

勉学に勤しむ、というのもまた、青春の在り方の一つですよね。

『ありがとう、ハナコ』

『それじゃあ、もう少しだけ付き合つてもらえる?』

『勿論です!』

~~~~~

そんなこんなで、授業開始から一時間が経過し、時刻は午後11時過ぎ。

アズサちゃんが優秀だったこともあり、どうにか無事にすべての問題を解説することができました。

『ハナコ、今日は遅くまでありがとうございました』

『アズサちゃんもお疲れ様です』

『これで、今日の分はは大丈夫ですか？』

『大丈夫、抜かりはない』

『なら、良かつたです！』

本当によく頑張りました、私も。

……これは寝る前に目のケアが必要ですね。目薬は常備してありますから、とりあえず、よく温めてから寝るようにしましょう。ともかく、これでミツショーンコンプリート。最後はお休みの挨拶で締めましょうか。

そう、思つていたのですが……

『やつぱり、ハナコ凄いな』

……はい？

『いろいろなことを知つて いるし、教え方も丁寧で分かりやすい』

『それに頭の回転もとても速い』

『えつと、そんなことないと思ひますけれど……』

あれ？あれあれ？何だか変な流れになつてきてるような……

『いや、そんなことある。先生から聞いたんだ』

『あの騒動の時にハナコがトリニティに残つて、一人で頑張つてくれていたこと』

『そいいえば、そのお礼をまだちゃんと言つていなかつたと思つて』

あ……

『その、今伝えることでは無いと思うんだけど……』

『ありがとう、ハナコ』

『ハナコ達の助けがなかつたら、私は今こうして平和に過ぐすことはできなかつたと思う』

『おまけに、こんな時間まで勉強を教えてもらつてしまつて』

『ハナコにはいつも助けてもらつてばかりだ』

『私なんかより、アズサちゃん達の方がよっぽどすごいと思いますよ』

これは紛れもない私の本心。

私なんかよりもずっと、ヒフミちゃん、コハルちゃん、そしてアズサちゃんの方が立派だと、そう思うんです。

あなたたち三人は、私とは全然違う。私のような異端児とは全然違う、と……

あの時私は、トリニティの暴走を止めようと必死で……

ナギサさんやハスミさん、ツルギさんやサクラコさんが不在の中、何とかトリニティの崩壊を食い止めようとして……

それでも、私一人ではどうすることも出来ず、拘束されてしまいそうになつて……

もし、コハルちゃんが、先生が、あのタイミングで来てくれなかつたら、私はどうなつていたことか……

結局、私はみんなのために、アズサちゃんの為に、何もしてあげられませんでした。

それに……

『それに、私はアズサちゃんみたいに』

『すべてが虚しいことだと分かつたうえで、前を向くことが出来ませんでしたから』

『ハナコ……』

『そんな当たり前で、大切なことを私に思い出させてくれたのは』

『アズサちゃん、あなたなんです』

『だから』

『私なんかよりもアズサちゃん方がとつても凄いんですよ』

いつたい私は何を言っているんでしょうね。こんなことをアズサちゃんに話しても迷惑でしかないはずなのに……きつと端末の向こう側で呆れていることでしょう。先輩として、情けないです。

それに、もう夜も遅いですから、いつまでもこんな話をしてアズサちゃんを困らせるわけにはいきませんね。

ちょっと雰囲気がよろしくはないですが、今日はこれで解散としましょう。

『……なんて、あまり面白い話ではありませんよね?』

『今日はもう遅いですし、お開きにしましようか』

『うん、よくわかつたよハナコ』

……ん? 何だか会話が噛みあつていらないよう?

一体アズサちゃんは何が分かつたというのでしょうか?

『ハナコが私のことを凄いといったのだから、きつと私は凄いのだろう』

『いや違う』

『私は凄いんだ』

ええ、そうです。アズサちゃんは凄い子です。

『そして』

『そんな私がハナコを凄いと言つたんだ』

『つまり、ハナコは物凄く凄いということになると思う』

『いや、ハナコは物凄く物凄いんだ』

……え？

『えつと、うまく言葉に表せないが』

『その……』

『とにかく』

『ハナコは凄いんだ』

『絶対に』

……。

『だから、あんな悲しいことを言わないでほしい』

『だつてハナコは』

『私の大切な友達なんだから』

はあ……

まつたく……

私は一体、いつからこんなに弱くなつてしまつていたのでしょうか

……

今日の授業がモモトークで本当に良かつたと、今では思います。  
恥ずかしい姿だつたらいくらでも見られて構わないのですが、さす  
がに情けない姿を見られるのは嫌ですからね。

早く返信をしなければいけないのに、端末の画面が見えやしませ  
ん。疲れ目のせいでしょうか、困りましたね……

おまけに、何と返信したらよいのか、言葉が出てこないときました。  
いろんなことを知つてている、なんて褒められたそばからこんな有様で  
す。

『ありがとうございます。そういうてもらえると、とても嬉しいです  
』

『それならよかつた』

結局、返すことのできた言葉は、酷くありきたりなものでした。  
こんなメッセージでは表せないくらい、感謝の気持ちでいっぱい  
んですけどね。

『それから』

『迷惑じやなければ、今度は明るい時間に』  
『直接勉強を教えてもらえないだろうか?』

『勿論です!』

『いつでも連絡をお待ちしますよ!』

『本当にありがとう、ハナコ』

ですが、今はこれでよしとしましよう。

今回伝えることの出来なかつた感謝の気持ちは、次の機会に言葉で  
伝えるとしましょうか。ええ、絶対に。

『それじゃあ、今日は解散としましようか』

『アズサちゃん、おやすみなさい』

『おやすみ、ハナコ』

「ふう……」

アズサちゃんからのメッセー‌ジを確認し、ほつと一息。

なかなかにハードな1時間でした。特に最後の数分は、別の意味で  
……

それでも、疲労感よりも満足感のほうが私を満たしています。  
何より……

「みんなと出会えて、本当に良かつた……」

先生、ヒフミちゃん、コハルちゃん、そしてアズサちゃん。

嘘と偽りで飾り立てられた私の空虚な日常に、”青春”という鮮や  
かな色を与えてくれた大切な方たち。その大きさを、今日は改めて実

感できました。

いつも私は、大切なものを頂いてばかりです。

そんな皆さんへ、果たして私は何をお返しすることができるのか  
……正直なところ、今の私にはわからないのです。

ただ、今夜は……

こんなささやかな幸せが、いつまでも皆さんと共にありますよう、  
ささやかながら祈らせていただきます。

勿論、ただ祈るだけではなく、必要とあればトリニティであろうと  
何だろうと、傾覆させてもらいますけどね？うふふふ……

そんな思いを胸に、私は真っ赤に染まつてしまつた眼を何とかする  
べく、奮闘するのでした。

# ヒナ☆ひなパニツク！（作・マイケル）

『先生。えっと、緊急事態…だから。…できれば来てほしい』

ヒナからそう控えめな連絡をもらつたのが1時間前。大半のことは自力もしくは内部で解決できてしまう彼女が、緊急事態とまで言ったことに驚いた。

今日も勿論仕事は溜まつていたが、ヒナの頼みは断れない。朝食を食べながら考えていた今日のスケジュールを延期にして、急いで家を出る。

エデン条約の騒動があつてから半月ほど経つた今日まで、ヒナには積極的に目をかけるようになつていた。

ヒナは強いから、ヒナには私がないなくても大丈夫だ、とどこか甘えていた私。しかし、そんな彼女だつてまだ17歳の少女。その小さな双肩でゲヘナ学園、ひいてはキヴオトス全体に影響する条約を背負うには彼女はまだ幼すぎた。

なので、時間を見つけては買い物に行つてみたり、食事に誘つてみたり、風紀委員室にも顔を出してみたり…とにかくあの手この手で彼女が甘えられる時間を作ろうとした。

しかし成果は芳しくなく、ヒナにあまり喜んで貰えている感触がなかつた。ヒナ自身もどうやつて甘えていいのかわからないようで、別れ際に『うまく出来なくてごめんなさい…私といてもつまらないでしよう…』と悲しげな表情で言わせてしまつっていた。

そのため、今回の救援要請は不謹慎ではあるがチャンスと思つてしまつていた。こちらでもつと頼りになるということを見せれば、ヒナがもつと甘えやすくなるという下心があつた。

連絡を貰つてからろくに準備もせずに急いで来てしまつたため、髪や服に乱れがないことを確認して、ヒナの部屋のチャイムを押す。ピンポーン。

『はい』

「ヒナ、先生だ。来たよ」

『ありがとう。開いてるから入つてきて』

そうインスターフォン越しにヒナの声が聞こえる。入室許可をもらった私は入り口のドアノブをひねる。

「ヒナ、大丈夫？ 緊急事態だつて聞いて…」

そう声をかけながらドアを開けて中に入る。すると、ドタドタドタと騒がしい音が聞こえたかと思うと、全身に衝撃を受ける。

「わー！ 先生だー！ 先生ぎゅー！」

私はその衝撃に耐えきれず、しりもちをついてしまう。転倒の際にぶつけた腰をさすりつつ、その原因となつた存在を見るために顔を下に向ける。

果たしてそこにいたのは、白いふわふわの長髪で、ピンク色のパジャマを着た小柄な少女であつた。彼女は私の背中に両手を回して抱き着きつつ、顔を私の胸にまるでマーキングでもするようにこすりつけていた。

「ヒ、ヒナ…？」

甘えん坊な大型犬のように全力で甘えつつある少女に困惑しながら声をかける。その少女は私をここに呼んだヒナ——ゲヘナ学園3年生であり、風紀委員の委員長である空崎ヒナその人であつた。普段はこんな好意マシマシな感情表現をしてくる生徒ではない（あつたらどれだけ楽だつたか）。

「ちよつと？ 私…ええと…ああもうめんどくさい！ ヒナ！ 早くどきなさい！」

そのままどうしていいかわからずオロオロしていると、部屋の奥から怒鳴り声が聞こえる。そちらに顔を向けると、そこには私に抱き着いている少女と瓜二つの顔をした少女がいた。

え、ヒナがもう一人…？

「えーと…どうして…こういう状況になつているのか説明してもらえると…」

「えへへー、先生のぬくもりあつたかーい！ ぎゅーつてして？」

「ちよつと、先生が迷惑がつてゐるでしょ。そこからどきなさい」「きやーこわーい。悪魔がいじめる〜」

「んなつ!?」

二人のヒナに案内され、私は客室に通されていた。目の前には不機嫌気味でゲヘナ学園の制服を着て対面の椅子に座るヒナ。ソファーに座った私の足の間に収まつた、満面の笑みを浮かべたパジャマ姿のヒナ。二人の見た目には全く同じ少女に囮まれつつ、話を聞くという奇妙な事態になっていた。

「はあ～、もう…」

「ため息ばっかりついてると幸せが逃げてくよ～？」

「誰のせいで…。話が進まないから黙つてて」

目の前のヒナは頭痛を堪えるように頭を押さえつつ、仕切り直すよう咳払いをする。

「説明つていうほど私もよくわかつていないので…。朝起きたら突然その子…もう一人の私がいたの」

割と超常的なことが起きるキヴオトスであるが、分身という事態は聞いたことがない。ヒナの問題をパパッと解決するとか意氣込んでいたが、私では全く手が出せない事態について、ため息が漏れてしまう。「このような事は全く聞いたことがないよ。力になれなさそうでごめんね」

「私こそ、ごめんなさい…」

そう言つて二人とも黙り込んでしまい、お互いがお茶をすする音だけが部屋に響く。このように二人揃つて黙り込んでしまう事態は、彼女とのお出かけの際に何度もあった。お互いがお互いに迷惑をかけたくないと思つてしまつて、結局何も喋れなくなつてしまつて。

「ああ！ もう！ 辛気臭いなあ！ めんどくさいなあ！」

私の膝の間で大人しくしていたパジャマヒナがそう叫んで立ち上がる。そして、ずかずかと制服ヒナのほうに向かうと、ガシツと肩を掴む。

「普段はハキハキしているくせにどうして先生を前にすると、そんな恋する乙女みたいになるの！ 先生が大好きなのはわかるけど…」

「んな！ ちよつ！ 黙つててつて…」

「黙らない！ 黙つてたら一生進まないでしょ！ というか、そんなだから私が生まれるんでしょ」

パジャマヒナと制服ヒナが言い争っているのを見ると、なんだか子猫の喧嘩を見ているようで、ほほえましくなる。

「ん？ そつちのパジャマヒナはどうして分裂したのか知つてるの？」

今のは話に引っかかることがあつてパジャマヒナに声をかける。すると、彼女はこちらに向き直ると、人差し指をビシツと立てて自分のことを指さす。

「ヒナっち」

「え？」

「私のことはヒナっちって呼んで☆ 着替えちゃつたら呼べないでしょ？」

「えつと・・・ヒナっち？」

私がそう困惑しながら呼ぶと、ヒナっちは満足したようにむふーと息を吐いて、自慢げに胸を張る。

「そうね・・・私のことを一言で表すならヒナの欲望の発露かな？」

「欲望の発露？」

「ま、待つて！」

ヒナっちはそう言うとヒナは顔を真っ赤にして抑えにかかるうとする。しかし、あまりにも慌てているのか簡単に腕一本で制されてしまう。

「そう。ヒナのあんなことしたい、こんなことしたいっていう欲望が私。要するに溜めすぎちゃつたわけね。だから～・・・こんなこともヒナのやりたいことだよ！」

そう言うとヒナっちは素早い身のこなしで私に抱き着くと、首筋に顔を寄せ、カプつと甘噛みをする。

「にゅふふ・・・先生の首筋汗ばんでしょっぱくておいしい～」

「ちよつと私！ なんてことしてるの!?」

「ヒナのやりたいことでしょ？ 本当はぶつちゅーって唇同士でキスしたかつたけど、そこは先に奪つちゃつたら悪いかなあつて」

「!!」

ヒナっちの発言に、ヒナは顔を真っ赤にして自分の膝に顔を埋め

る。ヒナ自身の欲望から生まれた存在というだけあり、どうすれば黙らせられるのか心得ているようだ。

「まあ、そういうわけで…今日はデートしよう！」

「…というわけで、公園に来ましたー！」

手を広げてクルクル楽しそうに回りながら、そう口にするヒナつち。先ほどまでパジヤマであつたが、流石にそれでは外に出られないでの、真っ白でフリル付きの清楚なワンピースを着ており、髪は動きやすいように一つにまとめている。その様はまるで童話の世界から抜け出したお転婆なお姫様のようだつた。

当然、彼女が着ている服はヒナのものである。どこへ出かけるにしても制服しか着ていないヒナにこんな服も持っているのかと聞いたところ、そつけなく『アコにもらつた』と答えた。

私はそれに、『ヒナなら似合うから今度着てほしい』と伝えたところ、『…考えとく』とのこと。そっぽを向いてしまつて表情は伺えなかつたが、耳の先が朱に染まつていたのが見えた。

「…百歩譲つてデートはいいとして、どうして公園なの？ もうちょっとおしゃれなデパートとか…」

ヒナは周りを見渡して肩をすくめながら言う。彼女はヒナつちの柔らかい印象とは正反対のいつも通りの制服であつた。分身体はデートに行くのに制服なんてありえない、と散々ごね回したが、『他に出かけるような服持つてないし』というヒナの発言から諦めていた。事実なのだろう。

私たちは、ヒナつちのデート宣言から近くの公園に來ていた。公園といつてもちよつとした遊具があるだけの小さいものではなく、スポーツ場も併設されているような大きな自然公園である。

そろそろ肌寒い季節となつてきたが、今日は比較的気温も高く、あちらこちらで運動をしている人や、木陰でゆつくり読書をしている人が見られた。絶好の散歩日和である。

「デパートつて…そんなとこ行つてどうするのよ？ 買いたいものもないし、ウインドウショッピングも興味ないでしょ？ というか、前それやつて失敗したの覚えてないの？」

ヒナっちの怒涛の畳みかけにぐうの音も出ないヒナ。夏の海水浴にまだ着られるからという理由で数年前のスクール水着を持つてくる彼女がショッピングに関心があるはずがなく、かと言つてその辺りに私が詳しいはずもなく、お互い無言で気まずい雰囲気のまま店の中を歩くだけ、ということが以前にあつた。

となれば、ヒナっちの言うことももつともであろう。また、彼女もヒナから分かたれた存在であり、口調や振る舞いは違うものの、趣味趣向は本人に準拠するのだろう。ウインドウショッピングと言つた際の彼女の表情は心底嫌そうであつた。

「まあまあ。せっかくお天気もいいし、少し散歩してみようよ」

私はヒナの手を取つて言う。するとヒナは少し逡巡する素振りを見せたが、やがて小さく首を縦に振る。

「おおー！ やるね先生！ その調子だよ！」

そうヒナっちは満足そうに腕組みしながらまるで観客のようにヤジを飛ばす。私が空いているもう片方の手で彼女の手を取ると、心底不思議そうにこちらを見てくる。

「ヒナっちもヒナなんでしょ？ だつたら、仲間外れなんかにできな  
いよ」

「な!? えつ…え？」

私がそう告げると、今のヒナと同じく真っ赤に茹で上がつてしまふ。しかし、私が手を差し出すと控えめに握つてくる。やはり、言動が違つっていてもヒナはヒナのようだ。

私たちは三人で手を繋いだまま、公園内を歩き始めた。

一時間ほど公園内を歩いた私達。と言つても特に珍しいものがあるわけでもないため、観光地のように見たものに対し感想を言い合うようなものはなかつた。普段の二人であれば早々に話題も尽きて、ひたすら無言で歩き続ける…なんて惨事が起こつたであろうが、今回はヒナっちがいた。

彼女は適度に話題を振りつつ、ヒナをからかつたり、私をおだてたりして実に場をうまく回していた。少々明け透けな部分もあつたが、お互いを慮るあまりに何も言えなくなつてしまふ私達にはそれくら

いが丁度よかつた。

ヒナも片つ端から自分の気持ちが暴露されていくことに怒った素振りは見せていたが、本気で嫌がっているわけではない様だつた。まあ、晒しているのが自分自身の分身だからっていうところもあるだろうが。

「さて！ そろそろお昼の時間だね！ お腹すいたー！」

「ん？ もうそんな時間が。さつきお弁当の移動販売車が来てたからそつち行つてみる？」

「あ、その…お弁当…あるから…。あと、座る用のシートも」

ヒナはそうおずおずと告げてきた。確かにちょっと散歩に出かけるには大き目の鞄を持ってきていたと思つていたが。

「それじや、あつちの芝生は入つていいみたいだから、そつち行こっ」私は芝生の方を指し示す。そこは誰もが入つていいように解放されているようで、各々が日向ぼっこしてしたり、お弁当を食べていたりしていた。

「お腹ペこペこ～！ 早く行こう！」

そう言つてヒナつちは私の手を振りほどいて元気に駆け出して行つた。私たちもやれやれとそれを追つた。

「うわー！ 美味しそう！」

目の前に広がるお弁当の光景に、ヒナつちが目を輝かせてよだれをたらしそうになつてゐる。私たちは芝生の上にレジヤーシートを引き、ヒナが持つてきていたお弁当を3人で囲んでいた。

公園にデートに行くことに決まつてから出発までちょっとした身支度ぐらいしか時間がなかつたので、おにぎりを詰めたぐらいだと思つていた。

しかし、予想に反してツナや卵のサンドイッチ、卵焼きにたこさんウインナー、唐揚げや茹でブロッコリーなど、とても30分足らずで作れるようなものではなかつた。前日の残りという線も考えられたが、しつかり三人が満足できるだけの量があり、すぐにその考えは霧消した。

「本当においしそうだね。インスタントを詰めたものなんかじやなく

て、全部手作りみたいに手がかかるように見えるけど、最初から用意していた?」

「そ、そんなわけないでしょ!…これは…そう!…風紀委員のみんなへのお弁当!」

私が聞くとヒナは両手をブンブンと振りながら、慌てて否定する。  
「へー。そんなことしてたんだ」  
「え、ええ!…アコがどうしても私の手作りを食べたいと言つたから!」

なるほど。ヒナは自分のお弁当を時々作っていると言つていたし、それをアコがねだつたのだろう。ならば、今日はヒナのお弁当が食べられなくてさぞ残念がつてているのではないだろうか。

私は、「そつか」とだけ呟いてお弁当に向き直る。視界の端でヒナがそつと胸を撫で下ろしているのが見えた。

「もう、そんなのどうでもいいから食べよう!…お腹空いた!」

「そうだね。それじゃ、いただきます」

「いただきます」

三人で手を合わせて唱和し、各自食べ始める。

「うーん!…美味しい!…さすが私!…料理が上手!」

「褒めているのが自分の分身っていうのが複雑な気分ね…。大して手間はかかるでないしそんなに褒めるようなことはないけど…」

「いや、本当に美味しいよ!…これならいつお嫁さんになつても大丈夫だよ!」

私はヒナの作つたお弁当を食べながら絶賛する。お弁当なので冷えてしまつていて、それすら計算されているのか味は全く落ちていなかつた。普段あまりまともなものを食べられていないので、より骨身に染みた。こんな料理が毎日食べられたら楽しいのに。

「おお、先生大胆!…よかつたね、ヒナ!…先生が嫁に来てほしいって!」

「んなっ!?…お嫁さん!…確かにもうちょっとで18歳で結婚可能な年齢になるけど!…まだ!…まだ早いから!」

「まだ?…つてことは18歳になつたらいいんだね?…ひゅー!…だ

いたーん！」

「ち、違つ!?」

ヒナっちは茶化しにヒナは顔が真っ赤になり、否定するように手をブンブンと振り回す。ヒナっちはヒナのあまりの必死さに大爆笑していた。

「先生！ 違う！ 違うから！」

ヒナはこちらに話を振つてくる。このまま納めてもいいが、ここは流れに乗つておくことにする。私は手で顔を覆つて泣く振りをしながら

「え、そんなに否定するつてことは、私のこと嫌いつてこと?！」

「い、いや！ 違う！ 好き！ 先生のこと好きだから！」

「おつとお？ ここでヒナの大胆告白だあ！ 両思いだねえ！」

「違うから！ いや、違わないけど…！」

どんどん墓穴を掘つていくヒナ。あまりに興奮しすぎて涙目になつてきている。さすがにちよつと可哀想になつてきた。

「ヒナっち。そろそろヒナのキヤパオーバーだから終わろうか

「もつと見ていたかつたけど…まあ仕方ないねえ」

「もう…二人とも悪乗りしそぎ…」

ヒナは頬を膨らませて拗ねるようにそっぽを向く。その様が普段の大人びた姿とはかけ離れており、実に年相応に見えた。

「ごめんヒナ。ヒナの慌てる姿が可愛くて…。どうしたら許してもらえる？ 何でもするから…」

「何でも…？」

「うん、何でも」

「そうね…」

私が何でもと言ふと、ヒナは目を閉じて真剣に悩み始めた。ヒナならばボーダーを超えた要求はしてこないだろう。まあ、ヒナならば超えたとしても多少は構わないが…。

ヒナはたっぷり3分程悩んだ後、「あ…」とか「えつと…」とか迷うような素振りをしつつ、ようやく告げてきた。

「その…頭…撫でてほしい…。いややっぱ何でもない…。何もしなく

ていい

散々悩んで絞り出した答えは何ともささやかなものだつた。ハードルを越えるどころか、地面の下を潜つていくようなレベルではないか。しかも、その小さな希望さえ自ら押し殺してしまう。どうしてそこまで自尊心を削れるのだろうか。

「ヒナ…わかつた。頭出して」

「え、あ…うん…」

ヒナは食事をしていた手を止めると、先ほどまで散々渋つていたことが嘘のように、身を乗り出して大人しく頭を差し出してきた。しかし、何かを恐れるかのように目が固くつむられていた。まるで、親に怒られるのを覚悟している子供のように。

そんな彼女の頭にそつと手を載せる。ヒナはその瞬間ビクつと肩を震わせ顔を強張らせたが、少しの間手を動かさずにいるとそれもなくなつた。

私はそれを確認し、ヒナを怯えさせないようにゆっくり手を動かす。ヒナの髪質は柔らかで、いつまでも触つていたくなるほどだった。

そのまましばらく撫で続けていると、ヒナも安心してきたのか、まるで猫が甘えるように頭を擦りつけてくる。表情も普段の仏頂面とは違つて、蕩けたものになつていた。

その安心しきつた表情をいつまでも見ていたいと思つて撫で続けていると、突如隣から

咳払いが聞こえてくる。

「えつと、その…食事続けてもいいかな？」

「えつ…あつ…。そ、そうね。食事中だつたわね…」

「ああ、そうだね。ごめんヒナっち。ヒナっちを置いてけぼりにしちゃつて…」

分身体とは言えヒナっちもヒナなのだ。除け者にするのはよくない。反省しなければならないな。

「いや、そういうのじゃないし…ただ食事を続けたかっただけだし…」

そうふくれつ面でボソボソと呟くヒナっち。その不満げな表情や

ボソボソした口調からそう思つていいことは明白であつた。

「やつ、ちよつ！ 違うつて言つたでしょ！ もうつ！」

ヒナつちの頭に手を伸ばし、ヒナと同じように優しく頭を撫でる。彼女はそれに口では抗議をしてくるが、まったく嫌がる素振りは見せない。それどころか、食事を続けながらも器用に頭を擦りつけてくる。

その光景に、私もヒナも思わず吹き出してしまう。まるで、気まぐれな猫のようだ。

「えつと…私も足りなかつたから…」

そう言うとヒナがもう一度頭をこちらに向けてくる。私はもちろん、と快諾してもう片方の手を伸ばす。

両の手で同じ顔の少女の頭を撫でるという傍目から見ると実に奇妙ではあるが、私にとつて――いや3人にとって幸せな時間を過ごした。

公園での撫で撫でをしばらく堪能し中断していた昼食を再開した後、ヒナの家に帰つてきていた。散歩ができる広めの公園といえど、ひたすら何時間も歩き続けるには限界があり、また日頃不摂生な生活をしている私の膝が悲鳴を上げたのだった。

時刻は16時過ぎ。そろそろこの時期だと日の入りの時間だ。

「うーん…割とさつきので欲求は満たせた気がするけど…戻らないね？ まだ不満なの？ ヒナ？」

「不満つて…今までの私からしたら大分進歩したほうだと思うけど…」

ヒナつちの問いにヒナが歯切れ悪く答える。確かに彼女の言う通り、今までの私達からは考えられない距離感になつていた。

朝の時は膝にヒナつち、対面にヒナという形だったのが、今は両脇に二人がいた。ヒナつちが同じく足の間に挟まろうとしてきたが、ヒナが無言の圧力をかけてきたので両脇となつた。慣れててくれたのか、ヒナと距離が近くなつたのは嬉しいことだ。

「ところで、ヒナつちは消えることに不安とか不満とかないの？」

二人が黙つてしまつたので、急に話題を変えてヒナつちに話題を振

る。

物語としてはよくある分裂もの。消えたくないともう一人が泣く…と言うのは使い古された表現だ。たとえ分身体だとしても、同じ生徒である彼女にも泣いてほしくない。

私がそう尋ねると、ヒナっちは顎に人差し指を当て、しばらく考えた後、

「ん？ 別に…？ 分裂するまでのヒナの記憶は全部持つてるし、分裂して一日も経つてないしね。それに、先生は私にも分け隔てなく構ってくれるから結構満足してるって感じ」

「いくら分身体だろうが何だろうが、私の生徒であることに変わりはないんだから。そこに優劣をつけるのは違うよ」

「さらっとそういうかつこいいことを言う…。けど…それって裏を返せば誰も特別扱いしないってことだよね？」

ヒナっちは私の腕に抱き着きながら笑顔でこちらを見上げる。茶化した雰囲気を出しつつ、しかしその瞳の奥は真剣そのものだつた。

「…えつと…それは…」

「先生、答えて」

「…」

ヒナっちは有無を言わせない勢いで迫つてくる。その迫力に飲まれ、私は返事に窮してしまう。

確かに彼女の言う通りではある。誰か一人を特別扱いしてしまつたら、優劣をつけてしまつたら、確実に誰かしらの不満が出る。それは今後の活動にも差し障るし『先生』として望ましくない。

「やめなさい、私。先生が困っているでしょう？」

「…先生を困らせたいわけじゃない…。けれど、ヒナだつて自分だけを見てほしいでしょ？」

「それは…否定はしない…。けれど、その願いはお互いのためにならない。願つてはいけない我儘」

ヒナはそう言うと、悲しそうに顔を伏せる。違う…ヒナにそんな顔を見せたいわけじゃない…。

「えつと…ごめんなさい…。少し…一人にさせて」

「あ…ヒナ…」

ソファア一から立ち上がり部屋を出ていくヒナの後ろ姿に、私は力なく手を伸ばす。しかし追いかける勇気もかける言葉もなく、その手は力なく下ろされる。

「…結局のところ、今までうまくいかなかつたのは私に一步踏み出す勇気が足りなかつたから…。ようやく気付いたよ」

私は、顔を覆うように手を当て、自嘲氣味に呟く。確かにヒナの主張は控えめ…どころかほぼ無である。気づかれないように、必死に心を押さえつけている。けれど、彼女もたつた17歳の少女。どこかで必ずSOSを出していた。

『……補習授業部は、先生が守るのよね?』

思い返せばあれが彼女の救難信号だった。

『じゃあ、私は誰が守ってくれるの?』

きつと続く言葉はこんな感じであつたのだろう。あの時、私は補習授業部で手一杯だつた。いや、これも言い訳か。傷ついて、辛くて、助けてほしい人にとってそんな事情は関係ない。

「…確かに、それはあるかもね」

ヒナつちが私のぼやきに同意するように呟く。

「けど、言わないと伝わらない。言わなくても気付いて欲しいっていうのは…傲慢で、我儘」

「いいんだよ、我儘で、甘えたって」

「それなら…今日一日だけでも…もうちょっと特別扱いしてあげてもいいんじゃない? 私は満足したからさ。ヒナの部屋はドアを出てわしやと撫でる。

「わかつた。行つてくるよ」

そう言つて私はソファア一からゆつくり立ち上がり立つと、大きく深呼吸をする。そして、ヒナつちの頭に手を載せ、その柔らかい髪をわしやわしやと撫でる。

「ちよ、先生。いきなり何するの?」

「ヒナつちにも助けられたからね。ありがとうって」

「もう、先生…。特別扱いするつて言つた直後なのに」

「ヒナっちはヒナだからね。問題ないんだよ」

私がにつこり笑いながら言うと、ヒナっちは『なにそれー』、と呆れたように苦笑いする。ヒナっちは、私の手で乱れてしまつた髪を整えつつ、満面の笑みでこう言つた。

「頑張つてね、先生」

ドアの前に立つと大きく深呼吸する。けれど、それでも動悸は收まらず、手汗も滲んでくる。足も震えて逃げ帰りたい気持ちもあるけれど、それは決して許されない。

私はもう一度だけ深く息を吸うと、意を決してドアをノックする。「ヒナ…入つていい?」

「…どうぞ」

ヒナから許可が出たので、ノブをひねりドアを開ける。緊張ゆえの手の震えから、その手つきには普段以上に慎重なものになつてしまつた。

「えつと…ヒナ…その…」

「先生、私は大丈夫だから。気にしないでいいよ」

私がなかなか言葉を探せず逡巡していると、ヒナはそう言つた。何でもないことのように笑いながら言つているが、その表情は強張つているように見えた。何でもない…わけがないのだ。

私は、またヒナに無理させてしまつていてることに気付き、居ても立つても居られず、何も考えずに行動に起こした。ヒナに近づくと、その小柄な体をぎゅっと抱きしめる。

「え、あ、ちょ…その…何が…?」

腕の中からヒナの困惑した声が聞こえる。動きはフリーズしてしまつており、何が起きているのかわからない様子だ。

「ごめんヒナ、なんか色々考えたけど、もうわからなくて…本当は大人だからしつかりとできればいいんだけどね…」

「え…あ、うん…」

しばらく無言でヒナを抱きしめていると、彼女からもおずおずと私の背中に腕を回してくる。そして、確かめるように何度も私の背中を撫でてくる。

「ねえ先生…先生も怖いの？ 先生も悩むの？」

「怖いよ。導く立場というのはつまり、私の選択一つで皆をおかしな方向に持つて行けちゃうということだからね。一杯悩むよ。結局のところ、大人だって長く生きて経験を積んだからなんとなく対処できるってだけだし」

そう私は愚痴のように吐露する。私は生徒を戦闘指揮する役割と、生徒を教え導く二つの役割も担っている。指揮を間違えて、生徒を傷つけてしまったときなど激しい自責の念に襲われる。

教え導くと言つても勉強を教えるわけでもないから、教えるのは人間性とか倫理面とか心の方面。自分の心でさえままならないのに、他人を救うなんてなんて傲慢か。思い悩んでいる生徒がいるとき、背中を押す方向を間違えてしまった場合…その道の先は奈落かもしけないのだから。

色々ごちやごちや考えていると、なんだか涙が溢れてくる。私の体の震えでそれがわかつたのか、私の背中に添えられているヒナの手が、まるで子供をあやすようにさする。

「先生も私と同じなんだね…。皆に頼られて、自分でしかできないやらなきやいけない仕事がどんどん降ってきて…。それのどれかを一個でも間違えると大変なことになつて…」

「でも、私は…皆に戦闘で守られてばかりで、だからこそ…」

「じゃあ、それこそ先生の心は誰が守るの？ このまま抱え続けたら、私みたいにきっと折れてしまう。一方的にどちらかがどちらかを支えるなんてそんなの歪でしょう？だから、頼つたつていいの」

「私は…私は…」

私はヒナのことを無言で強く抱きしめる。その体はともすれば折れてしまいそうで、そんな彼女に慰められているのがとても情けなくて。

けれど、ヒナはそんな私のことを非難など決してせず、いつまでも私の背中を撫で続けていた。

しばらくそうしていたが、お互い気持ちが落ち着くと恥ずかしくなってきたので、どちらからともなく体を離す。

「ごめん、ヒナ。ヒナを慰めに来たのに、なんだか私が慰められる形になっちゃって…。それに結局特別扱いについてはうやむやだし…」

私は恥ずかしさを誤魔化すように咳ばらいをしつつ謝る。ヒナに感情を吐露した挙句、抱きしめて泣くという何とも酷い痴態を見せてしまった。

私の謝罪にヒナは優しく首を振ると、まるで慈母のような柔らかな笑みを浮かべる。

「先生が思っていることを教えてくれて嬉しかった。今まで悩むことなんてないんだろうな、って思つてた先生が私達と同じだつてわかつたから安心した。他で弱みを見せない先生が私にだけ見せてくれる…十分特別扱いじゃない？」

「ヒナ…」

「それに…甘えてくる先生もちょっと可愛かつたし…」

「可愛いって…喜んでいいのかわかんないな…」

私はバツが悪そうに頭を搔く。可愛いって言われてもどうしていいかわからない。ヒナが可愛いって言われて戸惑っていたのがなんとなくわかった気がする。まあ、ヒナなりに茶化して気遣つてくれたのだろう。本当に頭が上がらないな。

「ふふ、そうやって照れてるのも可愛い。いい子いい子」

「えええ…」

ヒナは笑いながらまるで子供に接するように私の頭をポンポンと撫でる。完全に立場が逆転してしまった…。これでは私が甘やかされているじゃないか。

「まあ、私のことはいいとして…ヒナっちにお礼を言いに行かなくちゃ。背中を押してくれたのあの子だし」

「私に背中を押されて私に会いに来るつて、パツと聞いただけでは意味が分からぬ話ね。けど、確かにそうね…たとえ自分自身だとしても」

私たちはお互の意思を確認すると、ヒナっちに会いにさつきまでいた客室に向かう。ヒナっちに会つたら、お礼を言つて頭を撫でよう。またさつきみたいに怒られてしまうかもしねりないが。

そう思いを馳せつつ、部屋の扉を開けると、そこには誰もいなかつた。

「ヒナっち…？」

声をかけるも返事は返ってこず、私の声は無人の部屋に吸い込まれる。辺りを見回してみるもそう広い部屋ではない、すぐに見終わってしまう。すつかり日が落ちてしまつて暗くなつた部屋は、余計に無人さを強調させる。

「ヒナ…ヒナっちが…」

「ええ…そうね…。ほら見て、あそこ」

ヒナがそう言つて部屋の一角を指さす。そこには先ほどまでヒナたちが着ていたはずの白いワンピースが落ちていた。

「先ほどのやり取りで私が満足してしまつたから…。私の不満で分裂したのなら、私が満足してしまえば元に戻つてしまふ」

「そんな…ヒナっちが消え…」

「消えてないわ。元に戻るつて言つたでしよう？　あの子の思いも全部私の中にある。だから、自分を責めたダメ。分かった？」

「あ、ああ…」

ヒナの言葉に今一釈然とせずも、彼女の言葉を信じるしかない。だから、私はヒナに――ヒナの中にいるヒナっちに向ひ合い頭を下げる。

「ありがとうヒナっち。君のおかげでヒナと打ち解けられた。本当にありがとう」

「ありがとう…私…」

ヒナが目をつぶり、胸に手を当てて言う。その姿を見ると、本当に彼女の中にヒナっちがいると感じられるのだった。

後日、私はゲヘナ学園の風紀委員室に向かつていた。ヒナに会いたいから、という理由もあるが、あの日は急に休みになつたであろうと思われるため、忙殺されているヒナを労いに行くのがメインの理由だ。

ドアをノックし名乗ると許諾の声が聞こえる。私はドアノブを捻つて開け、入室する。中を見渡すと、ヒナ、アコの二人がいた。

「やあ、ヒナ。遊びに来たよ」

「いらっしゃい先生」

私が挨拶すると、ヒナは手元で処理をしていた書類から顔を上げて、笑みを浮かべながら返してくる。

「なつ!? 私のヒナ委員長があんなに嬉しそうな顔をして!? 何をしたんですか!?」

アコが私とヒナの和やかな雰囲気を察して悲鳴染みた声を上げる。というか、私のヒナ委員長つて欲望が漏れていいくぞ。

「そういうのいいから、先生にコーヒーを出して」

「ですが！」

「アコ」

「くっ！」

ヒナの場を収める発言にアコが食い下がろうとするが、ヒナにひと睨みされて押し黙る。そして、唇を噛みしめてこちらを睨みつつ、私に出すコーヒーを準備し始める。

「ところで先生、今日はどうしたの?」

「ヒナに会いたかったから、じゃダメかな」

「だ、駄目じゃないけど…むしろ嬉しいけど…」

私は近くにある椅子に腰かけつつ、ヒナに返答する。あまりにストレートな発言にヒナは顔を赤らめても「ごもご」と言う。しかし、それ以上は言わずに恥ずかしさを誤魔化すように書類仕事に戻った。

「どうぞ、先生。雑巾のしぶり汁で淹れました」

「えつ…」

「嘘です」

アコは私の机にコーヒーを置くと、不敵な笑みを浮かべて自席に戻る。本当にしぶり汁じゃないよね?

「訪問の理由だけど、会いたかったからっていうのも嘘じゃないんだけど、先日のあれ突発休だつたでしょ? だから忙しくしてるんじやないかなって心配して見に来た」

コーヒーを一口すすり、ここに来た二つ目の理由を告げる。ちゃんと美味しいコーヒーの味で安心した。

しかし、私としては何気なく言つた発言に、ヒナのペンを動かす手がガクツとずれる。

「突発休？ ヒナ委員長、先日の休暇は計画休ですよね？」エデン条約お疲れ休みという名目で。現にイオリとチナツはそれでお休みのはずですが…」

アコはスケジュール表を取り出して、困惑しながら確認する。ヒナは先ほど以降ピクリとも動かない。

「…ヒナ？」

ヒナに目を向けるが、やはり微動だにしない。

そうしていると、ドアをノックする音が聞こえた。

「山海経高級中学2年練丹術研究会の薬子サヤなのだ。先日の薬の代金を貰いに来たのだ」

「サヤ…？」

「おお、先生もいるのか。お邪魔するのだー」

そう言うとサヤは入室許可を出していないにも関わらず扉を開ける。

「サヤ、どうしてここに？」

「先ほども言つた通り、ゲヘナ風紀委員長に依頼されて作成した薬の代金を受け取りに来たのだ。振込でもできるけど、やはり直接感想を聞きたいのだ」

ヒナがサヤに薬を…？ 一体何の薬だ？

「さて、ぼく様が作った分裂薬の効用はどうなのだ？ 仕事が忙しうぎるから倍の速度で仕事ができる薬が欲しいという依頼だつたが。依頼時の表情が実に鬼気迫つていたから、今回はしつかり作つたのだ。まあ、半日ほどしか持たないのは『愛嬌だな』

「…ねえサヤ、その薬は不満が溜まると分裂するとか、分裂したほうは性格が変わるとかある？」

私は念のため、サヤに確認する。すると、サヤは不思議そうな顔をして、首を横に傾けながら

「不満？ 何の話なのだ？ 確かに面白そうなギミックではあるものの、そんな効果はつけてないのだ。それに性格も変わらないのだ。も

し、変な性格になつたら依頼が達成できないのだ

「…」

私は無言でヒナに目をやる。ヒナは、少し離れているこちらからもわかるほどに耳まで真っ赤にさせ、肩を震わせていた。

「もう…どうやらお取込み中のようなのだ。また後日来るから、その時に聞かせてほしいのだ」

サヤはこの部屋に漂う微妙な空気を察したのか、返事も待たずにつたこらと去つて行つた。爆弾をまき散らすだけまき散らして帰つたぞ…。

「ヒナ、少しだけ、お話があるんだ」

「ヒナ委員長、私も混ぜてもらつていいですか？」

アコと二人、ヒナを取り囲むようにして近づく。ヒナは顔を上げず、依然黙秘を貫く構えのようだ。

一日中ヒナを手伝うつもりで来たのだ。時間はたっぷりある。計画の全貌をじっくり聞かせてもらおうか。今日はヒナのどんな可愛い表情が見れるのか、楽しみである。

もうひとつ未来（ケツ）に痛みがあるなら（作・あおきみどり）

これは、あつたかもしれない。もしものお話。  
ありえた世界の下らない話だ。

「……貴様が計画の一番の支障なりそうだと、彼女は言つていたからな」

「銃が……！」

サオリが引き金に指をかけるのを見て、先生は息を…む。  
細い指がゆっくりと押し込まれ――。

パン！ と渴いた音と共に、紅い血しぶきが舞う。

先生は勢い良く地に倒れこんだ。

「ウツ、アアアツ……！」

「せん、せ……うああああああああ！」

「ヒナ……や、め……！」

激昂したヒナが先生の前に立つが、銃の雨に屈して膝をつく。  
やめてくれ、庇わなくていいんだ。その一言さえ激痛で発すること  
ができなかつた。

とにかく痛かつたのだ――ケツが。

そう。この場にいるアリウス、ヒナ。誰もが気づいていなかつた。  
先生が撃たれたのは胸でも腹でもなく――おケツだつたのだ。

エデン条約 I F 「もしも撃たれた箇所が腹ではなくケツだつた

ら

「意識は……ありますね」

「はい……」

救急車の中。先生は虚無みたいな顔で天井を見上げていた。

ドッジボールの話をしよう。

見たことがあるだろうか。クラスに一人はいる、運動神経なさすぎてボールを変な躲し方する同級生の姿を。

ぐによりと無駄に体を捩じって躲しきれないアレだ。

先生も漏れなく、その情けない躲し方をするタイプの一人だ。

サオリに銃を向けられ「やられる！」と直感した先生は、本能に刻みついたその意味のない回避行動を咄嗟に取った。

お陰で、腹に被弾するはずだった弾は左ケツに飲み込まれ、ことなきを得た。

その後、ヒナがセナの救急車に先生をシユートして今に至る。絶対ヒナの方が重傷なんだけど。それさえ言う暇がなかつた。

無表情でセナが語りかけてくる。

「負傷箇所はわかりますか？」

「え」

「負傷箇所です。痛いと感じる部位をお聞きしています」

どう答えよう。まさかセナも、あのシリアルアスな空気でケツを撃たれたとは思つてはいまい。ケツだけに。

果てしなくどうでもいいプライドに葛藤する先生は「どうせバレる」思い、意を決して口を開いた。

「ケツです……」

「はい？」

「お尻を……臀部を撃たれました」

「ブツ」

無表情のまま、セナが噴き出す。先生の目から光が失われた。

「ゲホツ……えほつ。んんつ……臀部、ですか。それは不幸中の幸……ンンツ。ごほん」

「ヒナの方が重傷なんだよ……まちがいなく……」

「撃たれた箇所はともかく、先生はひ弱ですから。先に保護して正解でしよう。患部を見るのでズボンを脱いでください」

「えつ」

「パンツもです」

「その……服の上からお願ひできないかな」

「何故でしようか」

「今日のパンツの柄が……ポムポム○リンなんだ」

「ブツツ！」

そしてなんやかんやあつて。

適切な治療のため、一番近いトリニティに向かうことになった。

結局パンツを脱がされ軽く処置を受けた先生は、うつぶせで顔を覆っていた。

「もうお嫁に行けない……」

「大変参考になりました。象さんとは言い得て妙です……んんっ！  
うん！　けほつ……」

トリニティの間近に来て、救急車の速度はゆっくりになる。

校門の外には生徒が溢れかえつていて進めなくなっているのだ。

セナが車を飛び出して、人混みに向かっていく。トリニティ生に道を開けてもらうように説得しだした彼女を、先生は窓から覗き見た。  
「負傷者を輸送中です。道を開けてください、緊急事態です」

「開けるわけないでしょ！　ゲヘナなんかのために！」

「重体なんです。そこをどいてください」

救急医学部の誇りがあるのが、トリニティ生徒に囮まれても動じず  
にセナは対応する。

私のケツなんかのために……。感動で先生は少し泣きそうになつ  
ていた。しかし。

「重体？　私達はすぐ治るでしょ、そういうの！」

「症状言つてみなさいよ！　症状！」

「……症状」

先生の状態を尋ねられると、セナの額から汗がダラダラと出てき  
た。

「……？　何で汗かいてるの？」

「いえ……。今日はお日柄も良く、気温がポカポカと……」  
「それもそうだ。

「ケツ撃たれたから、トリニティに入れて♡」なんてお願ひが通用する  
ような空気じやない。

苦しそうにセナはなんとか言い訳を絞り出す。

「重傷は……重傷です」

「だから具体的に聞いてるのよ！ それを！」

「患者のプライバシーのために、お答えする事は」

「怪しいわね！ 爆弾でも乗せてるんじゃないの！」

「重傷ということは……重傷を負っているという事です」

「連邦元環境大臣みたいなこと言い出したわよ、こいつ！ 中身がまるでないわ！」

ごめん、私がケツなんか撃たれたせいで。君が矢面に。先生が目から血涙を流す。ケツではない。

かくなる上は自分は公然の前に現れて、血まみれのケツを晒すしかない。先生が覚悟を決めたその時だつた。

「やめてください！ どうして負傷者が乗つてるとわかつて、貴女たちは！」

救護騎士団のセリナ、ハナエがやり取りを見かねてやつてきた。

「救護騎士団……！ ミネ団長の！」

「重傷ということは重傷で運ばれてきてる、何でわからないんですか  
がややこしくなつていく。  
やめてくれ。  
私のケツのために争わないでくれ。ケツを撃たただけなんだ。  
これは本当に出るしかない。何と言われようがパンイチを晒すしかない。

「痛むケツ……ではなく足を引きずり救急車のドアを開く。  
「——すみません、閃光弾投擲します！」

「え？」

何やら不穏な台詞を言う、聞きなれた声。先生は釣られて顔を右に動かす。

すると目の前で閃光弾が光り―――。

十分後。医務室のベッドに先生は腰かけていた。

「ひん……どんどん負傷箇所が増えていく……」

「幸い全て軽傷ですので、少しの辛抱です」

目にダメージを負つたものの、セナと先生はトリニティに入ることに成功した。

ケツを包帯ぐるぐる巻きにして先生は立ち上がる。

「行くのですか。そのおし……ではなく。その臀部で」

「行かないと。たとえ――お尻が四つに割れたとしても」

「ぶつっ！」

今日のセナの笑いのツボはとても浅いようだ。先生も一周回って、ケツで笑ってくれるのが段々楽しくなってきた。

「ケツが……決壊！ なんつって」

「…………」

しかしダジャレを聞いた瞬間、セナはスンツといつもの顔になってしまった。狙うと駄目なようだ。

「そういうえば、ヒナ委員長が病室から消えたそうです」

「何で!? ……あつ」

先生は急いで医務室を出てタクシーを呼び、ヒナの自宅へ向かう。そういえばヒナは先生が軽傷でピンピンしているのを知らない。早く弁明せねばと半立ちのまま拳を握りしめた。

「お客様危ないので座つて……」

「撃たれたんですよッ！ ケツを！」

「あ、はい……」

それからしばらくが経つて。先生はヒナの家を訪れていた。

「……先生？」

「ヒナ……」

初めて来たヒナの部屋は思つたよりも殺風景じゃなくて——否。そんな事はどうでもいいのだ。

ヒナの目には隈ができ、よく見れば目が真っ赤に腫れていた。先生の胸の内をベリーベリー申し訳なさが覆っていく。

「先生……怪我は？」

「いやもう……ハイ、お陰様で元気です……ヒナは？」

「私は頑丈だから……」

いつもテンションは低めだが、今回はその比ではない。

背中に「先生を守れなかつた……」「私なんて……」という字が見えるような気までしてくる。

「もう……疲れた。私は……小鳥遊ホシノのように強くは……」

泣かないでくれ。落ち込まないでくれ。撃たれたのはケツなんだ。座るのは辛いけど、全然元気なんだ。それを言える空気ではなくて、なんかもうこのままシリアルに流した方が楽になれるような気がした。ケツだけに。

「その……そんな落ち込まなくとも。ヒナのおかげで私ピンピンしてるし……」

「つ、また、そういうこと。撃たれてたでしょう」

「いやまあ撃たれたけど……」

「空元氣してまで励まされても、喜べない……」

「本当に元氣なんだよ!! なんなら今からスランピア行く!?」

「つ！ いい加減にしてつ！」

怒ったヒナが、先生のお腹をつねる。三秒後、ヒナは首を傾げた。

「……？ 撃たれたの、こここの辺り……よね」

さわさわ、と周辺を優しく触れて、つつくが先生がまるで反応しないので眉間に皺が寄る。

「……撃たれた、よね？ あれ、怪我は……？」

「うッ……ぐすつ……！ ヒナ……うつ……ぐつす……」

「え、ちょ」

先生はとめどなく溢れる涙を流したまま、ヒナを抱きしめる。

「何!? よ、よーしよし……どうしたの?」

「聞いてくれ……ヒナ。私が……私が撃たれたのは——ケツなん  
だよ」

先生が嗚咽を漏らしながらした意味不明な告白に、ヒナは眉をひそめる。

「ケツ? え……お尻?」

「そ、う、な、ん、だ、よ、オ、オ、……、無、駄、に、じ、ん、ば、い、が、げ、で、ご、べ、ん、……、つ、！」

多くの生徒からケツに情けをかにられ続いた先生の心は、とうに切  
れ痛なつていたのだ。

痔から血が流れる様に先生の涙は溢れ続ける。「ケツを撃たれただけなのに……しようもないことなのに……大事みで、…………べすつ

「えい」

ヒナが先生を抱きしめたまま、小指で軽く患部をつつく。

うるせつ…………！？  
ごめんそんな痛かつた…………？」

ヒナの小ヤ

しばらくその様子をしばらくドン引きで見ていたヒナだが、ついに  
ウスツと笑へを漏らした。

「いやえ……いやえよお……」

「ふふつ、ごめん……大丈夫？」

頷いて中腰になつた先生は、ヒナの変化に気づいて首を傾げる。  
「…………?」  
「ナ、ちかくで元氣になつた?」

「っ!  
誤解しないで。先生がおかしかつたからとかじやないの……」

!

ヒナは言葉を区切り、ロツカーから制服を取り出す。

「私は……ちゃんと守りたい物、守れてたんだなって。それを確認せ

ずに泣いてたんだから……急に気が抜けて。少し、部屋出てくれる？」

言われた通り廊下に立ち、ヒナの着替えを待つ。中から衣擦れの音が聞こえてきた。

「……先生はお尻が四つに割れただけだから、死んでない。まだ守れる……失つてなんかない」

「いや四つに割れてないけど……」

扉が開く。いつも通りの恰好、いつも通りの雰囲気に戻ったヒナが柔らかく笑つた。

「ホントは……先生に甘えようかなって思つたけど……もう少し先にする。お尻の借り、返しに行こう」

「……！　ああ……！」

二人で領いて、玄関を出る。そうだ。先生はまだ、ケツを撃たれただけ。

遠い場所で心が折れかけていたアズサが立ち上がりつている。ツルギやハスミが無理矢理ベッドから這い出ている。

ヒナがいない事を案じながらも、アコ達が風紀員を動かしている。まだ誰も諦めていない。

夢の世界でセイアは、その様子を呆然と眺めていた。

「これは……私の知らない、未来……」

「行こうヒナ……。彼女達に見せるんだ——真のE T O（えらくケツが痛んでトイレに行けないお尻条約機構）つてやつを」

これは、もしもの物語。

大したことのないイフの世界、下らない分岐。だから、この世界も。

「絶対に終わらせません！　私達の……！　私達の——青春の物語を！」

皆で手を取つて立ち上がり。

「くッ……！　アズサ何故立つ！　そして何故執拗に尻に撃つてくる

！」

因縁をも乗り越えて。

「うおおおおおお皆！ ヒエロームス……あのデカブツのデカケツを狙え!! 切れ痔にしてやるんだ!!」

理不尽だつて振り払っていく。

間違いなく、どうしようもなく世界はハッピーエンドに収束する。これは、そういうお話だ。

# 盤上にて盤外、ただ観測するのみ（作・ブルア力怪文書）

僅かな燭台と写真立てを乗せた円卓。そこに座るのはスース姿の男が2人。円卓を囲う椅子の数に対して、座っている人数は少なかつた。

「失礼。私が最後のようだな」

身体中から軋むような音を鳴らしながら席に着いたのはゲマトリアの1人。頭部を2つ持ち、身体が木で出来ている芸術家……マエストロだつた。燭台の火が彼を怪しく照らす。

「全く……呼んだのはあなたでしよう」

同じく燭台の近くに座つていたのが、スース姿に真っ黒な頭部。顔にひび割れのように入つた白い模様が目と口のように見える男……かつてアビドス高校に策略を張り巡らしていた黒服だつた。足を組み、苛立つていることを隠そともしない態度。マエストロはそんな黒服のことなど一切気にせずに席についた。

「今日君たちを呼んだのは他でもない。かの人物についてだ」

彼らには目的があつてキヴオトスで活動している。しかし、その目的を阻むのがキヴオトスに存在するイレギュラー……キヴオトスの学校に通う少女たちが「先生」と呼ぶ人物について議題を挙げた。

「私はかの人物が使う秘めたる神秘……大人のカードの力を見たのだ！」

ギシリと音を鳴らしながら両腕を高く上げ、ミュージカル俳優のように話し出すマエストロ。そんな彼にしごれを切らしたのか、黒服が椅子から立ち上がる。

「あなたの講談を聞きにきたわけではありません。忙しいので失礼させてもらいますよ」

黒服がそのまま立ち去ろうとする。マエストロも彼を止めずに、大人のカードについての説明に夢中になつていた。

「まあまあ、待ちたまえよ。君にも事情はあるのだろうけど、聞く価値

はあるんじゃないかな?」

去ろうとする黒服を止めたのはもう1人の参加者。2人とは対照的に、燭台から離れた真っ暗なスペースに座っていた。しかし、声が出てているのはその座っている人物ではなく、机に置かれた写真立てからだつた。

「ゴルゴンダ……あなたはいつもそうやつてマエストロに付き合うのですね」

「そういうこつた!」

静止されても黒服はすぐに座ろうとしない。ゴルゴンダの側にいるゴルゴンダの代行者、デカルコマニーが元気よく返事をした後写真立ての中で正面を向いているゴルゴンダは笑いながら話した。

「君もあの人と対立したことがあるのだろう。あの時は現地の生徒たちの反抗に失敗したのが君」

デカルコマニーが黒服を指差す。

「あの人切り札を使わせたマエストロの話は面白くないかもしけないけど、聞いといた方がいいんじゃないかな?」

黒服はゴルゴンダとデカルコマニーを見つめた後、椅子に座つた。「喋りであなたに勝てる気がしませんからね。今回は引き下がるとしますよう」

「ああ、助かるよ。君は理論的に話せば分かつてくれる方の人物だと信じていたからね」

「そういうこつた!」

黒服が席に着き、いよいよマエストロの話を聞く準備が整う。しかし、当のマエストロは黒服が聞く聞かない問わず、勝手に話し続けていた。

「惜しむらくはかの力に対抗すべし、兵器の存在。あれがもしも完成品……いや、オリジナルを越えし……至高へ至るに足る存在であつたのならば……」

黒服が頭を抱える。デカルコマニーは黒服に向かつて軽く謝罪するかのように手を合わせていた。

「私が理論的に話せば分かるほうだと言うなら……」

「ああ、間違いなくマエストロは分かつてくれないタイプさ」

自分の話をマシンガンのように話し続けたマエストロ。やがて、先生にまつわる話が終わると、手を大きく広げたまま称賛の拍手を待つように姿勢を維持していた。拍手をしたのはデカルコマニーだけだった。

「して、ゴルゴンダよ。かの力になんと名をつける。私はそれが今一番知りたいのだ」

マエストロはゴルゴンダを見つめる。興奮冷めやらぬと言つたようか、いつもより興奮気味なマエストロ。しかし、デカルコマニーはすぐに両手をすぐめた。

「結論から言うと『脚色が多すぎて参考にならない』かな。直接見ない限りは命名のしようがない」

「そういうこつた！」

マエストロの話に脚色が多く、参考にならないのも理由の1つ。しかし、それ以上に「マエストロには分かりやすく説明することが出来ないだろうからこれ以上は時間の無駄」というゴルゴンダの本音もあつた。

「どうか。ならあの輝きはしばし私の胸の中に秘めておくとしよう」椅子の背もたれに身体を預けるマエストロ。そのやり取りを聞き流していた黒服が再び立ち上がりこうとしていた。

「もう話は終わりでよろしいでしようか。私もそろそろ時間なので」デカルコマニーもいつでも立ち上がるよう写真立てを抱える。しかし、そんな2人に待つたをかけるようにマエストロが喋り始めた。

「あの事件に関与していたのは私だけではないのかかもしれない。君たちも心当たりがあるだろう」

マエストロにとつては雑談のつもり。しかし、黒服とゴルゴンダにとつてはそれが本題であった。自分たちの目的のために協力しているが、互いの「眞の狙い」までは把握しきれていない。ここにはいない4人目、多くの目を持つアーヴィングについて情報を持つておくのは悪くないことだった。

「あの学校に通う子たちを本当に駒としか見てないらしいからね。黒服……君がアビドス自治区にいたとき、何か接触はあつたかい？」

「私の把握するかぎりはなにも」

それとなく探ろうとするゴルゴンダに、知っているのか知らないのか、情報を渡そうとしない黒服。いつまで続くか分からぬ情報戦はマエストロによつてあつさりと中断された。

「私の目的は満たされた。また会おう……」

椅子から立ち上がり、来た時と同じように身体を軋ませながら去つていく。マエストロにとつて腹の探し合いなど、心底どうでもよいことだつた。最初から最後まで堂々と自分らしい立ち振る舞いを見せたマエストロに黒服とゴルゴンダも追従する。簡単に言つてしまえば「真剣に対応するのが馬鹿らしくなつてきた」だけだが。

「さて、それじやあ私も失礼しようかな」

「そういうこつた！」

デカルコマニーがゴルゴンダを抱え、杖を用いて歩き始める。そのままゆつくり退室しようとするのを黒服が声をかけた。

「ゴルゴンダ。あなたはこのまま見守り、名を与えるだけに留まるつもりですか？」

黒服の問いかけにデカルコマニーが止まる。今日初めて、ゴルゴンダが本心から笑つた。

「まさか、私がそこまで世捨て人のように見えますか？　あなたと同じように好機を待つてゐるだけですよ」

黒服は何も答えない。そして、答えることを期待していないうにゴルゴンダは話し続ける。

「地に固執するホルス、無垢なる兵器、虚に抗う無……今分かつているだけでもこれだけ面白いものがある」

「そういうこつた!!」

今まで以上に声が大きいデカルコマニー。普段は淡々と話すゴルゴンダの声が少しづつ興奮に包まれていく。

「あなたも見たでしよう、あれほど興奮するマエストロを。あなたも聞いたでしよう、大人のカードが垣間見せた力と言ふものを」

ゴルゴンダの話を聞いて黒服が耐え切れなくなつたのかあくまで  
も紳士的に笑い始めた。

「私もそろそろ……行動を起こすべきなのかもせんね」

「そういうこつた」

デカルコマニーの言葉で締めたのかゴルゴンダとデカルコマニー  
はそのまま消えるように退室した。マエストロとは真逆にいつにな  
くなつたのかも分からぬ。

「ゴルゴンダ、あなたは私を理論が通じる方に分断しました。そして  
マエストロを通じない方に」

燭台の火を消して、回る黒服。最初にこの部屋に来て、最後に帰る  
ことになつて いた。

「あなたはどうちらなのでしょうか」

誰もいない空間で1人、黒服が尋ねる。答えを返す人がいないこと  
を知りながらも、好奇心の前には聞かざるを得なかつた。

## ホシノに背中を押してもらう話（作・のりし炉）

とある冬の日の、昼下がりのことだった。

しんと冷え切った校舎の中を、すすつた鼻に痛みすら覚えつつ歩いていく。まだ少しだけバランスの悪い足音が、人けのないリノリウムの廊下を叩いて響き渡る。

立ち止まつて窓の外を見やると、陽光を遮る分厚い雲が、変わらず空を覆っていた。日頃より彩度の落ちた景色が、その寒々しさを浮き彫りにさせて いるようだつた。

あの時も確かこんな空模様だつたなと思い返しつつ……かつて凶弾を受けた脇腹に、そつと手の平を当てる。

先の事件——エデン条約の調印式にて受けた傷も快方に向かつてはいたが、未だ完治とは言い難い状況にあつた。

しかしこの程度の怪我で済んだのは、確実にトリニティとゲヘナ、両校の生徒たちのおかげだつた。特に文字通りその身を挺して私を守つてくれたヒナと、その後すぐさま応急処置を施してくれたセナには、感謝してもし切れない。

……グラウンドを見下ろす。降雪の代理とばかりに飛來した砂が、トラックに押し被さつてその境界を曖昧に溶かしている。

この学校が抱える莫大な借金の、その利子部分の返済については概ね見通しが立つたと言えるだろうが……地域特有の砂害など、まだまだ問題や課題は山と残つていた。

いつかまたこの場所が、まだ見ぬ生徒たちで溢れ返るように。微力ながらその手伝いができるべいいと、心ばかりの願いを胸中でこぼしつつ。

私は背後にあつた、「アビドス廃校対策委員会」の表札を振り仰いだ。

(……と、その前に)

目的地より一つ手前の空き教室を、小窓からそつと覗き込む。

学習机を寄せ集め、マットやら何やらを敷いて組み上げられた簡易ベッドの上に……彼女の姿はなかつた。よもや床に落つこちてはい

ないかと室内を見回したが、その小さな背格好はどこにも見当たらなかつた。

では既にこちらで待つていてくれているのかと、委員会室の扉を数回ノックし……彼女のものと思しき間延びした応答が返ってきて、私は引き戸を滑らせた。

……石油ストーブ特有の、むわっとした熱気と臭気が顔面にまとわりつく。

先の教室ほどの広さもない、感覚としては一人暮らしのワンルームに近いスペース。正面には南向きに設えられた大きな窓と、左右の壁際にはスチール製の書庫が並んでいる。

部屋の中央には、一際大型の会議用デスクが鎮座していて……果たして、彼女はそこに突っ伏すように腰かけていた。

「ホシノ」

声をかける。机に上体を投げ出していた彼女は、その姿勢のままこちらを見上げてきて。

「や、先生」

ふにやり、と。いつもと寸分たがわない、緩く優しい笑みを見せた。

少女——小鳥遊ホシノは、百四十センチ半ばという小柄な体躯の持ち主だった。

あどけない丸顔にくりくりと大きな瞳の、何とも愛らしい容貌。フローリングまで届きそうなロングヘアが机から流れ落ちる様は、どこかの瀑布を想起させるようだつた。

高校指定のブレザーをまとつてなお、小学生とも見紛われる彼女だが……これでもれつきとした対策委員会のリーダーで、そしてこの学校でただ一人の最上級生でもあった。

「いや、遠いところをわざわざ悪いねえ。おじさんももう若くないからさ、なかなか長距離の移動もしんどくってね」

そう言いながら身体を伸ばす彼女の、いつものおじさんしぐさに苦笑しつつ。

「ううん。急に相談がしたいなんて言い出したのはこっちだから」

言葉を返して、暖氣を逃すまいと手早く扉を閉めた。マフラーに手

袋、厚手のコートなど各種防寒具を取り扱つて、狭い室内を見回す。

「他の子たちは？」

「今日はみんな、バイトとかお勉強とかでここには来てないよ。かく言う私もこれからお昼寝でね——つ、くふあ——」

対面に着席すると同時に、彼女が大きなあくびを一つ。添えられた指の隙間から、チャームポイントの犬歯が覗く。

「うあふ、むにやむにや……うへへ。いやあ、ごめんごめん」

「気にならないで。昨日も遅くまで見回り？」

「ええ？ おじさんにや何のことだかさっぱりだな？」

「ふふつ。そつか」

露骨に目を逸らされてしまった。

私としては、頑張ってる子にはちゃんと、頑張ってるねと伝えて褒めてあげたいのだけれど。

ホシノにとつてはどうやら、こういうやりとりは少しくすぐつたずぎるらしかった。

「……ていうか、そういう先生こそ疲れた顔してんじやない？ よかつたら先生もお昼寝、一緒にどお？」

「うーん……凄く魅力的な提案だけど、ごめんね。もう少ししたら、外回りの続きを行かないといけなくて」

「ありやりや、フられちやつたか。残念」

「また今度、ちゃんと時間を空けておくよ」

「お、言つたね？ 約束したからね？」

そう笑つて再び上体を丸めようとしたホシノが、思い直したように背筋を正す。

「あくそだ。こつちこそごめんね先生、お茶も出さずに」

「あつううん、全然。お構いなく」

「いーのいーの。……こういう時、いつもノノミちゃんかアヤネちゃんが率先してやつてくれるからな……よつこいしょつと。えうつと、お茶つぱお茶つぱはうつと……」

そんな風に言いながらも、彼女は存外に手慣れた様子で、背後の棚から必要な道具やお菓子等を次々と引っ張り出していく。

さすがは最年長——などと思ひながら、その小さくも頼りがいのある背中を、微笑ましく見つめていた。

†

「は～……染みますなあ。やつぱり甘～いお菓子には、しぶ～いお茶がいちばんだよねえ」

そこまでいくともうおじさんではなくおじいさんでは？

なんてツッコミはそれこそ野暮かと自重しつつ。私とホシノは、流れゆくのどかな時間を共有していた。

彼女が用意してくれたお茶菓子は、確かに絶品だつた。一見するとただの饅頭だつたのだが……実際に口にしてみれば、しつとりとした皮になめらかな餡子が、異様に柔らかく口の中でほどけていく。

袋を裏返して原材料を確認すると、バターと生クリームが使われていた。成る程これがこの口当たりの良さの正体か、と深く感心しながら舌鼓を打つていると、

「……それで？　お話つて？」

うぐ、と言ひよどむ。

その拍子に危うく饅頭が喉に詰まりそうになり、慌ててお茶をあおる。

「わっ、ちょっと先生、大丈夫？」

「つぐ、んぐ——つふう。うん、大丈夫大丈夫……びっくりさせちやつたね」

……そうだった。脳内で食レポの真似事なんてしている場合ではなかつた。

私は今日ここに、そこそこ眞面目な話をしにきたのだから。

ふ一つ、と息をつく。机上で両の指を絡めて、最初の言葉を探す。俯いて視線を泳がせる私の耳に、ストーブの駆動音と——時折ホシノがお茶をすすつて、饅頭の小袋を開ける音だけが届く。

……正直に言うと、こういう時に何と切り出せばいいのか、全く分からなかつた。仮にも教職という立場にある者として、生徒たちから助言を請われることはこれまで多々あつたが……思い返せば、その逆の機会にはなかなか恵まれなかつたためだ。

せつかく彼女の貴重な時間を貰っているのに——という焦りが、余計に頭の中にもやをかけていく。

それでも何とか会話の糸口を掘もうと……唇を湿らせ、息を吸つて、

「ありや、もう最後の一個になっちゃった」

「する、とずつこける。

……出鼻をくじかれてしまった。ホシノは中途半端に伸ばしていだ腕を引っ込めて、悩ましげな顔面を作る。

「うくん……今日の先生はお客様だし、本当は先生に譲るべきなんだろうけど。でもこれ、ノノミちゃんがオススメしてただけあって、すつごく美味しいんだよな！」

話の流れがいまいち見えてこなくて、何も言えず押し黙っていると、

「あ、じゃあさ先生。もし私が先生の言いたいことを当てられたら、この最後の一個は私がもらえるってことでど～お？」

「う、うん……？　いいけど……？」

「えへ、やつたね。うくんと、そうだなあ……」

そのまま腕を組んで、いたく真剣な面持ちでひとしきり考え込んだ後。

彼女はびつ、と人差し指を立てて、

「——アリウススクワッド」

その名を、口にした。

「アリウス分校の——特に、その真ん中でテロを主導してた子たちのこと、とか。……どう？　当たってる？」

……本当に。

この子のこういう時の鋭さには、驚かされるばかりだ。情けなく口ごもるばかりの私をそつと後押してくれる、気遣いと優しさにも。

敵わないな——と私はため息混じりに、力なく口の端を持ち上げた。

「……バレちゃつてたか。さすがだね」

「うへへ、たまたまだよお。亀の甲より年の劫つてね……うくん。お

じさんのカンも、まだまだ捨てたもんじやないなあ！」

自慢げな表情を見せて、ホシノは報酬の饅頭をかつさらつていつた。まむまと最後の一つを頬張る彼女に目を細めつつ、私は思考の海に身を浸した。

……アリウス分校。

アリウス、スクワツド。

ここ最近の私は、いつの間にか姿を消していた彼女たちのことを、ふとした拍子に考えてしまうようになっていた。

遙か昔。現在のトリニティ総合学園が生まれるきっかけになつた、第一回公会議。それ以前のアリウスは数多く存在した分派の一つに過ぎず、当時からゲヘナを毛嫌いしていた程度の特徴しかなかつたそだつた。

そんなアリウスは、当時睨み合いを続けていた各分派が連合を組むことに最後まで反対し……その結果、巨大な一勢力と化したトリニティに徹底的な弾圧を受け、最終的には自治区を追放された。

エデン条約調印式への襲撃は、表向きにはその報復ということになるのだろう。

けれど――

『――大丈夫、もう全部終わりだから。それにどちらにせよ、彼女は私を生かしておくつもりは無かつたはず。だから、良いの』

『――アリウスに帰るということか……？ 帰つたところで、私たちは殺されるだけ……』

図らずも別れ際となつてしまつた、リーダー格と思しき二人の、最後の台詞。

あの学生らしからぬやり取りが、ずっと頭の隅にこびりついていた。

……しかし、どんな事情や背景があるうとも。彼女たちの扱いはあくまでも、和平条約を乱した紛うことなきテロリストだ。おかげでエデン条約そのものは再び白紙に戻され――トリニティとゲヘナ両校の間にあつた溝は、更に深いものとなつていた。

その主な被害者たる両校の、大小様々な傷を負つたばかりの生徒た

ちに、「もう一度アリウスの子たちの足取りを追つて欲しい」などとは……どうしても言い出せなかつた。

私は……みんなの『先生』として、どうすべきなのだろう。  
どうあるべき、なのだろう。

一人でいると、どうしてもそのことがぐるぐると頭の中を回つて……気づけば、ホシノに連絡を取つていた。

かつて悪辣な大人に騙され、それでも私を信じて頼つてくれる、彼女に。

「……ホシノは……」

「うん?」

「ホシノは、スクワッドの子たちと……実際に対面してみて、何か思うところはなかつた?」

「……ふむ。うくん、そうだねえ……」

自らのおどがいに指を添えて、宙を仰ぎ見るホシノ。

そのまましばしの時が過ぎて……彼女が口を開いた。

「ハリセンボンみたいだな〜つて、思つたかなあ」

「……」

……?

は、ハリセンボン???

瞬きを繰り返す。きよどんとした私の顔が面白かつたのか、ホシノは一つ笑みをこぼして。

「もちろん知つてるとと思うけどさ。ハリセンボンが大きくなる時つて、水とか空気を吸つて膨らんでるんだよね。むーつてむくれてるみたいで、見えてるとそこも可愛いなあとは思うんだけど……」

台詞を切つて、斜め上を仰ぐ。

……場違いな感想だと承知してはいるが。彼女が自らの考えを伝えるために、懸命に言葉を選んでくれている様子が、私には嬉しかつた。

「つまりあれつてさ。自分の身を守るために、自分じゃないのものを取り込んで身体を大きく見せてるわけで。だから何ていうか……ちよ〜つとついたら、そのままぴゅ〜つてどこかに飛んでつちやい

「……空虚さ?」

「そうそう、そんな感じ。そういうところ、が——うん、似てるって言つちやうとハリセンボンが可哀そうかな……？　んまあ、今回の中のやらかしの規模と本人たちの熱量で釣り合いが取れてないなうつて、不思議だったのは覚えてるかな？」

…………そ、か、うん、そうだね…………」

思えば最初から、彼女たちの言動は矛盾に塗れていた。

彼女たちは自身が何度も繰り返していくように、本当は全てが虚し  
ものならば。

ギュウオトスにおける二大勢力を一度に相手取つてまでアリウスが成し遂げようとしていたことは、一体何だつたのだろう。

な

サノリ

そう呼ばれた彼女の、烈火と燃え滾る敵意を思い出す

――貴様らは第一回公会議以来、数百年に渡つて積み上げられてきた恨み……私たちの憎悪を確認することになるだろう』

復  
集

成る程、確かに人を凶行に駆り立てるには十分な動機だろう。

だがそれは——アリウスがトリニティの自治区を追放されたのは、彼女の言葉通り数百年前の出来事だ。今回の実行犯たる彼女たちがその当事者だったという可能性は……普通に考えれば、まずないとえる。

この世界は残酷なのだと。こんなにも苦しい思いをしているのは、トリニティとゲヘナのせいなのだと。

彼女たちの境遇を利用してそう吹き込んだ、誰かがいるはずだ。

全ては虚しい。どこまで行こうとも、全てはただ虚しいものだ。

元の世界では、人の一生の夢さや無意味さを謳つたとされる、旧約聖書の一説。

アズサも時折口にする——きっと、他の学校で言うところの校訓のようなものなのだろう。

『——この憎しみを、私たちは習つた。それからずっと、私たちのものだと思い込んでいた』

……植えつけられたその感情は、もちろん彼女たち自身から発露したものではない。

あのアツコという子は、それに気づいていたようだつた。

分校とは名ばかりの学び舎で、戦闘技術や生理的耐性のみを鍛え上げられてきた彼女たち。その環境が当たり前のものだと認識させられ、人間の殺し方までもを叩き込まれた、殺人兵器。

『——シャーレの先生……貴様が計画の一番の支障になりそうだと、彼女は言つていたからな』

そんなアリウスの生徒たちを器に、自らの手足として使役するべく、偽物の感情を詰め込んだ。

今回の騒動の裏側に、私は……悪意ある第三者の意図を感じて、ならなかつた。

「……ん、」

ふと気が付くと、ホシノがこちらにパイプ椅子を寄せて、すぐ隣に腰かけていた。

「……えつと、ホシノ？」

「ね、先生。私の勘違いだつたら、笑つてくれていいんだけどさ」  
いつもの眠たそうな雰囲気でも、おどけたような笑顔でもなく。  
かつてなく据わつた目の色を見せる彼女に、私は戸惑つていた。  
「どこか、足とかおなかとか、ケガしてない？」

「……」

「あ、岡星なんだ。やつぱりね！」

沈黙は金、という言葉もあるが。

聴い彼女の前では、沈黙も雄弁も大した意味を成さないと、この時痛感した。

「……どうして？」

「ん？ 足音だよ。先生、教室に来るまでの歩き方が変だつたから」

……本当に抜け目のない——この場合は抜け耳のない、と言うべきだろうか。

改めて……この小鳥遊ホシノという少女が持つ能力に、もはや戦慄すら覚えてしまう。

「先生。手、握つていい？」

「えつ？」

固まつているとホシノの方から手を取られて、そのままふにふにと両手で弄ばれる。

……小さくて柔らかくて、何より温かい手だと思った。こんな少女そのものの手で、今まで色んなものを守つてきたんだな——と、不適な感概が生まれる。

「先生の手、おつきいね」

「……ホシノが小さいんじゃない？」

「あく、言つたなあ。おじさんだつて気にしてるんだぞ？」

「……ごめん」

「んーん、いいよ。許してあげる」

……何だか違和感があつた。

いかにもむずがゆくて、甘酸っぱい応酬のはずなのに。

「なんでケガしたの？」

上目遣いにこちらを見つめる、きれいなオツドアイの双眸が。いつもと違つて……少しだけ怖かつた。

「えつと、撃たれちゃつて……」

「いつ？ 誰に？」

「……調印式の日に、アリウスの——ごめん、名前は知らない」

本当は、はつきりと覚えているのだけれど。

言つても仕方のないことだろうと、咄嗟に嘘をついた。

「……それは、先生を狙つて？」

「た、多分……？」

「……ふくん。そつかあ……」

静寂。壁にかけられた時計の秒針が、いやに大きく聞こえる。

私の虚言を気取られたかどうかは……今の彼女の透明な血相からは、全く読み取ることができなかつた。

「はあ～～～つ

額に私の手を押し付けるようにして、ホシノが大きく息を吐いた。手の平に、彼女の体温がにじむ。私の存在を確かめるように、手首に巻きついた両の指が、ぎゅうっと握り込まれる。

•  
•  
•  
•  
•

……あの時は確か、腹部を撃たれたのもあつたけれど——その直前に古聖堂の崩落に巻き込まれていたおかげで、まず全身がボロボロで。

目覚めてすぐに病室を飛び出したから自分ではよく分からなかつたけど、多分そこかしこに包帯やら何やらをくつつけていたのだと思う。

請したのだから。

てあげたくて。

いたたまれなさから声をかける。

「……先生つてば、ほんとに不器用だよねえ」

を浮かべていた。

「……ま、そこも先生のいいところだとは思うけどね。うへ」

再びホシノが私の手を取つて、むにむにと穏やかにこね始める。

「あのね。先生に言われてみて、私も思つたよ。あの子たちはもしかしたら、先生がうちに来てくれなかつた世界の、私たちだつたかも知れないって」

……もしあの時、アロナがあの手紙を見つけてくれていなかつたら、どうなつていたのだろう。

そんな薄ら寒い想像をかき立てる彼女の口調は、その内容に反して柔らかく、温かかった。

「どれだけ周りに手を伸ばしても、みんな知らんぷり。……うん。もしかしたらあの子たちは、『手を伸ばす』つて選択肢自体を知らなかつたり、誰かに摘み取られてるのかも」

現実味を帯びた仮説だつた。

ゲマトリアを始めとした、この世界の裏側にはびこる、人を人とも思わない大人たち。連中ならその程度のことは、朝飯前にやつてのけるだろう。

けれど、

「……分からぬんだ」

「ん？」

「私がしようとしていることが、本当に正しいのかが分からぬ。……アリウスの生徒たちを探し出して、表舞台にもう一度引っ張り出して……それつて本当に、誰もが望んでいることなのかなつて」

当初の目的も達成できず、元いたであろう拠点にも帰れず。

今この瞬間にも酷い目に遭つているかもしれない彼女たちのことを、このまま放つておくことはできない。

……しかしそれは本当に、彼女たちにとつて幸せなことなのだろうか。

アリウスだけじやない。トリニティやゲヘナの生徒たちは、果たして自分たちを一度深く傷つけた相手のことを、きちんと理解して、許してくれるのだろうか。

……今回の一連の事件は、本当に、私の手で終わらせることができるのだろうか。

そこまで一気に言い切つて……ちらとホシノの顔色を伺うと、

「……」

今さら何言つてんだこいつ、とでも言いたげな戸惑いの表情を見せていた。

手は繋いだままだけに、端から見ればとてもシュールな光景に映ることだろう。

「え、ええ～……？ それ、今さら言つちやうの、先生……？」

あ、ほんとに言われた。

「えつ、あれ、ホシノ？」

「だつて先生——うあ、これ自分で蒸し返すのかなり恥ずかしいんだけど……？」

変わらず頭上に疑問符を浮かべ続ける私に、彼女は業を煮やしたようだ。

「……先生、私の時は書き置きも退部届も無視したじやん。アリウスの子たちの気持ちは考えられるのに、私の意見は全く汲み取つてもらえなかつたのつて、ちよゝつと筋が通つてないんじやない？」

「あ、いや、あれは——」

——あれは……？

言われてみれば、確かに……ホシノの時と今回とで、私の中で何が違つたのだろう。

明確な答えをすぐには用意することができず、そのまま彼女が台詞を繋いでいく。

「私だつてあの時は、ほんとの本氣で命をかけて、あいつらの誘いに乗つたのに。……まあ、結果的にはまた騙されてたわけだけど——仮にあのまま私を助けに来なかつたとして、きっと他のみんなは、少なぐとも今のアビドスからは解放されてたんじゃないかな……なんて。どうしても、たまに考え方やうんだ」

どこか遠い目をしたホシノが、訥々と「もしも」を語る。

「シリコちゃんも、ノノミちゃんも、セリカちゃんも、アヤネちゃんも。どこか別の学校で、それなりの……少なくとも、今以上の未来があつたと思う。みんなすごく優秀で、私の自慢の後輩たちだからね~。

きっとどこに行つても、それなりにやれたんじゃないかなー?」

「……、それは——」

それは違う——という台詞を、私はすぐに返すことができなかつた。

確かに今のアビドスを取り巻く環境は、他のどの学校と比べても特異で、そして歪だ。

多額の借金やその他様々問題のせいで、まず絶対的な生徒数が足りない。職員の一人だつていないので、学習環境すら自分たちで整えなければならない。

今、彼女たちを客観的に見た時に、胸を張つて健全な学園生活だと主張できる人間は、まずいないだろう。

——それでも。

「そんなの……ダメだよ」

こうして全てが元通りになつた今だからこそ、言えることかも知れない。

けれど……だからこそ、相変わらず自分の幸せをなかなか勘定に入れてくれない彼女の言葉が——腹立たしかつたし、悲しくもあつた。「対策委員会の誰一人だつて、ホシノを犠牲にして自分たちだけ樂をしようなんて子はいなかつたよ。どんなに苦しくても、大変でも、全員が全員、心の底からホシノを連れ戻すことを望んでた。……それに、例え誰が望んでなくたつて。そんなの……そんなの私が——

……私が?

そこで言葉を止めた私を見て、ホシノがいつと口角を上げた。

「なんだ。やっぱりもう、先生の中で答えは出てるんじやん

「……ホシノ?」

「結局さ。人が何か行動を起こす時なんて、最後は自分の好き嫌いなんだよ。今回だつてそうじやん。アリウスの子たちを追いかけたい、叱つてあげたい——救いたい。そこに先生自身のエゴが全くないなんて、まさか言わないよね?」

「でも、私は——」

「先生」

優しく、そして強く。

芯の通つたその一言が、私のつまらない言い訳を抑え込む。

「私は一回、自分で自分を諦めちゃったからさ。これからはなるべく、私を助けてくれたみんなと、それから先生のために動こうつて決めてるんだ」

「……」

「だからね先生、今度は私が……先生を助けてあげたいって思つてる。それは私だけじゃなくて、対策委員会のみんなも、きっとおんなじ気持ちだよ」

そこでホシノがふつと、眉尻を下げて困つたように笑う。

「私。先生のためなら……別にもう一回くらい死んだつていいくつて、ほんとに思つてるんだ」

「つ、それは——」

「うへ、分かつてるよう。そんなこと先生は許してくれないだろうし、自分でもさすがに重たいなうつて思うし。……でも、それくらい先生のこと、信頼してるんだ」

緩く握られた拳を、彼女の両手ですっぽりと包まる。

その温かさに……凝り固まつた心の奥が、じわりと溶け出すのを感じていた。

「先生。私の——私たちの時みたいにさ。先生の好きなように、思うようにやつたらいいよ。先生がこうしたい、こうすべきだつて思つたことなら、絶対大丈夫だから」

「……つ、うん」

「自信がないなら、私のをあげる。私が先生の分まで、先生を信じるからさ」

「……うん。うん——」

視界がぼやける。鼻腔がつんと痛む。

こらえきれなかつた涙が一条、頬を伝つていくのが分かつた。

「だから、迷つてないでさ。あの子たちに、真つ直ぐに手を伸ばしてあげてよ」

これ以上教え子に情けない姿を見せたくないくて、目元を拭う。

「そういう先生の方が、私は好きだな。うへへ」

開けた視界の先には、慈愛に満ちた彼女の笑顔があつた。

†

再び校庭に立つと、厳しい寒風が衣服の合間を縫つて身体を突き抜けた。脇を固く締めて身震いしていると、同じように防寒具をまとつたホシノが隣に並び立つ。

「うーん。なんかずいぶんと青春っぽいことをやつちやつた気がするなあ。おじさんも若返つた気分だよ」

ぐう一つと両の拳を突き上げるその矮躯が可愛らしくて、思わず口元をほころばせていると……不意に彼女が、うしし、と珍しく悪い笑い方を見せた。

「それにも、今日は先生のレアな泣き顔も見られたし。いや、役得だつたな！」

「それについては、なるべく早く忘れてくれると嬉しいかな……」

「ええ？ どうしようかな。夜ふかしのこと、いつかみんなの前でぽろつと言われたりしないかなって、おじさんすつごく不安だな？」

？

「……分かつた。もう言わないから」

「うへへ。悪いね」

……随分な弱みを握られてしまつた。これはしばらく、委員長様の仰る通りにするしかなさそうだ。

「それじゃ先生、気をつけてね」

アビドスの正門にて、校舎を背にしたホシノと向き合う。

「うん、ホシノもね」

「うへ、おじさんは大丈夫だよ。これでもちょっとは戦えるつもりだし、そもそもうちに盗られるようなものなんて、もう残つてないし

ね

「それでもだよ。構造上施錠だつて難しいんだし、ホシノも女の子なんだから。何があつたら、遠慮なんて絶対しないで、すぐに連絡して

ね

「……う。うん……」

照れ隠しのためか、彼女は目線を落としてマフラーの中に口元を隠した。

「……ありがとね、先生」

そう頬を染めるホシノの礼の意図が分からず、首を傾げる。

「うあ～っ、もう、にぶちんめ～。それともおじさんをからかって楽しんでるのか～？」

「うわ。いや、ごめんごめん」

肩を怒らせる彼女をどうにかなだめて、話の続きを促す。

「……あの時。私のこと、諦めないでくれて、ありがと。ほんとはやっぱり、私もここに――みんなと一緒にいたかったから、さ」

「……うん」

「あの子たちにも多分……守りたいどこかとか、側にいたい誰かとか……そういうの、きっとあると思う。この世界の黒い部分がヤになつちやつて、わ一つになつちゃう気持ちも、よくわかるけどさ。それでも……思つてるほど悪いものじやないかもよ～つて、教えてあげられたらしいね」

「……うん。そうだね」

それから二言三言と交わして、ホシノと別れた。曲がり角の向こうに彼女の姿が見えなくなるまで、時折手を振り合つて……ふと空を見上げると、雲間から光芒が差していることに気がついた。

その輝かしい光の筋に、そつと手を伸ばす。

……最近読んだ漫画にも、似たような台詞があつたなと笑いながら。

彼女たち——アリウスの生徒たちの後ろに、どこのどいつがいるのかは知らないが。

あらゆる生徒たちの、輝かしい『青春の物語』を奪う権利など、誰にもないのだと。

そう叩きつけてやろうと、決めたのだった。

## 聖園ミ力は仲良くなりたい（作・キノツピ）

「コハルちゃんだ！ 元気にしてる!?」

「ミ力先輩。えっと、ごきげんよう……」

エデン条約の調印式を終えた後のあくる日の昼下がり、ミ力とコハルの姿があつた。セイアとの和解もなんとか済ませたこともあり、学園内ではなにか壁があつた。

ただ元気溌剌のミ力に対してもコハルの方はどこか壁がある。元々人見知りしやすい子なので普段通りといえば普段通りではあるのだけれど。

「元気ないなあ。こんなにいい天気なんだから笑顔、笑顔！」

「あはは……」

愛想笑いを浮かべてしまうコハル。これも割とよくある光景。

ただ補習授業部始め、仲の良い子達と話しているときと比べると反応の差は顕著で。ミ力は仕方ないなあと曖昧な笑みを浮かべて話を続ける。

「それでコハルちゃんの方はこれから用事？ 良ければどこかでお茶でも飲まないかな！ あ、でもロールケーキは勘弁ね。あれはしばらく口に入れたくないかな……」

「ロールケーキですか？」

「そうそう！ ナギちゃんつてば食後のおやつに毎食毎食ロールケーキ出してきたんだよ。そりやナギちゃん選別のロールケーキだから味は文句なし。バリエーションも無駄に豊富だつたの。

でもさ1ヶ月続けられると流石に飽きちゃうんだよ」

本気でげんなりとした表情を浮かべてしまうミ力。

こうやって話しているだけで口がロールケーキに染まっていく感覚。美味しいことは確かだけれど、毎日食べ続けるものではない。

おかげでナギサ特有のロールケーキを口に入れる攻撃も今のミ力にはそれなりに効いてしまう。

「もしくは訓練っていうなら付き合うよ！ これでも私つて強いから。多分役に立てるんじゃないかな。

それともショッピングでもいく？ コハルちゃんって可愛いんだ  
からもつと着飾つてもいいと思うんだ！」

「その、これから？」

「これから？」

コハル自身に今日の予定は特になかつた。正義実現委員会は非番の日だし、補習授業部の活動もない。

なのでミカの言う通り訓練に向かうつもりだつたのだ。

先の事件で補習授業部の面々はそれぞれ活躍をしていた。ハナコはその知力、アズサは戦闘力、ヒフミは持ち前の意志の強さとコミュニケーション能力で。そしてコハル自身は明確な何かはなかつた。

勿論正義実現委員会のパイプとして必要だつた自覚はある。でもそれは正義実現委員会の下江コハルが必要だつたわけで、ただの下江コハルが必要な場面ではなかつたのだ。

いつまた大きな事件が起きないとも限らない。その時に後悔しないためにも戦闘訓練を以前より熱心にやつていた。

「これから……」

なのでミカに付き合つてもらうことはコハル自身にとつてもプラスとなる。本人から言い出してくれたことでもあるわけで、訓練に行きますというだけで済む。

でもその一言が中々出てこなかつた。

「コハルちゃん、お待たせしちゃいましたか？

ミカさんはこんなにちは

結局その一言は出てくることはなく、外からの助けによつて話は進む。

「ハナコちゃん……」

「じゃあコハルちゃん、デートにいきましようか。二人きりでお話ししましよう？」

「デ、デート、それも二人きり……。ダメっ。エツチなのは禁止！ 死刑

!!

顔を真っ赤にしながら威嚇してしまうコハル。

「死刑じやなくて私刑なら歓迎ですよ？」

「バカ！変態！私がそんなエッチなことするわけないじゃん！！」

誰も私刑でエッチなことするなんて言つていないので墓穴を掘つていく。

そこも弄つて揶揄つてもいいんだけど、目の前にミカがいる状況で長く話す気がハナコにはなかつた。

「では、「きげんようミカ様」

「その、ミカ先輩、「きげんよう」

「うん、二人とも、「きげんよう」

ハナコは慄懾に。コハルは可愛らしくお辞儀をして去つていく。

その後も賑やかに話している一人の背中に寂しげな目を向けてしまう。

「楽しそうだね、コハルちゃん」

私ではあの顔を引き出せないと、寂寥の感じる笑みを浮かべてしまふミカであつた。

ところ変わつてハナコの部屋。

あの後予定通り訓練に向かおうとしたコハルをミカと再び出会つた時のことなどを例にあげて、本当に二人きりでの話し合いをすることにした。

実際訓練所にいつてミカと遭遇した時の気まずさを考えてコハルはこれを承諾。

何もない時に会つてうまく話せないので。状況で更にデバフが入つた場合ろくなことにならない。

「飲み物は紅茶で大丈夫ですか？」　あいにくお菓子は日持ちするクツキーくらいしかありませんけど

「うん、それで大丈夫。……変なもの入れてないわよね？」

「そのつもりはなかつたんですけど、そういうこと言われると入れたくなっちゃいます」

「うぐ、ごめんなさい……」

そんな話をしつつお茶の準備を進めていくハナコ。流石というべきか手つきによどみはなく、紅茶の入れ方の作法は完璧だった。

準備できた紅茶にお互い口を付け一息をつく。

「それでミカさんと何かありましたか？」

「別に何かあつたわけじゃないんだけど……」

「その割に困っていましたよね？」

コハル自身返答に窮していたのは確かだった。ただ何かあつたかと聞かれるとただ遊びに誘われただけ。それを問題としちゃうのは悪い気がする。

そんな友人の内面を察してほっこりしてしまったハナコがいた。「コハルちゃんは本当に優しいです。おそらくはミカさんから放課後の予定を聞かれて困っていたとかですよね？」

その言に首肯で返すコハル。この友人は普段の言動からは考えられないが、本当によく見てくれている。

「一緒にいたくないなら嘘をついちゃえば良かつたのでは？」

「嘘つて付かれたとわかると傷ついたやうし」

「……私、ミカ先輩と一緒にいたくないのかな？」

「コハルちゃんの立場でミカさんを好きになれる理由つてないです」

色々あつたが発端はミカがアリウスを引き入れてセイアを襲つたこと。これさえなければ補習授業部結成もなかつたし、エデン条約にまつわる事件も形が変わつた筈だ。

その後合宿最終日のミカ自身の言動もひどい。アズサをスケープゴートの操り人形扱いをして、コハル自身にはおバカさん呼び。

その後挽回するような場面も特になかった。

「思い出したらムカついて来ましたね……」

「その、ハナコはミカ先輩のこと嫌いなの？」

「うーん……。普段なら煙に巻くところではあるんですけどコハルちゃんだし特別ですよ。

正直に言えば嫌いですし、セイアちゃんを排除しようとしたこと欠片も許していません。ミカさんにも色々事情があつたとは思いますが、アリウスを御しきれなかつたのが原因というのもわかつています

す。でもそれって私が考慮してあげる部分でもないですから」

コハルが聞いてもハナコの言い分は納得のいくものだつた。セイアと仲がいいのは知つてゐるし、その友人を殺されかけた気持ちは多分理解が及ばない。

「セイア先輩、無事で良かつたよね」

「はい。もしも亡くなられていたらどうなつていたことか」

そういつて表情を隠すがごとく紅茶を一口。

これ以上話題を引つ張らないでほしいというサインでもあり、コハルも察しがついた。

「私の場合嫌いつていうより怖いつて気持ちの方が強いかな？ ミカ先輩とセイア先輩つて仲が悪かつたわけではないんでしょ？」

「口では色々言い合つてますけど、プロレスみたいなものですからね」「プロレッ……！」

思わずエッチな想像をしてしまつたが咄嗟にブレーキをかける。話が脱線するので自重するべき場面だつた。

「ほん。そんな人でも容赦なく排除できちやう。そうなるとさ、私が仮に一緒にいてもミカ先輩の都合に合わなくなつたら売られちゃう気がして。

もしもの時、目的のために手段も選ばないのかなつて」  
ゲヘナと仲良くしたくない、アリウスと仲良くなりたい。この二つに関してはコハル自身も理解できる。

ゲヘナには怖い人が多いから仲良くするとなるとやっぱり怖い。アリウスもアズサの出身校つてことを考えると何とかしてあげたい。でもその為に友人2人を排除してしまうのはコハルの理解の外に合つた。

「うん、分かつたかも。私あの人怖いんだ」

そういう友人の頭をハナコは撫でてしまう。普段なら嫌がるコハルも邪氣がなかつたからか、今は受け入れた。

「あとこれは純粋な疑問なんですが、ミカさんがコハルちゃんに拘る理由つてなんなんでしょう？」

少なくともクーデター時にあつた時はただのおバカさんと言つて

いた。あの段階でのコハル個人に対する認識はそんなものだつたのだ。

それが壁を作られているのに話しかけに行つてるという状況に聊か疑問を持つてしまう。

「多分あれだと思うけど……」

「あれと/or/いうと?」

そこで話されるのはコハルのちよつとした冒険。先生が来てくれるまでの僅かな間、虐めを止めていた。

ただそれだけの話ではあるけれど。それでもきっと輝いていた時だつた。

「そんなことが。それは命拾いしましたね……」

「命拾い……。確かに先生が来てくれなかつたら負けていたけどさあ」

ここで命拾いはコハルのことではなくティーパーティーの生徒達についてだ。聖園ミカの戦闘力は剣先ツルギに匹敵する。たとえ銃がなからうが相手から奪えればいいわけだし、1VS3なんてなんの問題にもならない。

反撃しなかつたのも気が乗らなかつただけで、果たして先生が来なくてコハルに暴行の手が向いた場合どうなつていたことか。

しかしそんなことはおくびにも出さないポーカーフェイスの持ち主が浦和ハナコだ。

「もう、本当にですよ。仮にも相手は虐めつ子なんですから。行動不能になつたコハルちゃんに対してもや〇〇〇。果ては×〇×〇をやつていた可能性もあるんです。もつと自分を大事にしてくださいね?」

「え、え、え、エツチなのはダメ! 禁止!! 死刑!!」

そんなコハルの叫びが木霊する同時刻、聖園ミカは頃垂れていた。  
「ナギちゃん。私ってコハルちゃんに嫌われてるのかな?」

「当たり前では?」

「即答つ!」

今も席があるとはいえ、まだティーパーティーとして仕事をできる段階にないミカ。今日は休みのためセイアはおらず、ナギサは一人仕事を進めていた。そのため返事もおざなりだ。

「構つてよー。ナギちゃん」

だる絡みしてくる友人に多少辟易しつつも、休憩を入れるには良いタイミング。

仕方ないと嘆息しつつもひと段落を付けにかかる。

「区切りつけますから紅茶の準備をしておいてください」

「流石！ 優しい！ 愛してる！」

「その愛の分だけ美味しい紅茶を期待していますよ」

「任せて！」

因みにミカの入れる紅茶は普通においしい。ティーパーティーの3人はお茶会のホストをすることもあり、紅茶入れは必須技能なのだ。

淀みなく紅茶を入れ、勝手知ったるとばかりにお茶菓子の準備もする。

それが終わるころにナギサの仕事にも区切りがつくのだから阿吽の呼吸であった。

「それでコハルさんでしたか？」

「そうそう。仲良くなりたいんだけどやつぱり壁があるんだよね……」

「でしようね……」

ナギサもコハルとはすれ違えば挨拶くらいするけれど、それ一つ見ても壁を感じことがある。自分のしたことを考えれば当然とナギサ自身受け入れているが。

「まずミカさんがコハルさんと仲良くなりたいのは助けられて一目ぼれしたからでいいんですね？」

「自分も危険だつていうのにあそこで体を張れる。あの場面のコハルちゃんは本当に尊かつたんだよ。先生が来てくれたのも感謝しているんだけど、でもコハルちゃんの良さが消えるわけじやないよね！」

「ええ、それは本当に」

仮に自分がその場面にいたら助けただろうが、それは相手がミカだからだ。これがミカではなく以前敵対していた生徒となつた場合、助けに行つたかナギサには自信がなかつた。

「それじゃミカさんがコハルさんにやつてきたことも纏めてみましょうか」

「……やらなきやダメ？」

「少しでも仲良くなりたいなら」

問題点を纏めるのはやはり大事だ。壁があつて当然なのは事実だけれど、纏めると意外な事実が見えたりもする。

「まずセイアちゃん襲撃とそれに伴う補習授業部結成でしょ？」

「この時点で諦めたりますよね」

ナギサ自身ミカのことはなんとか許したが、それは積み重ねがあること。なればどうしていたか、ちょっと想像がつかない。

「調印式当日の事件の原因にもなるのかな？」

「無関係ではないでしょう」

これに関してはミカが動かなければ別の形で事件が起きていたとは思う。でも被害者にとつてそんなことは言い訳だ。

他にあつたか思い返していくミカ。思い当たる節があつたのか凄く気まずい顔をしてしまう。

「ミカさん？」

「ナギちゃん襲撃しようとした日、私つてコハルちゃん達と会つてゐるじゃん？」

その時にアズサちゃんに犯行押し付けるつて……。しかも操り人形とかまで言つたような？」

「それ、コハルさん自身にも何か言つてますよね？」

ナギサからの追求にミカは目線をそらしてしまう。でもそれで話が進むわけもなく、しぶしぶと答える。

「ただのおバカさんつて……」

「はあ……」

想像より酷いことは言つていないが、それでも十分あれである。虐めから助けてくれたのもだが、普段ミカが挨拶して返事をくれるだけ

天使と言つてもよい。

「コハルさんが優しくて良かつたですね。

……それで、修正不可能なレベルで溝がある現状な訳ですがそれでも仲良くなりたいんですか？」

これで諦めるというなら話はそれで終わりだ。

幸いコハルからミカにアクションをかけてくるということはない。お互い距離をとつて過ごせば済む話となる。

「そうだね。多分仲良くするにせよコハルちゃんの優しさに甘えることになつちやう。だから適切に距離をとるのが賢いんだろうけど。でもさ、私我儘に生きようつて決めちゃつたんだよね？」

「元から十分我儘だつたでしょう」

そういうナギサの表情はとても嬉しそうだつた。

コハルのことを考えれば距離を取つてもらうのがいいのかもしない。それでも友人としてはミカの味方をしたくなつてしまふ。

「問題点はわかりましたけど、ミカさんはどうされますか？」

「まずはもう一度謝罪を。どう思つているかコハルちゃんの口から聞きたいかな。

それと助けてくれたお礼も」

謝罪の方は一度はしている。ただそれは補習授業部全体に対するであつて、コハル個人に対してもではない。

改めて友誼を結びたいならばもう一度しつかり話すべきと思つたのだ。

お礼についてはまだしてもらひなかつた。

「ありがとうナギちゃん！ やるべきことが見えてきたから元気出できたつ！」

「ええ、頑張つてください」

元気よく出ていくミカを見送り、再び仕事に戻るナギサであつた。

後日、謝罪の準備を整えたミカは改めて話をしたいということでおハルを呼び出した。

言いたいことはまとめて完全に覚えた。この日のために髪も切つてきたりし、服装も普段以上に気合いを入れた。仮に男子生徒への告白だつた場合、常勝無敗を誇るオーラがそこにはある。

「（ノ）きげんよう、コハルちゃん」

「その、（ノ）きげんよう。ミカ先輩」

対するコハルは相変わらず、その目の中に脅えが見えた。それでも前までは合わせてこなかつた視線をミカの方に向いている。その変化に多少驚きつつもミカは話を進める。

「コハルちゃん、本当にごめんなさい！」

「えっと……。それは何に対する謝罪なんですか？」

「私が原因となつて起こつた諸々に対する。コハルちゃんが補習授業部に入つたこと、調印式で起きた事件での被害。合宿最終日での私の言動について」

その謝罪を受けコハルは渋い顔となる。以前同じ謝罪を受け、また蒸し返されたのだ。いい気持ちがしないのも仕方がないことである。

「そ、それについては以前謝罪されましたけど……」

「そうだね。でもコハルちゃんと仲良くなりたいなら必要な流れだと思つて。一方的な謝罪じゃなくて、話し合いたいんだ」

ここで拒否されるならそこまでだ。でもコハルちゃんならそういうことはしないだろうなというズルい確信がミカの中にはあつた。

沈黙が続く。続く。続く。終わる。

「その、うまくまとめられてないんですけどいいですか……？」

「勿論！ というかそれで私が文句言うようななら撃たれても文句言えないよね？」

茶化す様におどけて見せるミカ。緊張をほぐすために言つたのだけれど、コハルからの反応はイマイチだつた。

「こういうとあれなんですけど、補習授業部に入つたこと 자체は文句ないんです。むしろ皆と出会えて成績も上がつたんで感謝しているといいますか」

「そうなの……？」

「えつと、そうなんです。流石に急に上がつたボーダーや無茶な試験

会場場所については二度ごめんですけど

「ナギちゃんがごめんなさい」

思わず真顔で謝るミカ。ナギサの目的を考えると仕方がないけれど、あれはなかつたと思わざるを得なかつた。

ボーダーについてはあの点数を越えられるのは本当に一握りだ。仮に同じボーダーでテストをしようものならトリニティの生徒の9割が退学になる。会場については勉強できるとか関係がない。

「ただ調印式での被害は別なんです。……あの一件でアズサが受けた被害。仲間と本気で敵対してしまつたこと。和解もできない状態であること。

勿論ミカ先輩が行動を起さなくとも同じ事件は起きたんだと思います。でもそれと許せるかは違う話になつちやつて

「コハルちゃん……」

「それと合宿最終日。アズサのこと操り人形つて言つちやうのはないです。この人私の友達のことそう思つてるんだなつて。その上で自分の罪をアズサに押し付けようとしていて。

アズサに聞けば「終わつたことだし私は気にしていない」つて言う氣はしています。でも私はそこまで割り切れそうにありません……」話を聞いていて思うのはこの子は本当に優しい子なんだなつていふことだつた。

多分コハル自身が負つた迷惑もかなりあるはずだ。それなのに気にするのはアズサのことばかり。

しかもその件を忘れていたわけでもないのに、ミカのことを迷わず助けてくれた。

「話してくれてありがとう。言い訳になつちやうけれど、もうアズサちゃんのことを操り人形だなんて思つていないんだ。むしろ最後まで自分の意志で進み続けられるとても強い子。

というかサオリ達から見れば私の方こそ操り人形だつたんだろうね」

自嘲気味な笑みを乗せつつミカは言う。

アズサはセイア殺害阻止に始まり、調印当日は一人でサオリ達に立

ち向かつていった。その結果としてアツコにダメージを与えアリウス信徒のコントロールに影響を及ぼしている。あれがなければ先生がいてもトリニティ侵攻阻止は間に合わなかつただろう。

対するミカはほぼほぼアリウスの予定通りの行動。調印当日も何もせずまさにお人形さんだつた。

「はい、アズサは凄いんです！　頭だつてよくつて、教えられたことは直ぐに覚えちやつて。

でも正義実現委員会といつも揉めるのはなんとかしてほしいんですね。この前なんて私もいたのに当たり前みたいに攻撃してきて。後で文句言つたら「むしろこつちに協力してほしかつた。コハルがいればあそこから逆転でできた」とか言うんですよ！」

「アズサちゃん、何かと揉めるからね……」

生き様がアウトロー過ぎて一部ではファンになる子も増えているとか。

ぶりぶり怒りつつもコハルは続ける。

「だから、仲が良くても許せない」とつてあると思うんです。正直ミカ先輩のしたことは許せてはいないんですが、嫌いつてわけではないと思うんです。だから仲良くしたいつて気持ちもあつて……。

でも何よりも私はミカ先輩のことが怖い。たとえ仲良くなつてもいつかセイア先輩みたいに後ろから刺されるかもしれない。目的と気分次第で切り捨てられるかもしれない。だから距離を取つてしまつて……」

「あそこまでするつもりはなかつた。そう言つても納得はできないよね？」

「ごめんなさい……」

「コハルちゃんが謝ることじやないよ。これについては私が悪いとしか言えないし」

嫌いじやないと言つてくれたのは嬉しかつたが、怖いというのはあまり考えていなかつた。

でも考えてみたら当たり前だ。友達を刺して親友を監禁しようとしました女だ。恐怖を感じないわけがない。

「でも嫌いじゃないって言つてくれるのは凄く嬉しかったかな。ありがとう。

あとナギちゃんのことは許してあげてね？　あれでメンタル弱いから今回のこと未だに気にしてるんだ。仮に退学成功させちゃつたら大変だったよね、これ」

おどけるようにそう言つて背中を向けるミカ。

時間が解決してくれるといいなと思いつつも、まずはイメージ払拭。とりあえずボランティアでも始めてみようかな？　お礼を言うタイミングも逃しちやつた。これは後でナギちゃんに頼んでお手紙書こう。やっぱり本番に弱いよね、私……。なんて思考を回していたのだが。

その手を握る後輩がいた。

「その、怖いのは事実なんです。でも私はしてみたいことがあって、その為には逃げたくなくて……」

「してみたいこと？」

「アリウスの生徒達と仲良くなりたいんです。私政治とか全然わからぬですし、アリウスの生徒達のこと怖いって思っているのもあります。でもアズサがこのまま喧嘩別れなんて悲しいじゃないですか……。

だからここで怖いからつてミカ先輩と距離を取ることをしたくなくて。その、凄く我儘なのはわかってるんです。でも頑張つてみちゃダメですか？」

握られた手を両手で包み返すミカ。

その顔にはコハルでさえ見惚れてしまう満面の笑みがあつた。

「ううん、ダメてことは全然ない。凄い嬉しい！　そつかそつか、コハルちゃんもアリウスと仲良くなりたいんだね！！」

純粹にアリウスと仲良くなりたかつたミカとアズサの視点を置いているコハル。確かにスタートは違うが目指すべきところは同じだつた。

そしてその目標を半ばあきらめていたミカだが、だからこそ目指そうしてくれている後輩の存在は大きかつた。

「でも現在の状況考えると凄く茨の道だよ？ それは大丈夫？」

「えっと、難しいことは分からないんですけどアズサとは仲良くなれました。なら話す機会があれば可能性はあると思うんです」

「そつか、アズサちゃんもアリウスだもんね。失敗して当たり前だったなあ……」

アリウスと仲良くしたいといいつつ、アリウス出身であるアズサのことを見ていなかつた。その上で罪まで着せようとするミカをサオリ達は果たしてどう思つていたのか。

勿論あちらも織り込み済みの策ではあつたけれど、その相手に好感を持てるかは別問題だ。

「ミカ先輩？」

「ううん、こっちの話。それでさ、もしよければ何処かでお茶でも飲みにいかない？ 一緒に行きたいお店考えていたんだけど、それ以上に話したいこともできちやつたからさ」

「まだ怖がつちやうかもしませんけど。その、私で良ければ喜んで」

そういつて控えめに微笑むコハル。

ようやつと向けてくれた笑みに嬉しさを覚えつつ、繋いだままの手を引いて歩き出すミカ。

「一つ大事なこと忘れてた。調印日当日、助けてくれてありがとうね。本当に嬉しかつたんだ！」

多分コハルちゃんにとつては当たり前なんだろうけど、あそこで動けるのつて凄いことなんだよ？」

「えっと、どういたしまして？」

「あはつ、まだまだ慣れないよね。コハルちゃんはさ、自分が思つてるより凄い子なんだ。

だから自信を持つてくれると先輩は嬉しいかな」

まだ壁はあるけれどコハルとの仲も進展したし、何よりもまたやりたいことが出来た。そのやりたいことの為にコハルを始め色々人と協力していくのだが、それはまた別のお話。

## おくりもの（作・莉結）

「先生、待つてたよ。」

トリニティの繁華街の少し裏手に入り、モモトークで指定された力フエを訪ねると差出人のアズサが出迎えてくれた。

「こんにちは、先生。」

「……来たんだ、先生。」

ハナコとコハルも同席しており、一人を除けば補習授業部の面々が勢揃いしていた。

「お疲れ様、みんな。……ところで、ヒフミは？」

私は除かれた一人について、アズサに問うた。

「今日は、そのヒフミについての相談だ。」

アズサが、真剣な面持ちで口を開いた。

「それは、どういう相談かな。」

それに呼応するように私も神妙な面持ちを彼女達に向ける。事と次第によつては……

「……ヒフミに、御礼をしたいんだ。」

「御礼？」

後暗い可能性はどうやら杞憂だつたらしく、余りのギャップに拍子抜けした私の口から素つ頓狂な復唱が漏れた。

「そうです、前回……そして今回の追試で私達の為に色々気を揉んでくれていたヒフミちゃんの為に、私達で何か出来ないかと思いまして。」

「ヒフミは補習授業部の為にあれだけ頑張つてくれていたし、あの頑張りに助けられたし——何より、私の……私達の大切な仲間だから。」「私は別に……でも、何だかんだお世話にはなつたから一応ね。」

思い思いに言葉を紡ぐ3人を見て、ヒフミが彼女達に慕われている事実に自分事の様に少し胸が暖かくなつた。これは、是非とも本人に聞かせてあげたいが——まだ、その時じやない。

「でも皆、こんな人気の疎らな所に私を呼んだつて事は……彼女には秘密にしておきたいんだろう?」

「ふふつ。先生にはお見通しなんですね。いわばこれは先生も含めて私達4人だけの秘め事……今から私達はヒフミちゃんに内緒で組んず解れつ……」

「するか！　あんたまた変な事ばっかり言つて！」

「……私は、友達にプレゼントを贈るのも、サプライズを仕掛けるのも初めてで……その、正直ワクワクしてるんだ。とはいえ、奇襲なら散々仕掛けて来たけど、サプライズは勝手が分からなくて。」

久しぶりに会つた筈なのに、久しぶりの感じがしないいつも通りの面々を見ていると嬉しくなつて来る……と同時に、会話の部分部分から伝わつて来るクセの強さに少したじろぐ。彼女達に的確なツッコミを繰り返していたヒフミはやはり普通じやないな。

「……丁度私も同じ事を考えていてね。ヒフミを驚かせてやろうか、皆。」

「…………うん！」

「はい♪」

「……しようがないなあ。」

「良い返事だ。それで、プレゼントを買いに行く日だけれど、ヒフミは

「」

「3日後にトリニティの外で行われるモモフレンズのライブに遠征予定、ですよね。」

「流石ハナコ、情報も把握済みつて訳だ。」

「如何にも用意周到な彼女らしい。」

「……ねえ、ヒフミつて何あげたら喜ぶの？　モモフレンズの何か？」  
「コハル、正解。あの子はモモフレンズのグッズを最近頻りに欲しがつて居たよ。お金が幾らあつても足りません！って嘆いていたし。」

「分かりやすつ……」

コハルが模範解答を出した後、私の解説にちょっと引いた顔をする。どうやら、モモフレのグッズを喉から手が出る程欲しがるヒフミのセンスは未だに理解出来て居ないらしい。

「ヒフミのモモフレンズに対する情熱は本物だからな……とはいえ、

あれだけ買い込んで居ては幾らトリニティの生徒と言えど金欠になるのも無理は無い。」

トリニティの生徒——とりわけアズサから『金欠』という言葉を聞く事になるとは思わなかつたが、それも仕方の無い事だろう。ヒフミはそれほどモモフレンズにご執心なのだから。部屋の中も凄い事になつてゐるし。

「ただ、どれが一番欲しいかまでは分からないんだよ……期間限定の特大ペロロぬいぐるみか、Mr.ニコライの著書『善惡の最果て』か、ピンキーパカのパジャマ上下か……どれも同率一位な気がしてならないんだ」

「先生……？」

最適解を導き出せず、思い付く限りの候補を譖んじる私を汚物でも見るような目で睨むコハルの視線を飄と受け流しつつ、思案する。「……そういえば花見仕様のペロロ様ぬいぐるみについて、補習授業部で顔を合わせる度に話していましたよ。」

「ハナコ、それ本当?」

「ええ、余程それが欲しいのでしようね……宛ら恋する乙女のようにはそれはもううつとりと……。」

私が導き出せずにいた最適解を、ハナコは持つていた。つまり答えは最初から分かつて居たようなものじゃないか。

「ハナコ、君つてやつは……。」

答える分かつていた問答に力が抜けた私は皮肉を口にする。もう、この子達に関しては心配要らないだろうな。多分大概の事はハナコが何とかしてしまおのだろうから、後は放つておいても……。

「ふふつ。そんなに褒めても何も出ませんよ？ 先生がどうしてもと言ふなら答かでは有りませんが……」

「……ハナコ、本当に君つてやつは……。」

……前言撤回、ちょっとこの浦和放つておけないわ。

「遠慮しなくて良いんですよ？ ほら、先生……？」

「ちよつと……こんな所であんた達何しようとしてるの!? バカ!  
淫乱!!」

「そこ」のピンクシスターズ静肅にしてて……何だか段々頭痛くなつて  
来た

「だ、誰がハナコなんかと！」

「あら、つれないですね……。」

「プレゼント送るの、楽しみ……！」

……私は改めて、彼女達のまとめ役をしていたヒフミの凄さを思い  
知つた。

「ところでハナコ、答えが分かつていたならどうして……」

場の收拾を一旦放棄して、ハナコに議論が茶番に成り下がつた件について抗議してみる。これならわざわざ私が出て来るまでも無かつただろうに……」一徹明けだし。

「せつかくですし、皆であれこれ言い合つた方が楽しそうじゃないですか♪」

「……」んな幸せな議論、する事も無かつたですし。

「ヒフミちゃんが分かりやすすぎて思つた以上に円滑に進み過ぎてはしまいましたけど。」

「……」

苦笑いするハナコを前に私は口を噤んだ。そうか、この子は——こんなやり取りも、ろくに出来ずに来たんだなあ。

「でも、ヒフミちゃんのそういう裏表が無い所は私も好きですけどね♪

「私も好きだよ。」

「その上で……ハナコも、裏も表も使い分け無くて良いって事、少し分かつたんじやない？」

「先生……くすっ。そうかもしません」

一瞬呆気に取られた後、ハナコは小さく笑つた。それはまるで蕾が綻ぶようで――

「よく分からぬけど、私もヒフミの事は好きだ」

「皆で好きとか何言つてるの!? 恥ずかしくないの!？」

「……」やつめ、ハハハ

——無垢な物騒少女と脳内。ピンクに余韻を爆破された私は、カラカラ

ラと乾いた笑いしか出来なかつた。

---

某日のトリニティ繁華街は、学生達でごつた返していた。天を仰げば青く澄んだ空が穏やかに広がつていて、絶好のライブ日和と言つた風情だつた。

「うふふ、ここに来るとあの真夜中を思い出しますね」

「そうだね……先生としてはどうかと思うけど、何だかんだ楽しかつたよね」

「先生、今日は何処へ向かつてゐるの？」

「ヒフミが言つてた、限定ショッピングだけ扱う店に行こう。私が昨日覗いて見たらまだ在庫はあつたからね。」

「流石先生、事前に偵察に行くとは抜かりが無いな。」

「まあね」

まあ、本当は別件のついでなのだけれど。

「それなら、先生が買つておいてくれれば良かつたのに」

「それじやあ意味無いだろう？ それに私も今ね、金欠なんだ……。」

「今月はカップラーメン生活かなあ。」

「あら、シャーレでのお仕事はそこまで薄給なのですか？」

「ごめん、完全に私の落ち度。」

「先生、この先の不測の事態に向けて常日頃蓄えは肝要だ。もう少し計画的な消費をすべき。」

「あはは、面白ない。」

「ほら、着いたよ皆。」

何処かの会計担当に言われた言葉と寸分違わないそれに苦笑しつつ歩を進めていくと、件のモモフレンズショッピングに到着した。

「うわあ……！」

「うわあ…………」

同じ三文字で明暗がくつきりと分かれるアズサとコハルを、吹き出しそうになりながら見ていた私は一秒の後、ショーケースのメカペロロのプラモデルに目を奪われていた。

「先生、そろそろ行きましょうか」

「う、うん。そうだね」

ハナコに促され、私と補習授業部の面々は店に入った。あのメカペロ口は、後でそれっと買いに行こう。

---

「最後の一つ……紙一重だつた。」

「最後の一つ……買えてよかつた。」

店の外で安堵の表情を浮かべて限定ペロ口ぬいぐるみを抱えるアズサに被せる様に、メカペロ口入りの紙袋を抱えてホクホク顔の私が言う。

「ちよつと!? 金欠つて言つてなかつた!?」

「ん、ああ。食事をカツプラーメンからモヤシに下方修正したら帳尻合うかなつて。」

「うわあ……ダメな大人……。」

キヤンキヤン吠えるコハルに本気で馬鹿にされたが気にしない。

私は私の正義を貫いたに過ぎないのだ。

「あらあら……先生は本能のままなのですね?」

「……悔しいけど否定出来ないなあ」

「おいてめえ! あたしが先だつたろうが!!」

「どう考へても私が先にタッチしたに決まつてゐるだろ!!」

「やるか!?」

「上等だ!!」

私達の軽口と対象的な怒鳴り声、そして銃声が先程まで居た店内から聞こえて來た。あー……これはちよつと拙いやつかもしれないな。「ごめん、ちよつと行つてくる」

「先生、私も行く」

「え、ちよつと先生!?」

「コハルちゃん、私たちは待つてましょか。先生なら大丈夫です。」  
ハナコとコハルに見送られ……てもないが、私とアズサは店内に飛び込んだ。

「ストーップ、君たち。グッズが滅茶苦茶になつちやうからね」

「あ? 何だお前」

「……シャーレの先生じゃん！」

銃撃戦を繰り広げていたチンピラ達が此方の正体に気付いて手を止めた。聞き分けのある子達だったのが救いか。

「聞いてくれよ先生！　こいつがあたしのメカペロ口を!!」

「いーや違うね！　最後の一休に先に触れたのは私だ!!」

「なるほど。」

話を聞く限り、どうやら今私の手元にあるメカペロ口が、問題解決のキーアイテムになりそうな案件だつた……でもこれは、これは……！

「話は分かった。じゃあ君はそのメカペロ口様をレジに持つて行きなさい。そして君には私のメカペロ口様を売つてあげよう。」

「良いのか!?」

「その代わり、もう暴れるのは無しだ。店員さんに謝つて来なさい。話はそれからだ。」

「分かつたよ……行こうぜ」

「そうだな……」

思いの外素直な生徒達で助かっただ。相手によつてはアズサの力を借りる必要があつたのだけれど。

「先生、大丈夫そう？」

「うん、心配要らないよ。護衛ありがとうね、アズサ。」

その後、禊を済ませたチンピラ達の手にはメカペロ口が渡つて、私の戦利品は vanitatis した。

---

「ただいまー。」

「お疲れ様でした、先生。」

「先生、さつき買ってたやつは？」

「ん、ああ。問題解決のキーアイテムとして消費してきたところ。」

「うん、あの時の先生は格好良かつた。まるでスカルマンみたいに。」

「……ふーん。」

「ふふつ。先生らしいですね」

「まあ生徒達の為になつたなら本望だよ。」

思い思いの言葉で以て出迎えられた私は、ちよつとの寂寥感とえも言われぬ満足感に包まれながらそう口にした。

「まーたそういう事さらつと言う……。」

「先生、そういう所ありますよね」

「何の事だ?」

コハルとハナコの言葉がよく分からず、アズサと顔を見合わせてハモらせつつ、私達は店を後にした。

その後は色々な話をしながら帰路に着いた。例えは今欲しい物は何かとか、行きたい場所は何処かとか、他愛も無い話に興じながら学園へと戻るその道中が、かけがえのないものだと私は腹部の傷痕を撫でつつ思つてみるのだつた。

「ところで皆、試験前の息抜きにはなつたかな?」

「……やつぱり、先生にはお見通しだつたんですね。」

「うつ……確かにちよつと……楽しかったけど」

「うん、これで試験までの追い込みも頑張れる。ありがとう、先生」

「取り敢えず試験を乗り越えて、結果が良かつたら私が簡単だけど打ち上げの場を設けるからさ。そこでプレゼントを渡そう、皆。」

「わかった。それなら何としても試験に合格しないとだ。」

「ふふつ、そうですね♪」

「……うん、頑張る」

「その意気だよ皆、それじゃあ今日は解散だね。お疲れ様!」

最後の最後で少しだけ補習授業部の面々を引き締めて、その日は解散とした。何故ならこの後私にはシャーレの仕事は残つていてし、

『先生、この後お時間ありますか?』

『少し相談したい事がありまして……』

今日居なかつたもう一人からのモモトーグが有るからだ。

---

翌日、私はトリニティの繁華街のとあるカフェでヒフミと落ち合つていた。

「先生、お忙しいところすみません……」

「気にしないでよ、それよりヒフミはライブの疲れとか大丈夫?」

「あはは……確かに少しだけ筋肉痛ではあります、先生の激務に比べたら全然大した事じゃないです!」

「御理解頂けて恐縮だよ。それで、昨日の話だけど」

「はい……今回の試験、先生のお陰で私含め全員が合格出来そうな手応えがあります。あ、勿論当日まで勉強は続けますが!」

「……それで、勉強を頑張った皆の為にプレゼントを用意したくて。今回は皆の好きな物を贈りたいんです。前に用意したモモフレンズグッズは賛否両論あつたので……あはは」

昨日から思つていたが、補習授業部の子達は本当に優しい子ばかりだなど心の底から思う。今だつてこうして同じ事を考えていて、本當にお互いを大切に思い合えている。きつかけはどうあれ、そこには確かな絆——補習授業部という部活の枠組みを超えた友人として繋がれた絆が、有るんだ……ああ、どうしよう。ちょっと目頭が熱く……

「先生?」

「はっ! ゴメンヒフミ。それで、私に協力を仰いだつて訳だよね!」「そうなんです、先生なら何か知つてるかなと思いまして……恥ずかしながら私は皆の欲しいものが思い付かなくて……」

「……アズサがスカルマンの何か、コハルは帽子、ハナコは……ごめん、ハナコは分かんないや。」

ヒフミの相談に、昨日の雑談が活きて模範解答を手の内に握つておいた私は態と穴埋め問題の様に断片的な情報を伝えた。そうする事で彼女の選んだプレゼントは彼女自身が選択したものになるという寸法だ……ハナコの希望に関しては到底言えたものじやない。アナンガ・ランガもラティラハスヤもヒフミの目に触れて良いものじやあない。ハナコなら兎も角。

「あうう……流石に先生でも完全には分かりませんよね……でも、それだけヒントが貰えたのはとても有難いです!」

「お役に立てたようで何よりだよ。」

「それで、その……先生が良ければなのですが……」

「これから一緒に行こうか。」

「え、良いんですか？　というか、何で分かつて……」

「ヒフミとは付き合いが長いからね。」

不安に揺れる双眸がそりやもう雄弁に「ついて来て欲しい」って訴えかけて来てたらそりや分かるよ。無自覚なのかな？

「ありがとうございます！」それじゃあ、

「うん、行こうか。」

「はい！」

元気良く返事をすると、ヒフミは先程まで不安に曇らせていた瞳を輝かせて私の手を取った。

「先生、今日はありがとうございました！」

「皆のプレゼント、見付かつて良かつたね」

繁華街でヒフミと補習授業部員達のプレゼント選びをして回った後、私達はモモフレンズカフェで戦利品の確認をしていた。

「アズサちゃんにはスカルマン様のパークー、コハルちゃんにはいつもの帽子のスペアが買えましたし……ハナコちゃんのプレゼントだけは先生に助けて貰いましたが、これなら皆喜んでくれるはずです！」

「もし欲しいものでないとしても、あの子達なら喜んでくれると思うけどね」

言いつつ、私は内心舌を巻いていた。断片的なヒントしか与えていないのに、ヒフミはアズサとコハルの最も望むものを当てていた。そしてそれはハナコとて例外で無く……彼女の口からアナンガ・ランガの名前が出て来た瞬間は私の口から心臓が飛び出るかと思った。何というか、最近の高校生は進んでいると感心すべきなのか、諫めるべきなのか逡巡した挙句、今回だけは目を瞑つて剩え私が道中の古書店で購入したのだけれど。無論、包装有りで。

「先生にはいつも助けて貰つてばかりですね……」

「そんな事は無いよ、大丈夫。」

「いつか必ず、この御恩はお返しますので！」

「それなら試験に受かってくれればいいよ。終わった後に皆で打ち上

げでもしよう。場所は私が押さえておくからさ。」「そんな事まで……ありがとうございます！」

「喜ぶのはまだ早いよ、まずは試験に合格してから。だからもう少し頑張ろうね。」

「あうう……そうですよね。私、頑張ります！」

「皆で一緒に合格しよう。前みたいに退学は懸かつて無いから根詰めないようにな。」

やる気に満ち溢れたヒフミの目を見て、私は安心した。これなら、私の計画は頓挫せずに済みそうだ。

トリニティ・スクエアの噴水前、色取り取りの明るい表情を湛えた生徒達の姿を視認した瞬間に私の口角が上がるのを感じた。「首尾は？」

ニヤリと笑いながら、私は補習授業部の面々に問う。まあ、これ自体が愚問なのだけれど。

「やり遂げました！」

「任務完了、当然の結果だ。」

「ふふん、私だつてやれば出来るんだから！」

「皆、ヤル気満々でしたものね……うふふつ。」

思い思いの言葉を口しながら、全員寸分違わず100点満点の答案用紙を私に見せ付ける。

「うん、皆よく頑張ったね！ それじゃあ行こうか。」

私は補習授業部の面々を促す。付近に停めておいた、学園から借り受けた車で日指すはあの場所だ。

「先生、これから何処へ向かうんだ？」

「……それは着いてからのお楽しみだよ。」

「あら、秘密の場所へ私達を連れ込んで……」

「君が思うような展開にはならないから安心して欲しいし、」

「先生何考えてるの!? まさか車で移動するのもその為……!? 破廉

恥なのは……」

「死刑に処されるような展開にもならないからね、残念でした」

「あはは……先生、車の手配までありがとうございます」

「これくらいどうつて事無いよ。無許可で暴走したりはしないしね。」

「あはは……」

「何の話だ？」

「覚えてない方が幸せな事だつてあるんだよ、アズサ」

軽口を叩きながら、私の運転で向かつたのは――

---

「此処は……」

「合宿の時の……」

そう、私が彼女達を連れて来たのはあの場所。皆で苦楽を共にした、最終的に焼けてしまつたその場所だつた。

「外は相変わらず綺麗ですが、中は以前の戦いで……。」

「先生、どういうつもり？」

「いいからいいから、行くよー。」

不安に揺れる補習授業部の面々を後目に、私はずんずんと先へ進む。もうすぐだ。もうすぐ、私の悲願は成就するのだ。

「さあ、皆。」

「ようこそ、補習授業部合格記念パーティーへ。」

「「「……!!」」

何度も潜つたあの教室のドアを開くと、焼け落ちていた筈の机も外壁も殆ど在るべき形に……否、それ以上に新しい姿を得ていた。無論これは、

「先生、これは……？」

「シャーレの権限を使つたんだ。とある学校には賃金さえ払えればしつかりと仕事をしてくれる職人達が居てね。」

多少職権濫用な気もしなくもないけれど、それでも私は彼女達の為にプレゼントを用意したかった。費用に関しては経費処理が承認されなかつたので彼は理由を付けてティーパーティーに請求したので懐へのダメージはゼロだ。

「ただごめん、全部の部屋は間に合わなかつた。少なくとも此処と寝泊まりしていた部屋は……!?」

「せんせええええっ!!」

「わあ!?」

言葉の途中で、私のプレゼントに感極まつたヒフミが飛びついて来た。床に押し倒されながら上を見遣ると、アズサもコハルも、ハナコでさえ目を潤ませて居た。

「先生、ありがとうございます……！　ありがとうございます……！」

泣きじやくりながら私への御礼を口にするヒフミの顔は涙やら何やらでぐずぐずになつていて、それが少し面白くて……頑張った甲斐があつたと私もほつと胸を撫で下ろす。どうしよう、安心したら眠くなつて來た。今日は何だかんだ三徹目だし。

「先生、本当にありがとうございます……私達の為にこんな……」

「これは少し想定外でした……先生はいつもそうやつて私の想定を超えた事をしますね……そういう所ですよ、先生……。」

「先生……どうして、ここまでしてくれたの……？」

「頑張つた生徒に御褒美を用意するのは至極当然の事だろう。それに、青春の物語を書き連ねるならば、バックナンバーだつて必要だと思つてね。」

遂に落涙した生徒達を前に、いつもの風を装う為に意図を説明していく。あの時のヒフミの言葉を少し借りて、尤もらしい理由を付加していく私の声は、震えてはいないうだろうか？

「皆、本当におめでとう。前の分も含めて。」

「今度こそちゃんと、打ち上げをやり直そう。」

在るべき場所で、在るべき形の。一度無に帰してしまつた、ささやかな一大イベントの開幕宣言を、私は辛うじて震えて居ない声で口にした。

---

「ところで、この御馳走は何処から？」

「足早く落ち着いたハナコが当然の疑問を口にする。

「全て有志の方からの差し入れです。」

そう、何を隠そう私も私でヒフミ達が試験勉強を頑張る中で密かに

準備していたのだ。トリニティ中を歩き回つて、補習授業部に縁のある生徒達の元を訪ね回るのは中々に骨が折れた。

「このシマエナガを模したマカロンはもしや……？」

「ご明察、セイアからだよ。」

「言いつつ私はセイアからの預かり物をハナコに手渡す。

「……セイアちゃん、相変わらずですね。」

「小難しいと言いますか、気難しいと言いますか……。」

「でも、変わろうとしているのが伝わつて来ました……近々また会いに行きます。友人として、積もる話もありますから。」

「うん、そうしてあげなよ。」

あの事件を契機に彼女が変わろうとしているのは、ティーパーティーの面々から聞いていたし、何より……

### 『親愛なるハナコへ』

手渡した手紙を収めた封筒に控え目ながら書いてあるそれが、彼女の変化を如実に示していた。書いた本人多分後で赤面しながら狼狽えたんだろうなあ。

「この見るからに高級そうなケーキは？」

「ああ、それはミカからだね。丁度コハルに手紙預かつてるよ。」

「私に……？」

『コハルちゃんへ』と書かれたそれを手渡すと、彼女は食い入る様にそれを読んでいた。

「これ、綺麗……」

「アクセサリー？」

同封されていたアクセサリーに目を奪っていたコハルに声をかけてみる。アクセサリー集めが趣味の彼女がその中の一つを譲るという事は、あの一件が相当彼女の心を揺さぶったのだろう。

「……御礼、言いに行つて来たら。」

「い、言わなくてもそうするつもりよ！……あの人の事は、まだよく分からぬけど。」

それならば、これから知つていけば良い。もしかするとその繋がりが、後でかけがえの無い物になるかもしないのだから。

「アズサには……ちょっと待った、数が多い。」

「……うん、ありがとう。先生。」

差出人は、これまでアズサに救われた生徒達だった。

「…………私、氷の魔女なんて言われてたのか？」 「…………今気付いたの？」

自分に無頓着過ぎる彼女に、さしもの私も絶句しそうになる。これからは、もつと自分を大切にして欲しい。

「この人達は勝手に救われただけで、私はただ通りがかつただけ。でも、ただ虐げられていた人達が抗うきつかけになれるのなら、悪い気はしない。」

そう言うアズサの柔らかい笑みは何処か慈愛のようなものに満ちていた。誰だ、この子を最初に氷の魔女とか呼んだのは。否、違うな……アズサも、あの日々を通して変わったのだ。

「ペ、ペロロ様……!! 可愛い……はうう……」

「あ、そのペロロールケーキはナギサからだね」

「ナギサ様からですか!?」

驚きに小さく跳ねるヒフミに、ナギサからの手紙を渡す……というか、封筒にギツチギチ二詰まつてるんだけど何これ、怪文書？

「あはは……これは後でじっくり読ませて頂きますね。」

「ちなみにヒフミ、ナギサに聞いてきてつて頼まれたんだけど——ヒフミさん、今でも私達は友達ですよね？ だそうだ。」

「あはは……どうかな？」

「…………えつ」

「…………めんなさい、冗談です。今でもナギサ様は私の大切な……お友達、ですよ。」

ヒフミさん、その冗談……ナギサ様が聞いたらどう思うでしょうか……。

「今度ナギサちゃんつて呼んでみようかな……なんて、烏滸がましいですかね……？」

「うーん、多分刺激が強すぎるかもしれないな」

後から聞かされたけど、ハナコの底意地悪い仕返しがトラウマに

なつてるナギサの事だから、そんな地獄の後に天国を見せるような真似をしたらギャップで気が変になつてしまふ事だろう。

「あはは……でしたら、これまで通りが良さそうですね」

「そこは、これからで良いと思うよ。」

まだ話せる時間は残されているから、青春の続きも後始末もやり直しも、どうとでもなるんだ。そんな意味も込めて、私は口にした。

---

「そういうえば、アレは良いの？」

テーブルの上の御馳走が粗方片付いたところで私は、わざと名指しをせずに暈した質問を投げ掛けた。

「ヒフミ、実は」

「皆、聞いて下さい……実は」

「え？」

大きな荷物を取り出したアズサとヒフミは顔を見合わせる。

「アズサちゃん、それは……？」

「ヒフミこそ、何をしようとしてる？」

映し鏡の様な硬直具合に笑いを堪えつつ、

「ヒフミから皆へ、皆からヒフミへのプレゼントが有るんだよね？」

私は双方のネタばらしを盛大に執り行つた。私は、この瞬間が見たかったのだ。

「先生……まさか最初から知つてたわけ？」

「うん、でも当日皆の驚く顔が見たかつたから伏せてた。」

信じられない、みたいな顔で此方を睨むコハルに事も無げに打ち明けると、

「あら……先生も中々に良い趣味ですね？」

珍しくハナコが笑顔に怒りマークを貼り付けて居たような気がした。

「褒め言葉ありがとう！ それはそれとして、せつかく皆で選んだんだから……」

それを意に介さず私が促すと、  
「分かってる、ヒフミ。これ……」

アズサが口火を切つて、後生大事に抱えた包みをヒフミに手渡す。

「……、これは……！」

期間限定のペロロのぬいぐるみに打ち震えるヒフミ。その両目から再び涙が零れ落ちる迄はさほど時間がかからなかつた。

「これまで部長として頑張つてくれたヒフミちゃんに、私達からささやかですがプレゼントです♪」

「私が試験に受かるのは当然の事だけど、頑張れたのは……まあ、ヒフミのお陰でもあるから……」

「ヒフミには感謝してるんだ。ヒフミが居なかつたら、今の私は無かつた。これはその御礼でもある。先生と一緒に選んだんだけど……受け取つてくれる？」

「う…………うう…………」

「うわあああああん！ みんなああああああ！！！」

本日二発目の、ヒフミサイルが補習授業部と私に着弾した。

「あらあら、ヒフミちゃん…………♪」

「ヒフミ、苦しい…………」

「ていうかもう滅茶苦茶じゃん…………」

「何で私まで…………」

「うれしいです、みんな…………だいすきですうう…………」

「ひ、ヒフミ…………まだ早いでしょ、君も皆さん…………」

大号泣のヒフミの下敷きになつた補習授業部の下敷きになりながら私はヒフミを促すも、皆に抱き着いたままワンワン泣きじやくるヒフミが泣き止んだのは、その約10分後だつた。

---

「えつと……あはは、さつき先生にバラされちゃいましたけど、私も先生と一緒に、皆にプレゼントを用意しました…………」

泣き腫らした目で、ヒフミが言う。本来なら感動に打ち震える他の面々が見れたはずなのに、ヒフミが予想以上に感極まつた結果何だか場が落ち着いてしまつたのは本日最大の誤算だつた。

「アズサちゃんには、これです」

「これは……スカルマンのパークー……!!」

「アズサちゃんには部屋着が必要かと思いまして……」

「言つておくけど私はヒフミに入れ知恵してないからね、着いて行つただけ。」

「ありがとうヒフミ、それに先生！ 大切にする！」

普段のアズサからは想像がつかない弾んだ声と満面の笑みに、私もつられて笑つた。

「コハルちゃんにはこれです！」

「これ、私の帽子の色違い……なんで？」

「コハルちゃん、いつもその帽子被つてるから、スペアが必要かと思いまして」

「ふーん……まあ、ありがとう……。」

「本当は欲しがつてたくせに」

「な……先生、何でそれ言うの！ バカなの!? 先生にはデリカシーツ物が無いわけ!?」

「あ、あはは……」

この期に及んで素直にならないコハルにお灸を据える為に弄つたらマジギレされた。だが私は後悔していない。

「ハナコちゃんには……これを。」

「わあ、ありがとうございます！」

「ハナコ……今回だけ特別だからね……レジに持つて行くの大分抵抗あつたよ……」

「あらあら、私の為に二人でそんな羞恥プレイを？ そんな二人の液体が染み込んだプレゼント、大切にさせて頂きますね……うふふつ

♪

「な！ なななななな……ヒフミも先生も何やつてるの!! ド変態

!! こんなもの焚書よ!!」

「やめろコハル！ 早まるなあ!!」

ハナコが誤解を産む表現をフル動員した結果、コハルが予定調和の大暴走を始めた。えー……ここに来てまたドタバタするの……。

「あ、私はそろそろ行くね。皆にプレゼントは行き渡つたし、皆だけで話したい事もあるでしょ。」

ハナコに渡した「せいしょ」が燃やされる危機を回避したところで、私はこの場を辞する事とした。大義は果たしたし、私もお役御免だろう。

「待つてください先生、」

「どうして先に帰ろうとするの？」

「先生には、まだ言いたい事がある。」

「先程私達を謀つた分、ちゃんと返して貰わないと……。」

急に神妙な面持ちで私を引き止めたヒフミに、他の生徒達が追随する。ハナコのそこはかとなく恐怖を感じる一言にさしもの私も若干の身震いを禁じ得なかつた。

「え……どうしたの皆、そんなに怖い顔をして。」

「先生、これを受け取つて貰えますか……？」

「これは……」

思えば、一つだけ謎が残つていた。不相応な大きい荷物が、合計で三つ生徒達の手元にあつたのだ。二つは分かる。私が仕組んだ、補習授業部のプレゼント達……だが、最後の一つがまさか私宛の物だなんて、誰が予想出来た？

「私達が貰つてばかりだとでも思つた？」

「先生は、自分の事を勘定に入れて無さすぎる。」

「……えつと、それはアズサには言われたくないんだけど……。」

ダメだ、突然の事で頭が回つてない。嬉しいやら驚きやら、感動やら……悲しいほどにキレのないツッコミがそれを物語つてしまつている。

「先生には本当にお世話になつたので、最大級の御礼を……と思いまして。開けてみてください。今回はちゃんと未使用ですよ。」

「使用済みの何かを貰つた事無いので変な言い方しないで貰えませんか、浦和さん」

「あら、使用済みの何かの方が良かつたですか？ それなら今からすぐにも……」

「あんたはもう黙つてて!! 先生、こいつは放つておいて早く開けたら?」

「……わ、わかつた。」

「……これは……!」

動搖が收まらない中、小学生レベルの返答と共に包みを丁寧に破くと、ワイシャツと青いネクタイ、そして黒いベストが顔を出した。

「ありがとうみんな……凄く助かるよ……!」

私は掛け値無しの本音を、御礼と共に伝えた。実際問題このところシャツを買いに行く暇も無かつたり、ネクタイもお気に入りのものを銃弾によつて穿たれた後だつた。そう、あの時だ。

「そのベスト、ミレニアム製の防弾仕様なんです」

「こんなに薄いのに……!?」

改めて、キヴオトスの……というか、ミレニアムの技術力に脱帽しつつ、別の意味でも慄いていた。先日購入しようとして値札見て泡を吹いた苦い思い出のある代物が、今こうして私の手元にある事自体が異常事態だつた。

「こんな高価なもの……どうやつて」

「それは秘密です♡」

「まあ、そう言うと思つてたけど……」

「先生、いつも無茶するからこのくらいは必要だらうつて、ヒフミが……ただ、それに関しては私も同意見だ。」

アズサにだけは言われたくないな、と思いつつ私は口を噤む。この苦言は、実際その通りだつたから。

「先生が撃たれた時、先生が居なくなつちやうんじやないかつて私凄く心配だつたんですよ……?」

ヒフミの沈痛な表情が、私の心臓を抉つた。もしかしたらあの日の銃弾より痛いかもしれない。

「先生が居なくなつちやつたら、誰が私達の勉強を見ててくれるの?」

「先生の指揮があるから、これまで死線を潜り抜けて来れたんだ。」

「先生が居なくなつてしまつたら、誰が私の溜まつた欲ば」

「あんたは黙つてて」

「私は、私達は、これからも先生が必要なんです。」

「やり残した事も、まだやつてない事も、私達の青春の続きは、先生が居ないと始まらないんですね！」

「……大体言いたい事はヒフミちゃん達が言つてくれましたが……先生。それを踏まえて、こちらを受け取つて貰えますか？」

……私は、見誤つていた。私自身は彼女達の青春をサポートするだけの舞台装置であれば良いと思つていた。

けど、実際は。

彼女達は、私を青春群像劇の登場人物として、輪の中にずっと入れてくれて居たんだ。

そして私は、その輪に加わる為にもこれから先もずっと生きていく義務が有る。

傍で、彼女達を支えて守つて行く権利が有る。その為にも――「有難く頂戴するよ。皆、本当にありがとうございます。」

私は、手渡されたプレゼントを受け取つた。補習授業部の、仲間として。

「これからも、宜しくね。」

「よろしくお願ひします、先生！」

「うん、頼りにしてる。」

「……私達の成長する所、見せてあげるんだから」

「ご指導ご鞭撻の程、よろしくお願ひしますね……それはもう手取り足取り……♪」

こうして、補習授業部の卒業祝いのつもりが、また新しい予感を残して――あの日出来なかつた分も含めて、合格記念パーティーの夜は更けていくのだつた。

「先生、この後時間はありますか？」

突然、ヒフミが問う。

「私は帰つて仕事が……いや。」

こんな時くらいは、途中退席など無粋だ。こうなつたら、最後まで付き合つて行こう。

「あの部屋で、続きをしようか。」  
積もる話も、有るだろうから。

## 誰かの夢のようなお話（作・へきこさ）

どこかふわふわとした、現実味のない世界で、先生はセイアと二人で机を囲んで、過去現在未来の、様々な話に花を咲かせていた。二人ともその時間が永遠に続けばいいと感じていたが、しかし、先生が席を立たなければならぬ時間が、ついに訪れてしまった。

「先生、本当に、この先に行くというのかい？」

身を乗り出せば届きそうな所にいるはずのセイアの姿はなぜかおぼろげで、声もどこか靄がかかつたように、先生の耳へ届いていた。「そうか、私は寂しくなつてしまふけれど、先生の決意が固いなら、私は止めはしないよ」

先生は、何かを言おうと思つたが声を出すことができなかつた、だんだんと目の前の悲しげに目を伏せたセイアの姿と、意識がだんだんと遠のいて……そして……光の中にすっかり溶けてしまつたような気分だつた。

〔先生〕

夢の世界の縁でまどろんではいるが、耳ざわりのいい、優しい声で呼ばれた。

「ふああ、ヒフミ……？ もう約束の時間？」

あくびをしながら、目の前の少女が、約束をしてシャーレに迎えに来てくれた阿慈谷ヒフミであることを認めると、のそりと体を起こす。

「すみません、ちょっと早く着いてしまいました」

申し訳なさそうにそう言うヒフミだが、先生が時計を見ると、本来のヒフミとの約束の時間までは十分を切つていた。

出かける支度を済ませ、シャーレを出て、トリニティへの道を二人で歩く。

「最近、トリニティに遊びに行けてなくてごめんね、みんなは元気？」  
「はい！ 今でも時々集まって、遊んでいます。先生は夜中にパフェを食べたあのお店を覚えてていますか？」

先生が会話を切り出すと、ヒフミは楽しそうに、先生にとつて懐か

しい名前を挙げていく。

「コハルちゃん、すごいんですよ。勉強が得意になつて、本当に三年生の問題を解けるようになつてしまつたんです。最近は図書館の奥の方の、難しい本を読み耽つている様なんです」

最初はコハルだった、かつて『一緒にしないで』とまで言われて一度拒絶された少女は、すつかり皆の妹であり、マスコットであり、かけがえのない友達となつたようだ。

「アズサちゃんは、勉強も遊びも全力で取り組むので、いつも格好よくて可愛いんです。おかげでファンの生徒がとても多くなつてしまつたので、二人きりで遊ぶ時間が少なくなつてしまつて、少しだけ寂しいです」

次に、アズサの名前が挙がつた。言いながら、ポケットから顔を出したペロ口様のぬいぐるみを握るヒフミの手には、力が入つていたようだつた。

「ハナコちゃんは、シスター・フッドになりました」

「入つたつてこと?」

「所属という訳ではないんです。ですがその、シスター・フッドの方がハナコちゃんみたいになつてしまつたと言いますか……」

「そう……」

ハナコの名前が挙がつたが、相変わらずつかみ所のない様子だつた。しかし同時に、ヒフミはそんなハナコの心を、がっちりとつかんで離さないのだろうな、と先生は感じていた。

そして、最後に残つたのは、いつもいつも自分の事を後回しにしてしまう、心優しい子の名前だつた。待てども待てども出てこないその名前を、先生は自らが呼ぶことにした。

「ヒフミは?」

「あはは……私は、相変わらずです」

初めて会つた時から変わらない笑顔のヒフミ、その時、首から下げられた名札が目に入った。『三年 阿慈谷ヒフミ』と書かれたそれは、あのいろいろな出来事のあつたエーデン条約騒動の日から、短くない時間が経過した事を物語つていた。

「今日は、生徒交流の日だつたんだつけ」

それは、かつて生徒にとつて高嶺の花だつたティーパーティーのホストが、一般生徒たちとの交流を深めて、トリニティ運営を開かれたものにしようとする試みだつた。

「はい、ナギサ様の残していくださつた行事ですから、私達も受け継いで、ゆくゆくはトリニティの伝統になつたらいいなと思つています」「最初の一回で色々ティーパーティーの化けの皮がはがれて、どうなるかって心配だつたけど、結果的にあれでティーパーティーが身近な存在になつた氣がするね。特にミカの気さくな所を皆に知つて貰えて、本当に良かつたと思う」

「はい！……ナギサ様がミカ様の口にロールケーキを三つも突っ込んだのは、さすがに皆さん苦笑いでしたが」

懐かしそうに、名札をしげしげと眺めながらそう語るヒフミ、その名札を提げる習慣はナギサやミカほど顔が知られておらず、自分だけ都度自己紹介をしなければならなくなつて最後は面倒になつてしまつた、セイアの案によるものだつた。

その時ふと、懐かしい思い出を思い返す様に、どこか遠くを見るような目をしたヒフミに、先生は優しく声をかける。

「ティー・パー・ティーのホストは、大変？」

「大変に決まつてるじゃないですか」  
わざとらしいふくれつ面を作つて、ヒフミは先生にそう返した。

「そうだよね」

「先生も相変わらずお忙しそうですし、おあいこです」

表情を一転して、ふふ、といじらしくヒフミが笑つてそのやり取りが終わつた時、ちょうど、トリニティ聖堂で一番奥の部屋の扉の前に、二人はたどり着いていた。

「それでは、改めまして」

妙に改まつたヒフミが、コホン、と一つ咳払いをした。

「今日は、存分に羽を伸ばしていつてくださいね。ティー・パー・ティーと正義実現委員会のリーダーが、最高のおもてなしを致しますので！」

ヒフミはそう言うと、両の手で元気よく扉を開け放った。

「皆さん、先生が到着されましたよ！」

開け放たれた扉の先の光景は、まるで夢の様にキラキラと輝いて見えた。